
小野上明夜
Meiya Onogami
真っ赤に笑う
イノセント・スター
超新星
ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

イノセント・スター

真っ赤に笑う超新星

小野上明夜
Meiya Onogami

ビーズログ文庫

B's-LOG BUNKO

イノセント・スター

真っ赤に笑う超新星

小野上明夜
Meiya Onogami

ビーズログ文庫



Contents

序章　誰がための戦い——007
第一章　太陽はつらいよ——018
第二章　飴と鞭とキャンディ——068
第三章　燃えて燃え尽きて——124
第四章　星は消えゆく——163
第五章　陽はまた昇る——210
終章　闇に光る——246
あとがき——252


グランカル・アミテーシア
エリッセの担当教師であり恩人。
一等星・カノープスの称号を持つ。
エリッセ・リトラーユ
万年六等星の少女。
ディガンによって、秘められた力
〈太陽〉を覚醒させるが……？
ディガン・マキナウス
エリッセにより封印を解かれた『暗黒星』。
一等星・ベテルギウスの称号を持つという。
真っ赤に笑う超新星
登場人物紹介



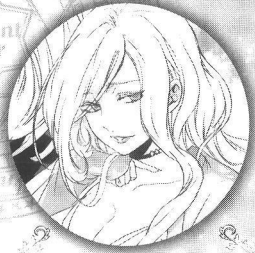
ティリス・エーデ
ハーシエルを担当する
＜導きの灯＞星団の教師。



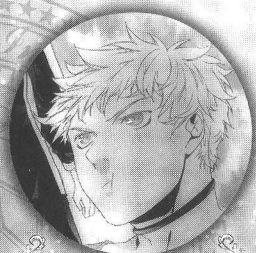
ハーシエル・ティファリア・トールズ
百年に一人の天才と呼ばれる少年。
最強の一等星・シリウスの称号を持つ。



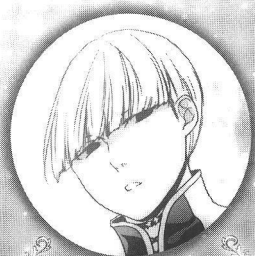
ルトエ・メーセル・ラ・レドレリカ
レドレリカ王国の現国王。
聡明ながら、生まれつき病弱。



ランゼ・リトリス
元＜導きの灯＞星団の教師。
実はギガンスティ帝国の間者。



ジャノン・グラス
常に飴を噛んで食べる＜超新星＞。
通称「マッド・キャンディ」。



ニコラ・セイドリック
ジャノンの監視役。
自身も優秀な＜星＞。

イラスト／さらちよみ



序章　誰がための戦い

南部大陸アレンディの最北端に位置するレドレリカ。その王城内の奥まった一室にて、中空に映し出された壮年の男の幻影から、悪意に満ちた結論が吐き出される。

『つまり、今回の件は我々の監督不行き届きのせいであると言いたいのですかな、レドレリカ国王陛下は？』

ため息を押し殺しながら、ルトエ・メーセル・ラ・レドレリカは小さく首を横に振った。生まれつき病弱で、ほとんど色素を持たないために、二十代前半でありながら真っ白い髪が物憂げに揺れる。

「――そういうことを申し上げたいのではありません。お気に障ったのなら失礼いたしました」

本心を言うのなら、病がちなこの身を押してでも数発ぶん殴ってやりたいところだ。とはいえ通信用の術に向かってそんなことをしても無駄だし、立場を考えればなおさらできない。

なにせ相手はギガンスティ帝国の監視卿のひとり。央海と呼ばれる海を挟む、二つの大陸で構成されたこの世界の中で、北部のバザルトーン大陸を支配する帝国の実質的な統治者なのだ。小国の王の身で、まともな反論が許される相手ではない。

『左様でございますか、ならば結構。今さら申し上げるまでもないが、我々に不満を持つということはすなわち、ステッセルとヴェストラントに不満を持つということ。お国のためにも、どうぞわきまえられますように』

監視卿の祖は、二百年前の南北大戦に敗れたギガンスティ帝国を内部から監視するために、アレンディにある有力国家が送り込んだ者たちだ。特に大陸最南部に並んだ二大強国、ステッセルとヴェストラントの出身者が多い。

近年レドレリカへの風当たりが強くなりつつある二国の名をうんざりと思い返しながら、ルトエは殊勝に頭を下げる。

「……ええ、わきまえているつもりです。ですからこそ、不満を持っていると受け取られるのを承知でご報告いたしました。監視卿のお力を疑う訳ではありませんが、再びギガンスティが世界戦争を引き起こすようなことがあってはなりませんから」

二ヵ月ほど前、冬も終わろうかという季節に、このレドレリカ王宮で起こった騒動の陰にはギガンスティの間者を名乗るランゼ・リトリスがいた。南北戦争のやり直しを堂々と口にした彼女について、監視卿に報告しない訳にはいかない。

そして、報告した結果が先の「監督不行き届きのせいであると言いたいのですかな」だ。見下しと保身にまみれた対応を覚悟はしていたが……、と、顔を伏せているのをいいことに、ルトエは忌々しげに表情を歪めた。

それを見咎め、背後に控えていた宰相にして国王の夫、イライアス・ルードラが瞳を細める。ルトエが王女であった頃から教育係のような役目を担っていた彼が注意する前に、監視卿が重々しいため息をついた。

『――とはいえ、現在のギガンスティ王が不遜な若造であることは事実。ランゼという女の言葉、どこまで信じていいものか分かりませんが……一応調査はさせましょう』

「ありがとうございます」

思っていたよりもあっさりと、望みの言葉は引き出せた。最悪一笑に付されることも覚悟していたことを考えれば、幸先のいいスタートと言えるだろう。

ほっと安堵の息をついたルトエの青白い顔を、監視卿はじろじろと眺め回す。

『それはそうと、お体は大丈夫ですか。まだ季節の変わり目には、体調を崩されることも多いとお聞きしておりますが』

安心するには早かったようだ。ルトエは慎重に言葉を選んで応じた。

「……ご心配痛み入りますが、大事ありません。お心遣い、まことに申し訳ない」

『弟君のほうが王には相応しかったのではないか、などとこれ以上噂されぬよう、お体

には十分お気をつけられよ。では、御前を失礼いたします』
余計なひと言を付け加え、監視卿の幻影は消えた。

気が重い対談が終わり、ルトエは疲れきった体を椅子の背もたれに預けた。
実際に話をしていた時間はさほどのものではなかったはずなのに、軽い発熱を感じる。
噂が消えない訳だ、と苦笑いする彼女の額に、冷たい手が触れた。
「……イライアス」
ほんのりと微笑む彼女に対し、手の主であるイライアスの態度は淡々としたものだ。
「失礼ですが、お疲れのようです、陛下。少しお休みを……、!?」
生まれた時からしかめ面だった、と揶揄されることもある宰相の、強靱な鉄面皮が揺れた。
「天空の覇者、太陽が三、終焉の夕よ！　刃を断じる不屈の盾となれ!!」
見えない盾を生み出す呪文を唱えると同時に素早くルトエの前に立ち、油断なくあたりに視線を配る。
息を呑んで見守る国王夫妻の前に、再び通信用の幻影が生じた。
それだけなら、ルトエもイライアスもそれほど驚きはしなかっただろう。先の監視卿が

嫌味の忘れ物でもしたのか、と思ったに違いない。

だが中空に現れたのは、黒に近いダークグレイの髪を長く伸ばした、ふてぶてしい面構えの若い男だ。そして彼の姿を形作るために発された〈煌〉は、二人が知るものではない。巡る三つの太陽と三つの月に照らされたこの世界には、時折それらの光を受けて、己の望む奇跡として跳ね返す力を持つ異能者が生まれる。その力を〈煌〉と呼び、〈煌〉の保持者を〈星〉と呼ぶ。

中でもイライアスは最高位の能力を持つ〈星〉のひとり、ベガの称号を持つ一等星だ。妻であるルトエは〈無明〉、もしくは七等星などと呼ばれる〈煌〉を持たない身だが、訓練により多少は〈星〉の放つ〈煌〉を判別できる。

二人が知らない、なのに〈綺羅星〉と呼ばれる王宮付きの〈星〉たちに守られたこの場に、易々と幻影を生じさせるほどの〈煌〉の持ち主。

『初めてお目にかかります、レドレリカ国王、ルトエ・メーセル・ラ・レドレリカ陛下』

自分の登場が与えたインパクトを楽しむような間を置いてから、幻影の男が芝居がかったしぐさで頭を下げる。

「貴殿は……、まさか」

思わず立ち上がったルトエは、イライアスの背中越しにこちらを見つめる男をまじまじと凝視した。

『すでにご紹介いただいたようですね。不遜な若造、リューナー・ギガンスティと申します』

侮蔑の言葉を堂々と復唱し、ギガンスティの帝王はにこやかに笑っている。

もっともギガンスティ帝王といえども、実質的な権限はないに等しい。敗戦国となった後、ギガンスティの帝王は「贖罪の王」と呼ばれ、連日犯した罪を償うために祈りを捧げるだけの存在になったはず。聖職者のような白い装束が、その証である。

だが「贖罪の王」と呼ばれるには、リューナーが浮かべた笑みはあまりにも尊大だった。名ばかりの称号であるはずの「帝王」が、相応しく見えるほどに。

「――どうやって私に話しかけていらっしゃるのか。この場所にはあらかじめ許可を得た者しか」

最初の驚きを通過したルトエは、落ち着いた声でそう尋ねた。しかしリューナーは、当然の質問を遮ってしまう。

『無粋な話はよしましょう。おっしゃる通り、少々強引な手を使っているため、残念なことにあなたとお話しできる時間は少ない』

監視卿の許可を得ていないことを匂わせてから、リューナーはさっさと本題に入った。

『まずは、謝罪させていただこう。先日は我が国の者が、あなた方に多大なご迷惑をおかけしたようだ』

「……お認めになるのか、結構。なら後日、公式な謝罪をいただきたい」

非公式な対談にこれ以上応じるつもりはない。素っ気ないルトエの返答に、リューナーは意味深長な笑みを浮かべた。

『あまりつれないことを言わないでいただきたいですな。二百年前の悲劇の繰り返しは、お互い避けたいところでしょう？』

急に気安くなった物言いに、イライアスが眉をひそめた。しかしルトエは、「二百年前の悲劇」という言葉に敏感に反応した。

南北大戦の爪痕は、今もレドレリカに深々と刻まれたまま。特に「学徒虐殺」と称される悲劇については、先日のランゼの件に絡んで生々しい記録を読み返したばかりだ。

「……あなた方は、悲劇の繰り返しを願っているのでは？」

「陛下、この方が本物かどうかさえ分からない状態ですよ」

かすかに振り返ったイライアスが咎めた。忠誠心を試す監視卿の罠を懸念している様子だが、リューナーは彼を無視してルトエに話しかける。

『前回と同じ条件で南北戦争が起これば、同じ悲劇は繰り返されるかもしれない。しかしですね、賢明なるレドレリカ国王陛下。南北大戦が起これば、またレドレリカは最前線になる。それは、誰が決めたことですか？』

虚を衝かれ、瞳を見開くルトエの心に、甘い毒のような言葉が染み入っていく。

『最前線というのは、敵味方が直接ぶつかり合うところという意味でしょう？　ですから俺とあなた方がもっと仲良くなれば、敵味方も変わり、従って最前線も変わる。簡単な話です』

これは本物のギガンスティの王だ、とルトエは直感した。〈無明〉の身で何が分かる、と言われそうだが、ランゼが起こした一件について調べるにあたり、彼女を派遣したとされるギガンスティ王についても調べさせていた。

体面を重んじ、もめ事を嫌う監視卿の力により、南部大陸にはほとんど情報は流れてこない。だが歴代のギガンスティ王とは違い、当代帝王リューナー・ギガンスティの持つ一等星リゲル・ケンタウリの称号は、ただの飾りではないと聞く。

そして、一生を祈りに費やすつもりがなさそうなことも。

「――ギガンスティ帝王陛下。今の話は、聞かなかったことにしておきましょう。この会談自体、なかったことに」

『警戒心が強いですな、まあよろしいでしょう。慎重さは王の大切な資質です。告げ口もなさらないとは、宰相閣下はよい王をお育てになったようだ』

そつなくイライアスに笑いかけてから、リューナーは不敵な表情に戻った。

『ですが、警戒心が強いのと臆病なのは似て異なるもの。いずれまたお話しする機会も

あるでしょう。その際は、お互いにとって有益な判断をなさるよう願っております』

肉食獣のように笑う瞳の奥で金の火が踊ったように見えて、ルトエははっとした。だが見間違いだったのか、リューナーの放つ不気味な威圧感が見せた幻だったのか、見つめ直したその瞳は髪と同じダークグレイだ。

『そしてその時は、ドレスアップしたあなたを拝見したいものだ、美しい国王陛下。叶うならば俺も、別の装束でお会いしたいものですね。――俺に白い衣装は似合わない、そう思いませんか？』

挑発的な問いかけと微笑を最後に、リューナーの姿がかき消える。皮膚をぴりぴりと刺激するような、強烈な〈煌〉も同時に消えた。

大きなため息をついたルトエは、音を立てて椅子に腰を下ろした。全身にうっすらと汗をかいている。

「――お疲れでしょう、陛下。今度こそ、お休み下さい」

「……ああ」

気怠く答えたルトエは、無表情に戻った夫にそっと話しかけた。

「……お前も、少し、休まないか」

膝の上、遅れればせながら震え始めている彼女の手を一瞥してから、イライアスは事務的に頭を下げた。

「申し訳ありませんが、ギガンスティの動向、特に王の周りの動きを綿密に調べる必要性が増しましたので。失礼」

至極もっともな発言を、止められるはずもない。しおれた心を押し隠し、ルトエが軽くあごをしゃくると、イライアスはただちに退出していった。

「……グラシカルたちにも、連絡してやらないといけないな……」

ひとりきりになったルトエは、震えを帯びた手を自ら握り締めた。その唇から漏れたのは、かつて〈綺羅星〉として側に侍ってくれていた、ほのかな想いを抱いたこともある一等星の名前。

「しかしエリッセとあの『暗黒星』は、うまくやれているのだろうか……」

さらに現在は教師であるグラシカルの生徒、そしてエリッセの押しかけ師匠となった青年のことを思い出す頃には、彼女の表情は幾分和らいでいた。

「……まあ、どう考えてもうまくやれていないだろうが……エリッセはあれで案外懐が深い少女のようだ。『暗黒星』だろうがなんだろうが、きゃーきゃーわめきながらも、いずれは自分の成長の糧とするだろう……」

もしも本当に南北戦争が起こるのならば、最前線の位置がどこになろうが、エリッセの能力は重要になる。

せめて彼女の内に眠る力が目覚めきるまでは、自分がしっかりとレドレリカを守らなけ

ればほてる体を椅子に預け、冷静に考えを巡らせ始めたルトエの表情は、王のそれになっていた。

第一章　太陽はつらいよ

小国レドレリカの大部分を占める草原のあちこちに、星団と呼ばれる〈星〉たちの学舎が存在している。宿舎や教育施設はもちろん、各種商業施設まで備えたものも珍しくなく、ほとんどひとつの街だ。

中でも最も有名なのは名門〈導きの灯〉。数年前に長年空位だった一等星中の一等星・シリウスを輩出したこの星団で学べるのは、将来を嘱望された優秀な〈星〉たちばかりである。

そんな〈導きの灯〉に数多く建った教育棟のひとつ、高さで言えば二階建ての建物をそっくり使っただだっ広い講義室。階段状になった席の一番上段の一番隅っこに、エリッセ・リトラーユは小さくなって座っていた。理由は、目立ちたくないからだ。

でもだめだ。

エリッセ自身は肩先で切り揃えた淡い金髪とすみれ色の瞳以外特徴のない、『彼』曰く十人並みの平凡な十五歳の少女。容姿以外で目立つ特徴といえば〈導きの灯〉で八年学ん

でいまだに六等星、という悲しい現実だけ。

しかしエリッセの平凡さを、隣でふんぞり返った『彼』の鬱陶しいまでの派手さが補ってなお余りある。

「なんと下らん講義だ。大半が教科書を読み上げるだけ、しかも教科書の著者は自分、合間にさもしい自慢話。これほど身にならん授業をああも平然とできるとは、逆に賞賛に値する」

「……ディガンさん……」

組んだ脚を不作法にも机の上に乗せ、片手に古びた本を持ったまま半眼でしゃべる彼、ディガン・マキナウスの名をエリッセはこわごわと呼んだ。

年の頃は二十代半ば。襟足がやや長い漆黒の髪、その下に覗く切れ長の金色の瞳。すらりと伸びた足から逞しい胸元まで、黒で統一された衣装に独特の美学を感じさせる美青年。〈導きの灯〉に住まう者は生徒なら黒地の一部に白いライン、教師なら白地の一部に黒いラインの入った制服に身を包んでいる。十日に一度の休日ならとにかく、少なくとも授業の最中はこの服装規定を守らねばならないのだが、ディガンは頑として着替えようとしない。

曰く、「同じ制服で並ぶと、よりオレ様の美貌が際立つことになり、他の男どもに悪い」そうだ。妥協してくれたことは分かってるんだけどね……と、自分と同じく首に巻かれた

チョーカーをちらっと見たエリッセを無視して、ディガンはしゃべり続けている。
「つまりこれは、己の神経の太さを見せつけ、お前たちもこれほど図太く世渡りせよ、という意味の講義か？　深遠かつ迂遠だな。単純に精神力を鍛えたいのなら、ここにいる百人ほどの〈星〉たち同士で実戦でも行ったほうがいいんじゃないか」
ばん、と手にしていた本を閉じる音が、高い天井に反射してあたりに響き渡った。
「ちょっと、ディガンさん……」
「なんだったら、オレと奴とで見本を見せてやろうか。中年男の不細工な顔を見るのも飽きただろう？　若く美しいオレ様が、華麗に戦い、華々しく中年を叩きのめす様を」
「ディガンさん、お願いですから黙るか出て行くかしてもらえますかねえ!?」
できれば黙って出て行ってほしい。切なる願いを胸に秘め、ノートの陰から小声でささやいたエリッセを見るディガンの金の瞳が、我が意を得たり、とばかりに光った。
「ようやく時間の無駄だと分かったか。よし、では出て行くぞ小娘」
都合のいい解釈をしたディガンが、革製のブックカバーに覆われて題名が見えない本を小脇に抱えた。そのまま身軽に立ち上がるなり、エリッセの手首を摑んで引っ張る。
「い、いや私じゃなくてディガンさんだけ、きゃあっ!?」
バランスを崩しかけたエリッセの眼の前で、小さな〈煌〉の光が弾けた。攻撃力のない、視界を焼くだけの光だが、ただでさえ足元がふらふらしていたエリッセには威力絶

大だ。

「あう！　い、いたたた……」

ディガンに手首を掴まれたままよろめいて、膝頭を思いきり机にぶつけてしまう。『不幸の星』がなくなった今となっては懐かしい痛みに、感慨に耽る暇もなく、怒りに震える叫びが浴びせられた。

「ああ、出て行くがいい、二人揃って……!!」

閃光と怒鳴り声の発信源は、一階部分にしつらえられた壇上で講義を行っていた中年の教師だ。白いものが交じり始めた濃い茶の髪を振り乱し、まくし立てる彼の名はロージナウ・バルガス。

「紳士的に無視してやっていれば、でかい声で延々と……!!　エリッセ、それにマキナウス先生!!　あなた方は毎回毎回、一体どういうおつもりですか!?」

……そういえばこの人はディガン・マキナウス「先生」なんだよね、とエリッセは今さらなことを思った。表向きのものとはいえ、彼がそういう役職に就いてから一ヵ月以上過ぎているはずだが、正直思う。

「似合わない……」

聞き取られないよう小さく口の中でつぶやくエリッセとは対照的に、ディガンは講義室中に響くような大声で堂々と答えた。

「ただでさえ出来の悪いオレの生徒に、出来の悪い教師にかかずらっている暇はない、というつもりだ!!」

「きゃきゃー!?」

思わずエリッセが叫んでしまうが、ロージナウはあまりの言われように絶句している。

それをいいことに、ディガンは無意味に前髪などかき上げながら続けた。

「しかも残念なことに、この小娘は地味な暗記だけは得意ときている。つまり、貴様のただ教科書を読み上げるだけの講義なんぞ受けなくても、オレと実戦訓練をしながら片手間に本を読めば済む、ということだ!!」

「難易度が高い片手間ですね!?」

講義室中の視線が突き刺さっているのを感じ、身を竦めながらエリッセが突っ込む。そうしている間に、ロージナウも立ち直ったようだ。

「ふ、ふん、いつもそうやって私を見下しているがな……！　貴様だってしょせんは二等星、同じエリッセ付きの教師とはいえ、しょせんは『あの』グラシカル・アミテージアのおまけに過ぎん!!」

二等星。

グラシカル。

連発された危険な単語に、エリッセの血の気が引く。反射的にディガンの首元、二つの

輝石がきらめくチョーカーに視線をやってしまったが、すぐに逸らした。

持てる〈煌〉の大きさにより、〈星〉たちは六つの階級に分かれている。最下位がエリッセのような六等星、最高位は一等星。

そしてそれは、寝る時も着用を義務づけられたチョーカーに並ぶ等星石で一目瞭然なのだ。すなわち世界に二十一人しかいない一等星であるグラシカルと違い、ディガンはローシナウと同じ二等星。

「――誰が、グラシカルのおまけ、だと……？」

「きゃーのきゃーのきゃー!!　だ、だめですバルガス先生、そこに触れちゃだめ……!!」

制止も虚しく、ディガンが放出した強大な〈煌〉に押され、教科書やらノートやらがばらばらと机から落ちた。周囲の生徒たちも「まただよ」「どうせなら、授業が始まってすぐにやってくれりゃいいのに」などとぼやきながら、慣れたしぐさで距離を取り始める。

「きゃああッ!!」

まだディガンに手を掴まれたままのエリッセは逃げられず、泡を食いながら癖で頭を庇った。しかし、春が来る前なら必ずや体のどこかにぶつかったはずの文具たちは、てんでばらばらに床に跳ねるのみ。

これも、ディガンさんのおかげ。少しだけ胸の奥が暖かくなったのも束の間、頭上で雷のような怒号が炸裂した。

「この！　ディガン様の!!　どこに!!　グラシカルに劣る部分がある!?　貴様のような人望も髪も薄い中年なら二等星でも十分すぎるぐらいだが、世界一強くてかっこいいオレ様は、あえて二等星に身をやつしているんだ!!　はっ、それとも貴様、すでに髪だけでなく脳まで老化が進行中か!?」

「な、なななな、なんだと貴様ぁぁ!?　私は禿げてなどいない、家系的には白髪になるだけだ!!」

「グラシカル先生にディガンさんより劣る部分なんてありませんけど、とりあえず、やめてえええええぇ!!」

三者三様のわめき声に、授業終了を告げるのどかな鐘の音が重なった。

半泣きでエリッセが押し留めたので、どうにかディガンは無為な争いを始めずにいてくれた。ロージナウも毎度のことなのでさすがに慣れたのか、「劣等生を矯正するために、劣等教師を呼ぶとはどういうことだ!!」と罵りながらも去っていった。

心の傷がまた増えたが、ひとまずは、助かった。ほうっと全身で息を吐くエリッセと連れ立って講義室を出、石畳の上を歩きながら、ディガンが空を睨み上げる。

「チッ、結局時間通りか……あいつの授業には出るなと言っただろうが、小娘」

見上げたその先には、第三の太陽、終焉の夕が昇り始めている。春とはいえ降り注ぐ陽光は茜色を帯び始めており、夜が近づいていることを教えていた。

もっとも〈星〉であれば、空の羅盤と呼ばれる能力により、巡る三つの太陽と月の位置は屋内にいても把握できる。昔はそれさえまともにできなかったりした私だけど、と思いつつ、エリッセは抗議した。

「出ない訳にはいかないんですよ!!　言ったでしょう、もうすぐ昇星試験なんですって!!」

「ああ、お前が七回受けて七回落ちたアレか」

「違います!!　七回中三回は不慮の事故により受けられていませんから、正確には四回受けて四回落ちたんです!!」

「……確率で考えれば一緒じゃないか、それは」

白けた顔でディガンが突っ込んできた。内心怯みながらも、懸命にごまかす。

「と、とにかく!　ディガンさんと出会ったのだって、元はといえば昇星試験に受かりたかったからであって!!　私だってバルガス先生はグラシカル先生に対する嫉妬がすごいし、私にもいちいち嫌味ばっかり言うから好きじゃないですけど!!　でも筆記試験は、あの人の授業のウェイトが高いんです!!」

力説するエリッセに、ディガンはさも下らなそうに鼻を鳴らす。

「嘆かわしい話だ、等星を上げるために小手先の試験対策とは……そんなことをせず、敵のひとりや二人自ら屠ってくれれば、上官も認めてくれるだろう」

「上官って誰!?　いや、だから、今は戦時下じゃないんですけど!?」

相変わらずディガンの常識は現代のそれとずれている。無理もないとは分かっているが、おおっぴらにできることでもないので、エリッセは小さな声で反論した。

「だ、大体バルガス先生のことを中年中年言いましたけど、ディガンさんは実質二百歳以上じゃないですか……中年どころか、おじいちゃ、ひいっ!?」

氷のように冷たい視線を感じ取り、反射的に顔を上げたエリッセはぴんと背筋を伸ばした。

「――今日はずいぶん、風の音がうるさいな。そう思わないか？　小娘」

金色に燃える瞳を持つディガンの正体は、二百年前の南北戦争の際〈夜の底闇〉に封じられた『暗黒星』。

本人の弁通り、現在はあえて二等星として〈導きの灯〉の教師を装っているが、元々彼は一等星・ベテルギウスの称号を持っていたという。その上禁呪『暗黒星』を用い、他者の〈煌〉を喰らうことまで可能な危険人物だ。

「本当デスネー、風サンッテバオシャベリー。風ノ音ガオジイチャンッテ聞コエルコトッテ、ヨクアリマスヨネー」

劣等生として八年あまり生活し、若干卑屈に成長したエリッセは長いものには巻かれる主義である。まったく心の入っていない相槌に一応納得したのか、ディガンは話題を戻した。

「大体昇星試験なんぞ、どうでもいいだろうが。少なくとも今の採点方針が変わらない限り、お前は百年経っても六等星のままだ」

「すごくはっきり言った!?」

私には気を遣わせるくせに、とショックを受けるエリッセにディガンは肩をそびやかす。

「生憎となまくら刀で斬りつけるようなせこい真似は、オレ様の性に合わんのでな」

相変わらずの態度で言いきった後、彼はふと表情を改めた。

「分かっているだろう？　お前の価値は、〈星〉としての等星じゃない」

「わ、分かって、ますけど……」

試験が近いせいだろう。授業が終わった生徒たちがすぐに図書館などに向かったため、周りにほとんど人気がないことを確認しながら、エリッセもひそひそとささやき返す。

「分かってますけど、だからって、努力を放棄するのも……それに、私のその……、例の力を制御するためにも、等星を上げたほうがいいような気もするし……」

暮れなずむ空を照らし出す、三つ目の太陽の光が妙にまぶしく感じられて、エリッセはそっと眼を伏せた。

〈星〉としては最底辺の能力しかない自分の真の力は、その〈星〉を輝かせる〈太陽〉なのだと……それが分かったのも、一応ディガンのおかげだ。

ばれたら大騒ぎになることは間違いなく、王宮や星団からは厳重な箝口令が敷かれている。そのため表向きの扱いは変わらないどころか、「劣等生をこじらせて禁呪にまで手を出しただめ生徒に、専任教師が別に呼ばれた」というさらなる屈辱を受けている最中である。

「だったらなおさら、小手先の試験対策などやめて、純粋に修行を積めばどうだ」

「きょ、教師らしいこと言いますね、ディガンさんてば、さすが演技もお上手で」

「グラシカルのためか？」

適当なよいしょでごまかそうとしたのに、ディガンはずばりとグラシカル・アミーテジアの……エリッセが敬愛してやまない担当教師の名を出した。男手ひとつで育ててくれた父を失って、途方に暮れていたエリッセの素養を見出し、〈導きの灯〉入りさせてくれた彼は恩人だ。

「ま、まあ、それは……だって、また私が落ちたら、またグラシカル先生の評判が悪くなっちゃうし……」

国の機関である〈導きの灯〉で暮らす教師も生徒も〈星〉であり、国有財産である。生活のすべての面倒を見てもらっている以上、常に一定の成績を保っていなければ追い出さ

れる可能性がある。
　無論エリッセは希有な素養の持ち主と判明したし、グラシカルは元からカノープスの称号を持つ一等星だ。追放の憂き目に遭うことはなかろうが、口さがない噂が立つのは避けられないだろう。
「大体〈導きの灯〉の男の人たちは、心が狭すぎるんですよね！　いくらグラシカル先生がかっこよくて強くて優しくて賢くてもてもてだからって、あることないこと言いまくって!!」
　拳を握り、憤るエリッセにディガンが冷ややかに突っ込む。
「奴も脛に傷持つ身だ。下手に弁解しないところが女には潔く見えるだろうが、男には胡散臭く感じられるんだろう。そして、オレよりは下だがそこそこ出来のいい奴への中傷のほとんどは、お前の不出来についてだ」
「わ、分かってますってッ、そんなのッ!!　だから私は……!!」
　誘導尋問に引っかかったことに気づき、エリッセは慌てて口をつぐむ。ディガンは小馬鹿にしたようにあごを反らした。
「だからお前は、あいつがお前をどう扱ったかも全部忘れて、優等生になろうとしているんだろう？　泣ける話じゃないか、笑わせる」
　意図的に心の底に沈めていた事実が、無理やり引き上げられようとしている。一瞬硬

直したエリッセだが、そもそもディガンがそれを指摘できる立場だろうか？

「……い、いや、ディガンさんだって、私を育てて喰らうつもり……、ひぃっ!?」

前提がおかしくないか、という突っ込みをしかけた途端、鋭く睨みつけられた。ずるい、と恨みがましく思いながらも、別の攻め方を探すしかない。

「ディ、ディガンさんだって……、私をまともな〈星〉にするため、つけられた教師だってことになってるのに……その私がいきなり昇星試験に落ちたら、立場ないでしょう……？　バルガス先生にだって、また妙な因縁をつけられちゃいますよ……」

「……ふん。どう聞いても、オレへの気遣いは後付けだな」

白けたようにディガンは言うが、エリッセは懸命に首を振った。

「い、いえその！　あ、後から、考えたことは否定しませんけど……でも、ディガンさんの悪口を……正直言われてもしょうがないとは思いますけど、あんまり言われるのも嫌ですし……」

少なくともロージナウとの件については、毎回挑発するディガンが悪いと思う。けれどディガンと出会わなければ、自分はいつまでも禁呪『不幸の星』を背負った哀れな六等星でしかなかっただろう。

「だってディガンさんは、なんだかんだ言って、私のためにいろいろしてくれたじゃないですか。もうちょっとだけ言動と行動を改めれば、いっそ何もしゃべらなければ、見た目

は確かにかっこいいんだから……、ひぃ、すいません、なんでもないです!!」

「ふん」

つい余計なことを口走ってしまい、自主的に黙ったエリッセを見下ろしてディガンが鼻を鳴らす。

「受けた恩義を返さないのはグラシカル先生の教えに背く、か。……確かにあいつには、教師の才能があるようだ。ついでに詐欺師の才能もな」

それきり彼も黙り込んだ。冷たくなり始めた風は、気まずい空気までは打ち払ってくれない。

このまま例の訓練に、しかもグラシカルと一緒に突入するのかと思うと、考えただけで憂鬱だ。自然と足取りが重くなるエリッセを、聞き慣れた声が呼んだ。

「あ、エリッセ」

ディガンに従えられ、とぼとぼ歩くエリッセに気づいたのは二人組の女生徒である。エリッセと同じく、かっちりした黒いジャケットの袖口とスカートの裾には一本の白いライン。違うのは首の等星石が、六つではなく四つであること。

「あの、ディガンさん、友達が来たんで！　すいませんけど、先に行って下さい」

助かった、さすが持つべきものは友達だ。たとえ私を置いて四等星になっていても友達だ、と思いながら、エリッセは二人に手を振った。

「タタ、リゼイン、久しぶ……ちょ、ちょっと待って二人とも!!」

ところが同い年の親友たちは、絶対にこちらを見ていたはずなのに、素知らぬ顔で行き過ぎようとしている。

「待って、は、話そうよ、何か!!　天気の話とかでいいから!!」

「えー、だってぇ、ねえ」

「補習があるんだろ？　これから。そのために新しい教師までつけたってことなのに、邪魔しちゃ悪い」

くねくねと体をくねらせつつ、時折ディガンを見上げて意味ありげににやにやしている背の高い少女はリゼイン。口調も性格も非常にさっぱりしている、小柄な少女はタタだ。

最近朝から晩までディガンと（強制的に）一緒、授業が終われば「補習」に引っ張っていかれるという有様だったせいで嫌われてしまった、という訳ではなさそうだ。代わりにリゼインが誤解している様子はあるが、この際それは後回し。

「いや、そうだけど、久しぶりに会ったんだし天気の話でも……、痛ッ!?　ディガンさん!?」

友人をだしにしようと粘るエリッセの頭を、ディガンが手にしていた本で軽くはたいた。そのまま彼女を追い越し、すたすたと歩いていく。

「言っておくが、オレはお前の大好きなグラシカルなんぞより、かっこよくて強くて優し

いんだからな。いいかげん分かれ」
　追い抜きざまの早口な台詞にも、グラシカルのこととなればエリッセはつい反論してしまう。
「いや、それはちょっと……せめて同等ぐらいかと……、いえ、なんでもないです!!」
　ディガンもディガンで、足を止めて睨んできた。冷や汗をかいているエリッセに、低い声で命令が飛ぶ。
「先に行っているから、後からちゃんと来いよ。分かっていると思うが、寄り道をしたら……」
「し、しません、ちょっと友達としゃべったらすぐ行きますから!!」
　必死で答えるエリッセの言葉を聞いているのかいないのか、ディガンは歩いていってしまった。

　立ち並ぶ教育棟の向こうに、黒い長身が吸い込まれていく。
　それを見送ったエリッセは大きく息を吐き出し、リゼインは黄色い声を上げた。
「きゃーっ、すごいねえディガン先生、今日もかっこいいっっー!!」
「……顔はね。あ、能力もあるね……、でもその、性格がね」

これが、ディガンさんに対する一般的な反応なんだろうなあ……と思いながら、エリッセは力なく相槌を打った。きれいに編まれた黒髪のおさげを鞭のように振り回し、盛り上がる友人に水を差す気はないが、どうしてもこういう反応になってしまう。

とはいえ赴任直後ならとにかく、あの性格が知れ渡った今でもこうやって騒げるのは、なんでも恋の話に結びつけてしまうリゼインぐらいだろう。

「もうもう、グラシカル先生といいハーシエルくんといいディガン先生といい、エリッセの周りにはいい男がいっぱいだね！　で、誰が本命なの？」

興奮したリゼインの質問に、エリッセはむせて咳き込みそうになった。

「ちょっ、待って、グラシカル先生は確かにすてきな人だけどお兄さんみたいなものだし、ハーシエルくんは十一歳だよ!?　それに」

「それに？」

「……それに、その、む、向こうはシリウスだよ!?　私との釣り合いが取れないよ!!」

ハーシエル・ディファリア・トールズ。若干十一歳の天才少年は、一等星の中の一等星・シリウスの称号を持っている。エリッセからしてみれば、嫉妬する気にさえなれない相手だ。

レベルが違いすぎるためか、人を寄せつけない性格の彼とは比較的仲がいいほうだとは思うが、今なら分かる。ハーシエルの目当てはエリッセではなく、エリッセと仲のい

い……

「はは、何言ってるんだよエリッセ、等星で言うなら全員と釣り合いが取れないだろ？」

仲のいい友達のどちらかなら、素直に応援したんだけどなあ……と複雑な気持ちになっているエリッセを、相変わらず遠慮のないタタの言葉が現実に引き戻した。はしばみ色の短髪が似合うこの友人は、時に明るい物言いで人を傷つける。

「……ま、まあそれはそうだけど……あと、ディガン……先生は、ないから。絶対、ないから」

ディガンさん聞いてないよね、とひやひやしながらエリッセは断言した。こんな話をしていると知られたら、きっと向こう百年ぐらい馬鹿にされる。

日頃「十人並みの小娘」とエリッセを評するディガンなのだ。いかにも彼が好きそうな、華やかな美女ではないぐらいの自覚はあるし、エリッセにとっても好みの男ではないからどうでもいいが。

「そもそも団内の恋愛は禁じられてるんだから、そういう話はやめようよ、リゼイン……」

「だってさぁ、若い男女が集まってるっていうのに、毎日勉強ばっかりでつまんないんだもん。たまには潤いがないと、やってられないよー」

ぼやくリゼインもタタも、手に何冊か参考書を抱えている。どこかで勉強するつもりで移動していたのだろう。

「あ、そうか、ごめんね、邪魔して……」

現在四等星である彼女たちは、今年の試験に受かればついに三等星。〈導きの灯〉の教師になることも、王宮に仕官することさえも可能な等星に挑戦するのだ。

「三等星になるって、相当難しいらしいよね。えっと、ほら、私、落ちた時に自分を慰める方法はいっぱい知ってるから!!　よかったら」

「気にするなよ。大体エリッセは、人の心配をしている場合じゃないだろ？」

にこやかなタタの言葉が、ぐさりと胸に突き刺さる。リゼインまで珍しく、恋愛以外の話に乗ってきた。

「そうだよ、だって次も落ちたら、記録更新だよ？　まあ七回落ちてる段階で、すでに新記録なんだけど。せっかくディガン先生にも来てもらったんだから、しっかりしないと!!」

「そうそう、最近は前みたいにその辺を歩いていたら植木鉢が降ってくるとか、ひとりだけ腐った牛乳に当たるとか、そういうこともなくなったじゃないか。きっと運の巡りがよくなってきたんだよ、これなら今度こそ受かるって!!」

「う、う……、うん」

運が悪いから落ちた訳ではないとか、そもそも七回落ちた訳ではないとか、いろいろと言いたいこともあったが、状況的にうなずくしかなかった。がんばってね、という無邪気な言葉に引きつった笑顔で答えながら、エリッセは二人と別れ、ディガンを追いかけてと

ぼとぼと歩き出す。

「……本当に、『不幸の星』はなくなったんだよね……？」

禁呪『不幸の星』。エリッセに日常的に不幸を与えていた禍々しい力を、ディガンの『暗黒星』が喰らってくれた。

出かければ雨が降る、選んだ物が必ず壊れているといった不幸は確かになくなった。しかし……

ふう、とため息を零した瞬間だった。

「え？」

体の中心に熱源を感じた。

「え、やっ、またっ……!?」

素早く周りを見回したエリッセは、とっさの判断で手近な建物の陰に隠れた。その間にも、熱の波動は外へと拡散していく。

熱い。

これ以上、この熱を、光を、身の内に留めておけない。

八年〈星〉として生活し、鍛えてきた〈煌〉とは違う。輝きを返す力ではなく、輝きそのもの。

「だ、だめ、だめっ……!!　……あっ」

発生した時と同じ唐突さで、熱源が消え失せる。

残ったのは言いようのない気怠さと、体積を増した不安だけだ。

「だ、誰にも、分からなかった、よね……？」

冷たい汗に濡れた額を拭い、折り目がついたスカートをはたいてエリッセは立ち上がった。数度深呼吸をして、発作じみた力の発動がまた起こらないことを確認してから、そっと陰から抜け出す。

冬の終わりのレドレリカ王宮にて、ディガンの『暗黒星』に触発されて顕現したエリッセに眠る〈太陽〉。

使い方次第では恐るべき能力だと、散々聞かされた。太陽と月がなければ〈星〉は輝けないのだから、大切に育てなければならない能力だと、頭では分かっている。

でも。

「〈太陽〉も、私にとっては『不幸の星』と変わらない気が……おまけに『暗黒星』まで憑いてるし……」

これ以上考えていると、「補習」に遅れてしまう。疲れた体に鞭打って、エリッセは目的地に向かって足を速めた。

一日の授業が終わった後、エリッセの「補習」が行われる場所は決まっている。〈導きの灯〉星団の外れ、普段はあまり人気のない資料館の地下だ。

資料館とは、団外への持ち出しを禁じられた資料が厳重保管されている建物である。そしてその地下には、外部に〈煌〉が漏れないように術を施された部屋がいくつか用意されている。

「遅い!!　このオレ様を待たせるとは、何様のつもりだ小娘!!」

ディガンと初めて出会った場所でもある石造りの地下室に足を踏み入れるなり、怒号が鳴り響いた。ひい、と思わず顔を両手で庇うエリッセに、対照的に穏やかな声がかけられる。

「君こそ何様だよディガン。ああ、疲れた顔をしてるね。ちょっと休憩してからにしようか、エリッセ」

ディガンには冷たい声の主は、〈導きの灯〉教師の証である白い制服に身を包んだ青年。ひとつに縛った長い黒髪と、優しげな黒い瞳が特徴のグラシカル・アミテージアだ。

長身で体格のいい、目立つ美形であるディガンと並ぶと、中肉中背のグラシカルは一見地味に見える。

しかし派手さはなくとも品良く整った容貌には不思議と人を惹きつける力があり、決して見劣りしない。むしろ性格も合わせて考えればグラシカル先生のほうが絶対にかっこい

い、とエリッセは思っている。

無論好みの問題であることも、この八年の間、家族のように側にいてくれた人への欲目があることも分かっている。ディガンの前で他の男を褒めるとうるさいことも死ぬほど思い知らされているのだが、疲れのせいもあって口が滑った。

「さすがグラシカル先生、そうなんです、ちょっと、ってあいたたた!!」

髪を一房摑まれたと思った瞬間、耳元でディガンの大声が炸裂する。

「何がさすがだ小娘!! その前にオレを待たせたことに対する謝罪は!?」

「ああーすいませんすいません! 以後気をつけます!!」

耳をふさいで謝るエリッセは、首の後ろの毛が逆立つのを感じた。同時に、ディガンの手が髪から離れる。

ものも言わずにいきなり〈煌〉を高めたグラシカルが、にこやかに二人を引き離した。

「もう謝ったんだからいいだろう? 言うほど待たされていないしね。まあ、君と二人きりで狭い空間にいる時間なんか、短いに越したことはないけど」

「……なんだと貴様、それはこっちの台詞だ」

ディガンの金の眼が、エリッセではなくグラシカルへと向けられる。グラシカルは涼しい顔だが、強い〈煌〉を保ったまま、さり気なく軽く足を開いて臨戦態勢だ。

出会いのきっかけを思えば無理もないような気もするが、この二人はやけに仲が悪い。

ディガンが自分以外の男に容赦がないのはいつものことだが、普段どれだけやっかみ半分に絡まれても適当に受け流してしまうグラシカルが、彼相手の時だけ妙に攻撃的なのだ。

「ちょ、ちょっとお二人とも、それこそこんな狭いところでやめて下さいよ……？」

そっと止めに入ってみたが、重たい緊張はあたりに広がっていく一方。

このままではまずい、と察したエリッセはとっさにこう言った。

「え、ええっと、私、あのっ、すいません、遅れたのはまた例のアレが出ちゃったからなんです!!」

たちどころに効果が出た。教師たちの視線が集まってくる。

「なに!?」

「……またかい」

二人の強い眼差しに尻込みしつつも、エリッセはこわごわと説明を始めた。

エリッセの〈太陽〉の力は、現在非常に不安定な状態にある。

過去にも意図して使ったことはない。ディガンを〈夜の底闇〉から引き上げた時と、『不幸の星』を弾き飛ばした時には〈太陽〉が発動していたそうだが、どちらも全く記憶にないのだ。当時は己の力がどういったものかすら、まるで理解していなかったのだから

当然だが。

そもそも〈太陽〉について、正確に理解している人間などいないのだ。いち早くエリッセの素養を見抜いたディガンも、その力の具体的な使用方法を知っている訳ではなかった。しかし無意識にでも、何度も〈太陽〉の力を発動させたせいだろう。なんの前触れもなしに〈太陽〉が顔を出し、慌てふためく、ということがたびたび起こっている。

「僕もディガンも気づかなかったから、誰にも分からなかったとは思うけど……でも、頻度が上がっているね」

取り出した手帳に詳しい状況を書き込みながら、グラシカルが難しい顔をしている。

「……はい。残念ながら」

エリッセ自身もそれは承知していたので、暗い表情でうなずいた。

今のところ、関係者以外が〈太陽〉に気づいた様子はない。王家の斡旋により今の時代の身分を得、エリッセ付きの教師として〈導きの灯〉に赴任してきたディガンが眼を光らせているし、不幸体質で有名な彼女が急に苦しみだすのはいつものことだったからである。だが、ここは優秀な〈星〉の集う学舎〈導きの灯〉。このままでは、騒ぎになるのも時間の問題だ。

「ふん、ならば一層、修練を積む必要があるな」

手にしていた本を乱暴に閉じ、ディガンが言い放った。



「手っ取り早く、お前にもう一回『暗黒星』をかけてみるのはどうだ」
「はぁ!?」
いきなり究極の提案をされ、眼が点になったエリッセに滔々と自説を語る。
「『不幸の星』を引き剝がせるような力が出せたのは、お前に生命の危機が迫ったからだろう？　ならもう一度やれば、〈太陽〉の力を引き出せるかもしれない。まずはその感覚を覚えてだな」
「そ、そんなこと言って、本当はもう教師ごっこに飽きて、私のことを喰らう気なんじゃ……？」
――〈太陽〉として育ったお前の力を、いずれオレが喰らってやる。
それが、この限りなく偉そうなディガンがわざわざ二等星に身をやつし、エリッセ付きの教師に甘んじている理由である。
「実際飽きてきていることは認めよう。お前の〈太陽〉の力は不安定なままだし、古い書物を漁っても何も見つからんし、当の本人は中年の授業に出たがるし」
ぶつぶつと愚痴られ、エリッセは首を竦めた。
「ええと、すいません……あの、偉大なるディガン様の手を、これ以上私ごときにわずらわせるのも申し訳ないですし……私のことなんか放っておいていただいても大丈夫ですよ……？　グラシカル先生もいますし……」

遠回しに「どうせならグラシカル先生がいつも側にいてくれたほうが」と伝えたところ、ディガンは一瞬黙った。しかしすぐに、わずかなためらいを塗りつぶすような大声を張り上げる。

「だが、……その、〈太陽〉を見過ごすなど、仮にも『暗黒星』と呼ばれたオレ様のプライドが許さん!!　大体オレはお前を見張るために教師役なんぞを引き受けたんだぞ!?　放っておいてほしければさっさと成長しろ小娘、そしてさっさとオレに喰われろ!!」

「全くさっさとする気になれませんけど!?」

「まあまあ、二人とも、少し落ち着いて」

一連のやり取りを見守っていたグラシカルが、微笑みながら仲裁に入ってきた。

「グ、グラシカル先生、ディガンさんの言うことは無茶苦茶です！　いずれ喰われることが分かっていて、真面目に修行なんかできる訳ないじゃないですかあああ!!」

泣きついてきたエリッセの肩を軽く叩きながら、グラシカルは微笑んだ。

「それはそうだね。でも、君が本当に〈太陽〉としての力を発揮すれば、ディガンなんか目じゃないだろうし……、第一ディガンは、本当に君を喰らうつもりなのかな？」

「え？」

いつの間にかその眼は、ディガンに向けられていた。唇に微笑みの残滓はあるが、瞳は全く笑っていない。

「それに僕もいるんだし、易々と大事な生徒をおかしな男に喰らわせたりしないさ。ただ、おかしな手合いがこれ以上増えると、厄介なことになるかもしれない」

エリッセが違和感を覚えたのも束の間、グラシカルはいつもの彼らしい穏やかな口調で語り始めた。

……けれどグラシカルは、本当にエリッセが思っているような、優しく穏やかな青年なのだろうか？

冬の終わりから心に刺さったままの棘のような痛みが、不意に蘇ってきた。しかしさやかな痛みよりも、今は眼前の問題に立ち向かわなければと、エリッセは師の言葉に意識を集中させる。

「〈太陽〉は貴重な能力だ。〈星〉の力の源がひとつ増える、ということだからね。……もしもその存在が世界に知れ渡れば、絶対に奪い合いになる。そんなことにならないためにも、さすがに『暗黒星』は荒療治が過ぎるけれど、〈太陽〉の力を制御できるようになってもらわないと」

何度も聞かされてきた説明ではあるが、改めてしっかりと心に刻む。

だけど、というためらいが表情に出たのだろう。グラシカルが微苦笑を浮かべた。

「ねえエリッセ。昇星試験のことについて、もしも僕の立場を思いやってくれているなら、気にしないで。分かっていると思うけど、僕がここから追い出されることはあり得ない」

「分かってますけど、でも……先生が、これからもずっと、悪口を……」
万年六等星扱いに落ち込んでいたのは、自分よりもグラシカルに非難の矛先が向かうからだ。先にディガンが指摘した通り、目立つ欠点のないグラシカルの落ち度といえば弟子の不出来ぐらいだからである。
「僕は気にしないよ。大体今までだって、気にしているように見えていたかい？」
「そ、そうですけど……」
確かにグラシカルは、無理をしているようではなかった。「そのままでいいんだよ」とエリッセを力づけ、慰め、支えてくれた。
「そもそも僕は、〈導きの灯〉の人たちとあまり触れ合うつもりがなかったからね。悪い噂があるぐらいで、ちょうどいいんだよ」
さらりと語られた言葉に驚き、エリッセは顔を強張らせた。
「……あまり、触れ合うつもりがない……？」
「……、ああ」
エリッセが何に引っかかったのか分かったのだろう。グラシカルが付け加える。
「君以外の人とはってことだよ」
涼やかな微笑みを受け、ぽっと頬を染めるエリッセを面白くなさそうに見ていたディガンが「おい、それより」と口を挟んできた。

「あ、はいっ、じゃあ、今日は何からしましょうか」
「まずは『暗黒星』を受け」
「き、〈煌〉の大きさ測定ですよね!?　そうですよね!?」
どさくさに紛れて危険な発言をしたディガンを、エリッセは必死で遮った。

〈太陽〉を制御するための訓練といっても、今やっていることは〈星〉としての訓練とあまり変わらない。むしろすでに八年間〈導きの灯〉で過ごしたエリッセにとっては、今さらすぎるような地味なことばかりやっている。
〈太陽〉の力をどうやって鍛えればいいのか分からない、というのがより正確に状況を示しているだろう。ディガンとグラシカルは王家と星団長の許可を得て、古い資料を読み漁ってくれているが、目立った成果は上がっていない。
差し当たって、〈星〉としての能力を上げることが〈太陽〉を制御することにも繋がるだろう、というのが教師たちの統一見解だった。禁呪『不幸の星』という邪魔がなくなった今なら、エリッセの〈煌〉も成長の可能性があるだろう、ということなのだが……
「はひぃ……」
現在のエリッセに使用可能な最大限の攻撃術を放ち続け、その効力と発動までの速さを

向上させる。〈導きの灯〉に入団して一年目に延々とやらされた、堅実すぎるほど堅実な訓練に疲れ果て、冷たい石の床に座り込んでしまったエリッセをディガンが怒鳴りつけた。

「立て小娘！　そんなことで、戦場で生き残れると思うな!!」

「だ、だからディガンさん、今は戦時中じゃないんですって……」

鬼教官のようなはっぱに抗議するが、ディガンには通用しない。

「戦争が始まる可能性があるから、お前を鍛えているんだろうが!!　死にたくなければ立て!!」

「それはそうですけどぉ!!」

その前にディガンさんに殺される、とエリッセは口の中でうめいた。ディガンはなおも何か言いかけたが、そこへ部屋の隅で資料の山と格闘していたグラシカルが近づいてくる。

「さあ、今日はこれぐらいにしよう」

「なんだ、まだ」

「エリッセがかなり疲れているようだ。僕もだし、それに君もね」

かすかに息を乱しているディガンの疲労を、グラシカルは何気ない口調で指摘する。エリッセが連発する攻撃術が建物に被害を及ぼさないよう、防御術を維持し続けていたためだ。

「僕より熱心に、いろいろな記録を調べてくれているみたいだけど、ちょっと焦りすぎじ

やないかな」

「……ふん、やるからには何事も完璧にこなしたいだけだ。まだ今の時代についてよく分からんこともあるし……それにオレはお前と違って、この小娘のせいでいわれのない誹りを受けるなど、我慢ならんからな」

「……じゃあ別に、教師役なんて辞め……、アー、でぃがん様ミタイナ先生ガイテクレテ、私幸セー」

言わされている感満載の台詞を虚ろにつぶやきながら、エリッセはどうにか立ち上がった。なけなしの〈煌〉を絞り出して訓練に勤しんだせいで、空腹がそろそろ限界だ。

空の羅盤を確かめれば、現在第一の月・起源の陰が中天を少し外れたあたり。太陽と相性の悪いエリッセの〈煌〉が本格的に発揮できるのはむしろこれからなのだが、元々〈煌〉を磨くことが最終目的ではないし、いいかげん集中力も落ちている。

「外に出る前に、服と髪だけきれいにしようね。天空の覇者、太陽が三、終焉の夕よ。時よ逆巻け、あるべき形に還れ」

修復術の効用により、すすけていたエリッセの姿はすっかり元に戻った。術の詠唱にはその時一番中天に近く、力を持っている恒星の名を織り込むのがセオリーだが、相性問題などが絡むと異なる選択をする場合もある。

そもそも月より太陽のほうが借りられる力も大きいし、相性のいい術も多いし、相性の

いい〈星〉も多いのだ。そういう意味でも不運だ、と言われ続けていたエリッセであるが、おそらく本人が〈太陽〉だからだろう。

「じゃあ、僕ももう戻るよ。ディガン、君は？」

「オレはまだ調べ物がある」

「でも、食堂が閉まっちゃいますよ？」

今夜の献立に思いを馳せながらエリッセが言うと、ディガンは早くもグラシカルが読んでいたのとは別の書物を手に取りながら、

「教職員は多少融通が利く。必要であれば、徴収すればいい」

「だめですよ、今は戦時下じゃないんですって！　ちゃんと時間を守ればご飯はもらえるんですから、規律を守って下さい!!」

以前レドレリカ王宮に向かった際、ディガンがあちこちの民家から食物を失敬していたことを思い出してエリッセが注意した。あれを返しに行くのも結構大変だったのだ。

「でないと、最終的にグラシカル先生の評判が落ちる、か？」

聞き飽きた、と言わんばかりの反応にエリッセは首を振る。

「そうじゃなくて！　ディガンさんも、この時代の暮らしに馴染んでいったほうがいいと思いますし……」

等星石をつける以外の妥協をせず、服装も態度もいまだ団内で浮きまくりのディガン。

まともに会話を交わす人間といえば、エリッセたちのように事情を知るわずかな人間のみだ。

「ここはその、あなたの仲間が、い、命を懸けて守った場所でしょう……？　最近それこそ、せ、戦争とか、いろいろ嫌な話も聞きますし、せっかくの平和を楽しんきゃきゃー!?」

最後まで言えなかった。物質的な圧力を感じるほどに鋭い視線で突き刺され、エリッセは思わずグラシカルの陰に隠れた。

「……平和ぼけした小娘が、利いたふうな口をきくな」

ディガンの金色の瞳が、地下室の薄闇の中で燃えるように輝いている。

南北戦争終焉間際に〈導きの灯〉で起こった悲劇、「学徒虐殺」。自国の王の訃報により突然停戦を命じられたギガンスティの兵士たちが、戦争に行かずに済む、と安堵していた生徒たちに捨てきれない勝利への執着心をぶつけた。数百人からの生徒たちが、この悲劇の犠牲になったという。

ただし、ディガンが封じられたのはもっと前。どうしてもシリウスの称号が欲しかった彼の想い人が、邪魔な男を永遠の暗闇の地、〈夜の底闇〉に追い払ったのだとランゼがしゃべったのを覚えている。

好きだった女の子が殺されていくのを、大いなる力を持ちながら傍観するしかなかったディガン。

王者の孤独を気取る彼のつらさは、劣等生の身には分からない。でも、ひとりぼっちで取り残されるつらさなら、エリッセにも分かるつもりだ。

だからこそ、二言目には「いずれ喰らってやる」と繰り返すディガンのことを、嫌い抜くことはできない。

正直月に一回会うぐらいで十分じゃないか、とは時々思うが、いなくなれ、なんて言えない。……かつて彼にそう言った、ショナエル・アルケイシアのようには。

「あ、あの、ご飯、差し入れしましょうか……？　私、よくご飯をひっくり返して新しいのをもらったりしてたんで、大丈夫じゃないかと……」

妥協案を提示したが、ディガンの回答は素っ気ない。

「いらん。腹が減ったら適当に食う」

「ディガンさん……」

とりつく島もない態度に、エリッセはグラシカルの後ろでしょんぼりする。と、ディガンはさもうんざりしたようにため息をつきながら続けた。

「……オレが自分で調理員に声をかける。それで文句はないだろうが」

「え、……あ、はい！　それでいいと思います!!」

ぱっと顔を明るくしたエリッセを見るその表情は、いつもの彼だ。お前の浅い考えなど分かっていると言いたげに、形良い唇に嘲笑を浮かべている。

「飯ぐらい、友達と落ち着いて食いたいんだろう？　オレのような、すべてに優れた男といつも一緒にいると、緊張しすぎて疲れるだろう。すまんな、恵まれない者の考えがよく分からなくて」

「……ありがとう、ございます……？」

年一回会うぐらいでいいかな、と考え始めたエリッセとディガンを交互に見て、グラシカルがおもむろに口を開く。

「さて、ディガンが動かないんじゃ、僕も動く訳にはいかないか」

「お前は小娘を食堂まで送って行ってやれ。ここは安全だろうとは思うが、ギガンスティの間者がひとりとは限らない」

『不幸の星』と一緒に消えていったランゼは、教師として何年も〈導きの灯〉で働いていたのだ。在籍者の身元は調べ直され、少しでも怪しい者はただちに除籍されたはずだが、油断は禁物。

「残念だけど、君も完全に安全な存在って訳じゃないからね。他の場所はとにかく、機密資料が大量に眠っているこの場所にひとりで放っておく訳にはいかないんだ」

他者の〈煌〉を喰らう『暗黒星』。

悪い意味で伝説上の存在である彼を、〈導きの灯〉も、レドレリカ王国もまだ完全に信用している訳ではないと……教師にして元王宮付きの〈綺羅星〉であるグラシカルは語る。

「それはそうだろう。オレだって、貴様らと馴れ合うなど御免だ」
ディガンもディガンで、あくまで育った〈太陽〉を喰らうため仕方なく、という態度を崩さない。
「だが、今さらそんなことを言うなら……」
「えっ？」
また空気が張りつめてきたのを感じ、はらはらしているエリッセの肩を突然ディガンが抱き寄せた。
「大切なお前の生徒とオレは、始終二人きりになっている訳だが？」
「ちょ、ディガンさん、なんか言い方が変ですよ!?」
確かにグラシカルが一緒にいてくれたほうがいいが、ディガンの口調だと誤解を招きそうだ。泡を食うエリッセと、平然としたディガンに刹那眉根を寄せたものの、グラシカルはあっさりこう言った。
「個人的には、僕は君を信じているからね」
「――ふん、何を根拠に？」
「君のプライドを信じている、と言ったほうがより正しいかな。エリッセの教師役を引き受けておいて、途中で放り出してしまうほど安いプライドの持ち主には思えない」
涼やかに微笑むグラシカルを、ディガンはエリッセを放り出しながら冷たく睨む。

「詐欺師め」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

火花散るやり取りを声もなく見守っていたエリッセに、グラシカルが申し訳なさそうに声をかけた。

「そういう訳だから、ごめんね、エリッセ。でも、ちょうどよく、近くに知り合いが来ているみたいだし、彼らと一緒に食堂に行っておいで」

「……あー……、ああ、そうみたいですね……」

よく知っている〈煌〉の持ち主が二人、地上を通りかかったのにエリッセも気づいた。会いたいような会いたくないような、微妙な相手ではあるが、これ以上ディガンに絞られたら体がもたない。明日だって、通常の授業はあるのだ。

「じゃあ、私は先に戻ります。お二人とも、ちゃんと食事はして下さいね！」

地下室を出て行きながらの言葉に、グラシカルは微笑み、ディガンは面倒くさそうにうなずいた。

石段を上がって地上に出ると、月明かりがひどくまぶしく感じられた。

常に三つの太陽と月に照らされたこの世界の夜は、昼間と比べれば確かに暗い。しかし

いつも必ず空に三つの恒星があるため、他の光がなくても真っ暗で何も見えない、などという状況はそれこそ地下室にでも入らないと味わえない。

「〈夜の底闇〉に二百年いるって、どんな感じなんだろう……？」

封印を解かれたばかりのディガンの驚きぶりから察するに、時間の流れ自体が違う異世界なのだろう。それでも、彼の感覚では十年あまり、ひとり太陽も月もない空間に閉じ込められていたのだという。

「……『学徒虐殺』の様子は、分かってたみたいだけど……それ以外の、外の様子は分からなかったのかな……？」

いつか聞けるだろうか、でも聞いていいものか。考え込んでいたエリッセに、「会いたいような会いたくないような、微妙な相手」のほうが声をかけてきた。

「こんばんは、エリッセ」

「こ、こんばんは、ハーシエルくん、ティリス先生」

やって来たのは、小柄な銀髪の少年と、小柄な黒髪の女性。エリッセと同じデザインの男子用の制服に身を包んだ少年は、ハーシエル・ディファリア・トールズ。教師用の白い制服と眼鏡（めがね）を身に着けた女性はティリス・エーデだ。

「また例の補習？」

首元に一等星の証である、一粒の等星石をきらめかせたハーシエルの言い回しにエリッ

セは慌てた。
「あ、うん……まあ、ね。ところでハーシエルくん、悪いけど」
「分かってるよ。僕はただ、エリッセが無事に五等星になれることを願っているだけ。〈星〉としての評価なんか、そのうち必要なくなりそうだけどね」
百年に一度の天才と呼ばれ、最強の一等星であるシリウスの称号を持つハーシエルは、冬の終わりの騒動に関わっている。『暗黒星』にいたってはその禁呪をかけられたことさえある彼は、決してはっきりとは口にしないが、エリッセに秘められた素養についても見当をつけている様子だ。
「ハーシエルくん、だめよ、エリッセちゃんを困らせちゃ」
確かグラシカルよりも年上のはずなのに、エリッセの友達ぐらいにしか見えないティリスが控えめに口を挟んでくる。担当教師の表情を窺いながら、ハーシエルは急に頼み事を始めた。
「でも、僕をどうしてもおしゃべりにしたくないなら……相談に乗ってくれないかな、エリッセ」
「え、え？　なな、何？」
身構えたエリッセに、ハーシエルは十一歳とは思えない真摯な口調で打ち明けた。
「実は僕、好きな人がいるんだ」

「ひっ!?」

息を呑んだのはエリッセではなく、ティリスである。ハーシエルも話しかけている相手はエリッセだが、青い瞳は完全にティリスだけを見つめている。

「でもその人は、年の差とか立場とかを気にして、なかなか僕の気持ちを受け入れてくれなくて」

「ハ、ハーシエルくん、あの」

赤くなり始めたティリスを愛おしそうに見つめながら、ハーシエルの「相談」は続く。

「もちろん僕だって、年齢や身長がその人と並ぶまで、待ちたいとは思っているんだ。でも、男はみんな狼だから。僕の女が間男の毒牙にかけられる前に、早く」

「そ、その言い方はやめなさいと言っているでしょう!?」

黙っていられなくなったティリスが、教師口調で注意した。

「なんですか、ティリス先生？　僕はただ、エリッセに相談しているだけですけど？」

にっこりと笑うハーシエルの表情は、あくまで無邪気な少年のもの。

「それでね、エリッセ。恋する弱い男は、ついこんなことを考えてしまうんだ。エリッセの秘密を誰にも話さない、それを条件にすれば、心優しい僕の想い人は結婚を決意してくれるんじゃないかって……」

「ハーシエルくん、私に相談してるんだよね!?　私とティリス先生を脅迫してるんじゃ

ないよね!?」

エリッセは思わず大声で突っ込んでしまった。

「ハーシエルくん。言っておくけど、団内恋愛は禁止だよ……？」

「分かってるよ。だけど僕は、元々ここに来たくて来た訳じゃないから。追い出されても、特に問題はない」

ハーシエルは名家の出身者であり、〈星〉の素養があったところでわざわざ星団入りする必要はなかった。母親の浮気によりできた子供、との疑いがあったせいで両親に厄介払いされた、とは本人の弁だ。

「い、いや、入団当初はとにかく、いくらなんでもシリウスの称号を持っている〈星〉を、追い出したりはしないと思うけど……」

入団の経緯により、入団当初は誰にも心を開かず、昇星試験にもまるで無関心だったハーシエル。扱いにくい問題児に熱心な指導を続け、その〈煌〉を見事花開かせたのがティリスである。

教師としては最下位の三等星、決して優秀な〈星〉とはいえないティリスだが、教育への情熱なら誰にも負けない。孤高の天才少年の凍りついた心を、彼女の情熱が溶かしたのだ。

「そうだろうね。でも、このまま叶わない恋心を抱き続けるのは苦しすぎるよ。だから僕

は、いっそ自主退団しようかと思ってさ……まあ、僕の想い人が結婚の約束さえしてくれれば」

「あの、ほら、ハーシエルくんは今でこそ好きな人より年齢も身長も下かもしれないけど！　まあ年齢を追い抜くのは永遠に無理だと思うけど、身長なら五年以内ぐらいにはなんとかなるよ!!　たぶん!!」

顔面蒼白になっているティリスを庇うように、エリッセは必死になって声を張り上げた。

前回の騒動の中でティリスへの気持ちを告白して以来、ハーシエルは常にこんな感じだ。ティリスの熱心な指導は、担当生徒の心を想定外の方向にまで動かしてしまっていたのである。

「それより、ほら、早く行かないと食堂が閉まっちゃう!!　私おなかぺこぺこだから、ねっ、早く行こう!!」

懸命に話題を逸らすエリッセに、ハーシエルもようやく諦めてくれたようだ。

「分かったよ、行こう」

エリッセもティリスも安堵の息を吐いた、その時。

「ティリス先生、寂しいので、今夜は僕の部屋で一緒に寝てくれませんか？」

「そうね……えっ、い、いいえだめよッ!!　え、えっと、しょ、食堂閉まっちゃうから！早く行きましょう!!」

間隙を縫って繰り出された攻撃を間一髪でかわし、ティリスは生徒たちを先導して歩き始めた。

結局、食堂で食事をしている間もエリッセの心に安らぎは訪れなかった。

タタやリゼインとばったり会ったのがまずかった。普段なら人付き合いのよくないハーシエルは別のテーブルに行ってしまうのに、今日は完全に意図的に、同じテーブルを囲んできたのだ。

そしてたびたび、あくまで対象をぼかして「僕の想い人」発言を繰り返す。リゼインが食いつかないはずがない。

『ねえねえ、ハーシエルくんの想い人って誰!?〈導きの灯〉の人!?　まさか……、エリッセ!?』

『秘密だよ』

年齢にそぐわない落ち着き払った笑みを、恋の話に目がない友人は絶対に誤解している。どうにか誤解を解きたかったが、そうすると「じゃあ誰なのか、エリッセは知っているの？」ということに当然なるだろう。天才少年の思う壺である。

いつも一緒のティリスは、見た目はエリッセとそう変わらなくても実際は三十を過ぎて

いるのだ。ハーシエルとは年の差がありすぎて、さすがのリゼインも想像の範囲外だったようである。

　ティリスがだらだら冷や汗をかいているのも、「そのお話はやめたほうがいいと思うの!!」と必死で何度も止めたのも、優秀な担当生徒が恋愛問題で身を滅ぼさないか心配している、としか思わなかっただろう。

「ハーシエルくん、頭いいし、顔だってかっこいいし、五年ぐらい待てばいいのに……ていうか、私が退団した後にやってくれればいいのに……」

　同じ寮内で暮らすタタやリゼインたちと別れ、自室に続く廊下を歩きながらエリッセは疲れきった声でぼやいた。ちなみにハーシエルは星団が用意した特別室で優雅な暮らしをしており、食堂から出る時もさかんにティリスをそこへ引っ張り込もうとしていたが、エリッセには付き合う気力が残っていなかったのでそっと立ち去った。

「ま、まあティリス先生が本当に嫌がるようなことはしないよ、ハーシエルくんだって……たぶん……、うん、たぶん」

　決して見捨てた訳ではない。自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、エリッセは三階建ての寮の最上階の端にある自室に辿り着いた。

　万年六等星の身の上で、贅沢にもひとり部屋を使っている理由は、逆に万年六等星であるがゆえだ。通常十歳前後で〈煌〉に目覚め、星団入りしてくる生徒たちは四等星までは

比較的簡単に昇星試験に受かるので、年齢と等星の釣り合うルームメイトがいなくなってしまったのだ。

むしろ私がハーシエルくんの年齢に戻りたい。悲しい物思いに耽りながら鍵を開け、元々三人用なのでかなり広い室内に入る。

「はぁ、でも寝ちゃだめ、もうちょっと勉強しないと……」

昼間の復習をして、昇星試験に備えなければ。自分を奮い立たせるための独り言に、返事があった。

「いい心がけだな、小娘」

「きゃきゃきゃああああああああああああッ!?」

聞き慣れた声と姿に、エリッセはその場で飛び上がった。

「きゃ、きゃー!! きゃーきゃーのきゃー!? どうして、どうしてディガンさんが私のベッドにっ……!?」

「お前の戻りが遅いからだ」

読んでいた古書を脇に置き、ベッドから上体を起こしたディガンが小さなあくびをする。それはここに持ち出していい資料なんですか、という突っ込みはこの際二の次だ。

「べ、ベッドは三つあるのに、なんでピンポイントで私が使ってるベッドに!?」

「ベッドメイクもされていないような場所に、このオレを寝そべらせる気か？」

三人用の部屋なので、ベッドも三つある。使われていない二つにはほこり除けの分厚いカバーがかけられており、ディガンでなくても寝転がろうとは思わないだろうが。

「そうじゃなくて、そもそもどうして、私の部屋にいるんですか!?」

後から食堂に来る様子もなかったので、まだ地下室にいるのかと思っていたらとんでもなかった。慌てふためくエリッセに、ディガンはにやりと笑う。

「あれしきで解放されたと思ったか、馬鹿め」

人の悪い笑みを浮かべた彼の足が床に下りた。弾みでぎい、とベッドが軋む音がやけに耳につく。

時刻はそろそろ、第一の月より第二の月が支配力を増してくる頃。大半の生徒は部屋で自主勉強をしていることだろう。

何かにつけてティリスに添い寝を強要する、ハーシエルの姿が脳裏に浮かんだ。

「ままま、まさか、ディ、ディガンさん、ハーシエルくんと同じような強硬手段を企んでいるんじゃ……？　わわ、私に何かして、〈太陽〉を発動させようとしているとか……!?」

育った〈太陽〉を喰らう目的を持つディガンだ。下手に『暗黒星』を使い、未熟なままのエリッセの力を喰らってしまうことは避けたいだろう。大体あんな強力な術をこんなところで発動させたら、あっという間に正体がばれてしまう。

どうしても〈太陽〉の力にすがらねばならないような事態に追い込む方法は、『暗黒星』以外にもたくさんあるのだ。

「わ、私のこと、散々十人並みって馬鹿にしてきましたけど……！　女の子の部屋で、男の人が待ち伏せしてるって、そそそそういうことなんですよね……!?」

「エリッセ」

奇妙に真面目な顔をしたディガンが近づいてくる。元の顔立ちだけはいい男なので、皮肉のない表情に我知らず胸が高鳴った。

「ち、違うもの！　私は、その、グラ……、ううん、違う！　グラシカル先生はお兄さんみたいなもの!!　そ、そしてディガンさんは、軍人のおじいちゃんみたいな……、いや、その、きゃーっ、きゃきゃきゃーっ!!」

もうあと二歩ディガンが近づいてくれば、ドアに押しつけられてしまう。

たまらず眼をつぶり、叫ぶエリッセの肩をぽん、とディガンが叩いた。

「十人並みの小娘に、そんな危機が訪れるはずがないだろう。身の丈に見合わないプライドは、悲しいぞ。な？」

「――いっそ馬鹿にしてほしい!!」

猛烈に腹が立ってきて、エリッセは真っ赤な顔で怒鳴り散らした。

「と、とととにかくっ、出て行って下さい!!　こんなところ、他の人に見つかったらど

うなるか……!!」

「ふん、このオレ様が、そんなへまをすると思うか？　潜入を気取られた様子もないし、すでにこの部屋は結界状態になっている」

男子禁制の女子寮には、夜間はたとえ教師でも男は入れないのだ。無断侵入を堂々と自慢したディガンは、続けてこんな演説をぶった。

「グラシカルの野郎はお前を甘やかすが、甘やかすのと優しいのは違う!!　教師としても、オレが世界一素晴らしいということを証明してやる!!」

「女子寮に無断侵入してる時点で無理ですよ!!」

半泣きでエリッセは叫んだが、ディガンは全く意に介さない。

「さて、早速だが小娘、夜の訓練を再開するぞ！　オレを殺す気で来い!!　返り討ちにしてやる!!」

「もう私には体力も気力も残ってません！　とりあえず出て行って下さい、お願いですからぁぁぁぁ!!」

〈太陽〉はとにかく、『暗黒星』はやっぱり『不幸の星』と大差ない。事態に気づいたグラシカルが駆けつけてくるまでの間、エリッセは繰り返しそう思った。

第二章　飴と鞭とキャンディ

夜はぎりぎりまでディガンに絞られ、朝は「いつまで寝ている！」と怒られ、授業中は「こんな下らん講義に出るな、時間の無駄だ」と横でぶつぶつ言われ、授業が終わると速攻で地下室にて訓練をつけられ。常に視界に金の瞳が映る状態で、一体どれだけ過ごしただろうか。

「……昇星試験、見送るべきかな……」

第三の太陽、終焉の夕の影響力が高まっていくのを感じながら、エリッセは講義棟の屋上にて春風に吹かれていた。ところどころ錆を噴いた金属製の手すりにもたれ、ぼんやりとあたりを見回す。

下を向けば、大量の本やら大がかりな術に使う器具やらを抱えた生徒たちが、足早に歩いていくのが見える。普段なら屋上に上がってきておしゃべりするような生徒もいるのだが、昇星試験が迫った現在はエリッセひとり。

そう、ひとり。連日連夜エリッセにつきまとっていた鬱陶しい『暗黒星』は、今はすぐ

近くにはいない。

『ディガンさんがあまりにかっこよくて強くて賢くてまぶしすぎて、始終一緒にいると息が詰まるので、ちょっとだけ自由を下さい』

若干本音交じりの交渉により得られた、ささやかな自由時間が今だ。何かするたびに怒鳴りつけられる緊張感から解き放たれたおかげで、心なしか空気までおいしい。

「……できればもうちょっと、遠くに行ってほしかったんだけどな……」

そう、ディガンはすぐ近くにはいない。しかし少し視線を巡らせれば、エリッセの位置から対角線上の屋上の端に、背の高い黒髪の男が佇んでいるのはすぐ分かる。

〈太陽〉の暴走の懸念があることも考えると、ディガンと大きく離れてはならないことは承知の上だ。でも、それにしても、もうちょっとなんとかならないか、と願うのはわがままだろうか。

「ただでさえ、目立つ人なんだし……」

油断するとまた怒られそう、という理由もあって、エリッセはついちらちらとディガンを見てしまう。

あれだけ自賛するだけあって、好みにもよるだろうが非の打ちどころがない派手な美形である。常にこの距離で付き合えればいいんだけど、とため息をつきながらぼやいた。

「ディガンさんも、私にべったりくっついてるより、〈導きの灯〉の中をいろいろ見て回

ったほうが楽しいんじゃないかな……」

〈星〉としては相変わらず最底辺、〈太陽〉としてもいまだ不安定な小娘の監視役など不本意だと、本人も繰り返しているのだ。グラシカル先生と代わってくれていいのに、と思いつつ、エリッセはまたディガンの横顔へと眼をやった。

沈み始めた第三の太陽の光を浴び、艶やかな黒髪と金の瞳が茜色を帯びている。一幅の絵のようなその姿は切ないほどに美しく、実際の距離以上に遠い場所にいるように感じられた。

「それとも、思い出したくないから……？」

本来なら彼は今、ここにいるはずの人間ではない。

――二百年前。もしも、あの「学徒虐殺」の際に、ディガンが好きだったショナエルではなくて、ディガン自身が最強の一等星・シリウスの称号を得ていたら……

物思いに耽るエリッセの瞳は、二百年前のディガンの姿を幻視する。今のエリッセとそう変わらない年齢で、そう変わらない制服に身を包んだ彼は、どういう少年だったのだろう。

「……とりあえず、昔から偉そうだったんだろうなあ……」

それだけは間違いない、と断じたエリッセの頬に突然影が差した。強力な〈煌〉が髪をそよがせる。

「やたらと人の顔をじろじろ見るのは、オレというカリスマを失った空虚さに耐えられなくなったんだな？」

「きゃきゃきゃきゃあ!?」

いきなり眼の前に出現したディガンから、エリッセは仰け反るようにして距離を取った。

「て、転移の術は団内では禁止だって言ってるでしょう!?」

転移の術は禁呪とまではいかないが、三等星以上でなければまず使えない、大量の〈煌〉を必要とする強力な術だ。並みの攻撃術より扱いが難しく、失敗時のリスクも高いので非常時以外の利用は禁じられている。

ましてやエリッセの前ぎりぎりに正確に転移してくるなど、二等星でもロージナウには難しい芸当だろう。しかしディガンは、息ひとつ乱すことなく持論を展開し始める。

「実戦で最も重宝する術のひとつだぞ。制御は難しいが、だからこそ勘が鈍らないよう、日常の中で使うべきだ」

今が戦時下でないことを除けば、ディガンの言うことにも一理ある。けれどエリッセは、腰の古傷を押さえながら眼を逸らした。

「わ、私、その術には嫌な記憶があるんで……昔、その術の失敗に巻き込まれて、大怪我をしたことがあるんです」

忘れもしない、あれは初めての昇星試験の際。ロージナウの担当生徒のひとりが、転移

の術の扱いに失敗して術を暴走させた。

移動の始点と終点を〈煌〉で繋ぐことにより完成するはずだった術は制御を失い、不運にも間にいたエリッセを巻き込んで大爆発を起こしたのだ。右腰を中心に負った怪我により、生死の境をさまよったことは今でも心に傷を残している。

甘えるな、と一喝されるのをエリッセは覚悟していた。普段のディガンの情け容赦ない言動からすれば、それが当然だと思った。

「……悪かったな」

しかし予想外に、少々ふてくされたような言い方ではあったが、ディガンはあっさりと謝罪を口にした。

「え？」

罵倒を予想し、さり気なく耳をふさいでいたエリッセは思わず聞き返してしまう。途端にものすごい眼で睨まれたので、聞き間違いではなかったことをようやく実感した。

「い、いえそのッ、いいんです、私もちゃんと言ってませんでしたし……！　それに、そうですよね、そろそろ克服しないと。制御の難しい術を使えるところをアピールできれば、今度こそ昇星試験に受かるかも!!」

話を逸らそうと、慌ててまくし立てたのに、見下ろしてくる金の瞳はいよいよ鋭くなるばかり。

「いや……その、でぃ、でぃがんサンテバサスガー、本当ニ優レタ人ッテ余裕ガアルカラ、潔ク謝ルコトモデキルンデスネー」

よいしょが足りなかったか、と空々しく付け加えると、予想外の反応が返ってきた。

「また、グラシカルのため、か？」

いつもの語彙豊かな罵倒と比べれば、言葉は短い。その分、声音の冷たさが強く感じられた。

他者の〈煌〉を喰らう『暗黒星』。忌むべき闇星。

エリッセとグラシカルの関係について言及する際、ディガンの気配はいつも禁呪の創作者に相応しい冷気を帯びる。

「――つくづく気に食わん。お前の体と心についた傷は、『不幸の星』のせい。ひいてはアレをお前につけた、あいつのせいだというのに。なんでこのオレ様が、責められなければならんのだ」

二人の頭上、影響力を増していく第一の月・起源の陰。美しくも冷たいその光に似た威圧感に圧迫されながら、エリッセは必死で言い返した。

「ディ、ディガンさんを責めてるつもりはないです！」

いつものようにきゃーきゃーわめくか、見え透いたよいしょでごまかしたいところだが、グラシカルについてはそうもいかない。ディガンの言い分も重々承知の上で、それでも、

エリッセにだって譲れないことはある。

「だから……、グラシカル先生を、悪く言わないで下さい。ディガンさんには、理解しづらいかもしれませんけど……先生は、私にとってはとても大切な人なんです。たとえ……、先生にとって私が、い、生贄、だったと、しても」

国王ルトエを救うため、グラシカルは彼女に憑けられていた禁呪『不幸の星』をエリッセに肩代わりさせていた。ずっと側で見守ってくれていたのは、もしも非常事態が起こり、術がルトエに還ったりするようなことがないよう……最悪の場合、その前にエリッセを『不幸の星』ごと殺害するためだ。

だけどグラシカルは、愚かにもエリッセが『暗黒星』に手を出すに至るぎりぎりまで、教え子を守ってくれていたのだ。それもまた、事実。

「……そんなにあの男のことが好きか？」

乾いた声に、エリッセは誤解しないで下さいね、と前置きしてからうなずいた。

「す、好きです。だってグラシカル先生は、私にとっては家族のようなものだから……」

心のどこかで、本当にそれだけか、と声がする。なんでも恋の話に結びつけるリゼインや、まさかの相手に熱を上げているハーシエルの姿が脳裏に浮かび、最後に眼の前の男に思考が戻った。

「……ディガンさんだって、……ショナエルさんのこと、今でも好きなんでしょう……？

だ、だから、いつでも一番強くてかっこよくいたいんですよね……？」

ディガンを〈夜の底闇〉に封じた、彼の想い人。自分がシリウスの座を得るために、ディガンの想いを利用した少女。

彼女が真の意味ではディガンに勝てなかった以上、ディガンは誰にも負けられない。

これ以上、ショナエルを他の誰かに負けさせてはならない。

「――オレは」

かすかに苦い表情になり、口を開きかけたディガン。リゼインが乗り移ったかのように、エリッセも思わず前屈みになる。

「オレはな、エリッセ」

しかし、すんでのところでディガンは唇を引き結んだ。エリッセも空の羅盤に映り込んだ見知った〈煌〉にはっとする。

「二人とも、こんなところで何をしてるんだい？」

ほどなく、ひとつに縛った黒髪を背になびかせてグラシカルが屋上に現れた。

「……ごめん、邪魔をしたんだったら悪かった。二人ともなかなか来ないから、迎えに来たんだけど」

緊迫した空気の名残を察知して、グラシカルが曖昧な表情でディガンとエリッセを見やる。困惑しながらエリッセはディガンの様子を窺ったが、彼はいつもの傲岸不遜な男に戻

っていた。

「いや、オレの偉大さについて説いていただけだ。どうせなら貴様にも聞かせてやろう」

「うん、僕は遠慮するし、エリッセもそろそろ聞き飽きていると思うな」

にこやかにそう受け流すと、グラシカルはさっさと話題を変えた。

「陽も暮れてきたし、二人ともそろそろ行かないか。それとも、今日は休みにするかい？明日は休日だしね」

「いえ……」

エリッセはディガンほど簡単には態度を変えられない。どちらの顔も見づらくて、うつむきかげんに答えると、ディガンが頭上で勝手なことを言い出した。

「貴様は休め。オレと小娘は朝からみっちり特訓だ」

「へっ!?　ちょ、ちょっと、聞いてませんけどッ……、……!?」

明日こそ昇星試験の準備に費やすつもりなのにと、ディガンに文句をつけようとしたエリッセを、突然の違和感が襲った。声もなく、その場にうずくまる。

「エリッセ!?」

「おい、大丈夫か小娘!?」

血相を変える二人の声が霞んで聞こえる。

身の内から湧き起こる熱が、光が、力が、感覚のすべてを焼き尽くしながら広がってい

く。

「熱、い」

薄い煙が少女の体から上がり始めた。

急激な体温の上昇により、噴き出た汗はたちまち水蒸気に変わる。逆立った産毛が、淡い金髪の先が、ぱちぱちと火花を散らし、体毛が燃える際独特の嫌な臭いを撒き散らす。分かっている、これはまた〈太陽〉の暴走だ。世界中の〈星〉たちに奇跡を提供する力が、エリッセの中で暴れている。

しかしいつもなら、すぐに収束していくはずの力はいっこうに衰えを見せない。

それどころか熱は、体の中から外へ、どんどん広がっていく。

巨大なエネルギーの塊を身の内に留めておけない。ディガンの『暗黒星』に喰らわれかけた、あの時さえも凌駕する熱量が出口を求めて狂奔している。

――溶ける。

自分という器が溶け崩れ、ただの巨大な光だけがそこに残るというヴィジョンが、金色の闇と化して心を塗り潰していく。

「助け、て、せん、せ、い」

救いを求めて伸ばした手は、反射的に同じ金の瞳を持つ男を避ける。

苦痛でも感じたかのように、歪んだ彼の表情を視認できない。助けを乞うたグラシカル

の顔さえよく見えない。
何もかもが溶けていく。
十五年の人生が、心の底で育てていた想いが、灼熱の光に呑み込まれていく。
「きゃ、あ、あ、あ、あ、あ、アアアアア――……!!」
長く尾を引く悲鳴、強大な力の放出。
異変に気づいた人々の騒ぎが聞こえ始めている。
迷っている暇はなかった。
素早く目配せを交わしたディガンとグラシカルが、別々の詠唱を始めた。
「天空の覇者、太陽が三、終焉の夕よ。夜空の支配者、月が一、起源の陰よ。我が身を距離より解き放て!!」
「夜空の支配者、月が一、起源の陰よ。眠りの砂撒け、夢へと誘え!!」
先に詠唱を始めたのはディガンだったが、比較的簡単なグラシカルの術のほうが先に発動した。急速な眠気に襲われたエリッセの頭が、がくりと垂れ下がる。
次いで発動したディガンの転移の術が、彼とエリッセの姿を屋上から消滅させた。
「アミテージア先生ッ、これはどういうことですか!?」
やがて次々と屋上に駆けつけてきた教職員たちに、グラシカルは硬い顔と声で素っ気なく応じる。

「いずれすべては、星団長からご説明があるでしょう。それまでは、僕から申し上げることは何もありません」

教師たちの背後、不安と興味が入り交じった瞳で見つめる生徒たちをかき分けて、彼もまた屋上を去った。

ばちばち、と激しい音を立てながらエリッセの部屋に転移したディガンは、不機嫌な表情で吐き捨てた。

「チッ、余計なことを……」

ディガンが先日エリッセの部屋に侵入を果たしたために、女子寮の防御結界が強化されていたのである。結界を切り裂くようにして転移はできたが、術の一部が反射されてしまったのだ。

「オレ様まであちこち火傷したじゃないか。まったく、この貸しはでかいからな、小娘。後で覚えていろよ……？」

苦々しくつぶやきながらも、寝台の上掛けをめくり、慎重にエリッセを横たえる。眠りの術がうまく効いたらしく、時折激しい波を感じるものの、大旨彼女の〈煌〉は安定してきたようだ。

強制侵入の反動はすべてディガンが引き取ったので、エリッセに火傷が増えている様子はなかった。ほっと息をつく口からは、同時に憎まれ口が出る。

「言っておくが、お前じゃなくて〈太陽〉を庇ったんだからな。この不安定な状況でこれ以上のダメージを食らえば、また暴走を引き起こしかねん」

言い訳を並べてから、治癒術を唱える。エリッセの見た目上の怪我はたちまち癒えたが、まだ彼女の〈煌〉は不安定に波打ち続けていた。

「これ以上の治癒術は意味がなさそうだな。……業腹だが、グラシカルの野郎の意見を待つか」

どうせグラシカルもすぐに来るだろう。そう思いながら、ディガンはエリッセの制服の胸元に手をやった。

「……汗をかいているようだから、着替えさせてやるだけだ。安心しろ、お前の裸なんぞにはなんの興味もない」

そう前置きしてひとつ釦を外そうとした時、エリッセがかすかなうめき声を上げた。

「う……」

はっと身を強張らせたディガンが思わず身を引くが、目覚める気配はない。だがエリッセの手は、先ほどディガンが触れていた制服の胸元をさまよい始めた。

「せ、先生、先生……」

すがるような声が、震える唇から漏れる。
「待って……、行かないで、先生……」
ディガンの金の瞳が細くなる。
知っている。〈太陽〉の暴走が始まった瞬間と同じだ。エリッセが探している先生は、いつもひとりだけ。
「――お前の先生は、もうひとり」
いら立ちに任せ、言おうとした言葉をぎりぎりで呑み込む。
「……ふん。なにせオレ様は、一等星・ベテルギウスのディガン様だからな。常に状況に最適の術を使える訳だ。まったく、己の才能が恐ろしい……」
芝居がかった独り言を言いながら眼を閉じ、深く息を吸ってから、今のエリッセに最適の治癒術を唱えた。
「……大丈夫、だ、よ。オレ……僕、はここにいる、から」
さまよう手を軽く握り、その手が求める教師のふりをする。
「……先生……」
苦しげに歪んだエリッセの表情が、へにゃりと情けない笑みに崩れた。
「……ふん」
小さく鼻を鳴らしたディガンは、唇だけを動かして独りごちた。

「……別に構わんさ。下手に懐かれて、余分な感情を持たれるよりは」
「マキナウス先生、エリッセ!!」
次の瞬間、炸裂した大声にディガンは飛び上がった。

慌てて寝台の側を離れながら、ディガンは上ずった声で釈明する。
「あ、汗をかいていたようだから、制服を脱がせようとしていただけだからな!?」
てっきりグラシカルだと思って反応したディガンだったが、部屋に飛び込んできたのはなんとロージナウだった。
「……なんだ中年か、脅かしやがって。どうした、女子寮に不細工と中年は立ち入り禁止だぞ?」
「許可を得ていない男は全員立ち入り禁止ですが!? いや、そんなことよりマキナウス先生、一体何が起こっているんですか!? まったくあなた方は、次から次へと問題を起こしますな!!」
詰問口調のロージナウだが、どことなくその表情は嬉しそうだ。
エリッセもディガンもグラシカルも、ロージナウにとっては眼の上のたんこぶである。
そんな三人が揃ってのトラブルと知り、喜々として駆けつけてきたのだろう。

「……何が起こっているかなど、貴様には関係ないだろうが」
「関係ない訳がありますか！　さっきのアレは、間違いなく未知の太陽の輝きだった!!　私の眼はごまかせませんぞ!?」
　ずばりと切り込まれ、ディガンは舌打ちした。腹が立つことに、ロージナウが優秀な〈星〉であるのは間違いないようだ。
「マキナウス先生、聞いておられますか。あの輝きはエリッセのもの、そうですよね!?」
　黙り込んでいるディガンに焦れたように、ロージナウが寝台のエリッセに近づこうとした。
「ただの劣等生だとばかり思っていましたが、アミテージア先生の秘蔵っ子なのはこういう訳だったのか！　ですがこうなった以上、あなた方だけに独占はさせませんぞ!!　すべての太陽と月は全世界の共有財産、それは無論」
「うるさい!!」
　長口上を、ディガンの怒鳴り声が遮った。行く手を阻むようにロージナウの前に立つと、
「小娘がどういう状況か見て分からないのか、本当に五流教師だな貴様は!!　大体この〈太陽〉はオレ様が見つけたんだ、オレ様のものだ!!　貴様にも誰にもやらん!!」
「なっ……、ご、五流は貴様のほうだろうが!!」
　怯みを見せつつも、万年二等星の汚名を雪ぐチャンスだと思っているのだろう。ロージ

ナウも食らいついてくる。

「せっかくの〈太陽〉を、こんな形で披露する羽目になったのは担当教師が無能だからだろうが!! うまく育てられれば、レドレリカの切り札にできたものを……このままでは他国が黙っていないぞ!?」

痛いところを突かれ、ディガンは返す言葉に詰まった。

ロージナウの言う通りだ。無差別に全世界に放出された〈太陽〉の輝きに、多くの〈星〉たちが魅了されたに違いない。

だが、正しい指摘だからこそ腹が立つということもある。大義名分を振りかざすロージナウが、己の栄達しか求めていないことがみえみえだから余計に。

――しかしエリッセからしてみれば、ロージナウとディガンのどこに違いがあるのだろう？

言うなれば家畜に餌をやるように、〈太陽〉を育てて喰らおうとしている『暗黒星』。ディガンもまた、己の欲望のためだけにエリッセの側にいるに過ぎない。

でも、それでいいのだ。へたれで長いものに巻かれる主義のエリッセだが、妙な頑固さがある。どれだけ「いつか喰らってやる」と連呼しようが、「ディガンさんには、今の平和な世界をもっと楽しんでほしいんですよね」などと寝ぼけた発言をするぐらいだ。

それにエリッセのために生きるべき男は、他にいる。だからディガンは安心して、今の

距離を保っていられる。
近づきすぎれば、きっとまた。
「おや、どうされました？　珍しく殊勝な顔をして。あなたに反省する能力があったとは意外ですな！」
ディガンがためらいを見せたことに気づいて、ロージナウが調子に乗り始めた。安っぽい挑発に安っぽい怒りを駆り立てられたディガンは、ぎろりと眼を剝く。
「……う、ん」
と、近くでぎゃあぎゃあとわめいていたせいか、エリッセがまた小さくうめいた。苦悶の表情と、胸元をさまよい始めた手を見て取った金の瞳から、荒々しい光が消える。
だが、怒りが消え去った訳ではない。
「――いつまでも五流のままに甘んじているやつこそが、真の五流だ」
抑制された怒気を秘めた声が、勢いづきかけたロージナウの舌を凍りつかせた。
「このディガン様に、小娘ひとり救えないなどということがあるはずなかろう。とにかく出て行け、オレの生徒の眠りの邪魔をするな」
声量だけを言うのなら、先ほどまでのほうがよほど大きかった。その代わり静かに、淡々と語られる言葉には有無を言わさぬ迫力が満ちていた。
「な、そ、そんな……、そんな言葉を、誰が……、ひぎゃあっ!?」

切れ切れにつぶやきつつ、じりじりと後退していたロージナウは、肩を叩く手に飛び上がった。

いつの間にかやって来たグラシカルが、後ろから触れたのだ。

「申し訳ありません、バルガス先生」

あまり申し訳なさそうな表情ではなかったが、言葉としてはグラシカルはそう言った。

「たった今、星団長より許可を得ました。エリッセのことは、僕とマキナウス先生にお任せ下さい」

問答無用でそう言い渡し、黙って外を指し示す。

ロージナウは何か言いたそうな素振りを見せたが、なまじ優秀な〈星〉であるだけに劣勢を悟ったようだ。悔しそうにしながら去っていった。

未練がましいロージナウを含め、多数の〈星〉たちが付近で息を潜めているのを感じるが、ひとまず室内には三人だけになった。ふうっと息を吐いたディガンは、小さな声でグラシカルを責めた。

「……遅いぞ」

「ごめん、根回しに手間取ってしまって。それより、エリッセは大丈夫かい？」

「ああ、今のところはな」
静寂が戻ったせいか、エリッセの表情は少しだけ和らいでいる。〈煌〉の状態もかなり安定していた。
「小娘は任せた。オレはここの結界を張り直してくる。またさっきのような馬鹿が突撃してくるとうるさいからな」
言い置いて、外に出て行こうとするディガンの背にグラシカルが声をかける。
「ああ、それなら僕がもうやったけど？　分からないとは、珍しいね」
「……お前ごときの結界では不安だからだ、馬鹿め。いいから小娘の手でも握っていてやれ、さっきからお前を捜しているようだ」
ぶっきらぼうに言い置いて、ディガンはそのまま去っていった。

がりがり、がりがり、と固形物を噛み砕く音が、夕映えに照らされた草原にひっきりなしに響く。
「あー、暇暇暇、くっそ暇だなー！」
憂さ晴らしを目的とした叫びに、がりっ、とひときわ大きな音が続いた。
癖のある金茶色の髪を夕日に染めた、大柄な男だ。長い手足を子供のように投げ出して、

遠く北東に〈導きの灯〉を臨む草原の真ん中にどっかりと座り込んでいる。
鍛えられた肉体を申し訳程度に覆う上着とズボンは、ペンキで塗ったようなぺかぺかした赤。そして腰に巻かれた太い革ベルトには、鈍い銀色の金属缶がいくつもぶら下がっている。
「くっそ、例の『暗黒星』には全然動きなしかよ！　つまんねえ!!　つーまーんーねーえー!!　オレ三年後には死ぬんだから、早く暴れてくれよ!!」
口癖になっている言葉をつぶやきながら、男は腰に下げた金属缶のひとつを開けて、中身を無造作に摑み出した。
沈みゆく終焉の夕が放つ、くすんだ光にきらきらと輝くそれは、色とりどりのキャンディ。
どこの街角でも売られているような安っぽいキャンディを、次から次へと口へ放り込み、忙しなく噛みつぶす。がりっがりっという音が、そのたびに上がる。
「平和でいいじゃないですか。おまけにレドレリカは、暖かくていい。この時間帯でも、いちいち〈煌〉で暖を取る必要がないのは助かります」
愚痴ってはキャンディを噛み、を飽きもせず繰り返す男の後ろで静かにつぶやいたのは、やや小柄な青年だ。亜麻色の髪を眉下できっちり揃え、一般人を絵に描いたようなありきたりのシャツとズボンに身を包んでいる。

年の頃は先の男と同じく、二十代半ばほどだろう。しかし穏やか、というより妙に達観した雰囲気を漂わせている。

「相変わらずじじくせぇよな、ニコラは」

ニコラ・セイドリックの特徴を端的に捉えた表現に、当のニコラは軽く肩を竦めた。

「私はジャノンさんと違って、何もない日常を愛しているだけですよ」

平和に馴染めない男であると揶揄されたジャノン・グラスは、唇に物騒な笑みを浮かべる。飴のかけらがついた指を舐めるしぐさは、舌なめずりする獣そのものだ。

「わざわざ暖なんざ取らなくても、ちょっと運動すりゃあったまるだろうがよ。……なあ、久しぶりに遊ぶか？」

「ご遠慮しますよ。たかだか暖を取るためだけに、マッド・キャンディと殺し合うなんて御免です」

今や本名よりも知れ渡った二つ名を呼ばれ、「マッド・キャンディ」はにやにやしながらまたひとつ飴玉を噛み砕く。がりがりと音を立てながら、さらにキャンディを掴み出そうとした指が止まった。

〈星〉に奇跡をもたらす力が、すべてを圧して輝く。

沈みゆく第三の太陽・終焉の夕も、徐々に力を増す第一の月・起源の陰も霞んでしまう。
空の羅盤に突然生まれた光の塊が、三つの太陽と月を押し退けて燦然ときらめいた。
そしてそれは、生まれた時と同様、忽然と消滅した。

夕闇に沈んでいく草原に、風が渡る音だけが響く。
ジャノンの手から、心躍る戦闘の次に愛するキャンディが転がり落ちた。しかし彼はもう、そんなものには見向きもしない。
「なあ！」
〈星〉もかくやとばかりに瞳をきらきらさせて、ジャノンはあ然としているニコラを仰ぎ見た。
「なあなあなあなあ!!　お前も分かったよな、今のアレ!!」
「……ええ」
「太陽が増えて、減った!!　すごいぞ!!　こんなの初めてだ!!」
単純明快なジャノンの表現は、先ほど起こった奇跡を実に分かりやすく示していた。
常に世界を照らす三つの太陽と三つの月。〈星〉たちが〈煌〉により術を行使する力の源。



その太陽が、一瞬だけ増えて四つになった。そしてすぐに三つに戻った。それは意図的に等星石を外しているニコラにはもちろん、同じく等星石をつけていないが、より優れた〈星〉であるジャノンにもはっきりと分かった。

それどころか……と、思考を巡らせるニコラの視界の端で、ジャノンが機敏に立ち上がる。

「……ちょっと、待って下さいよ、ジャノンさん。もしかして、今のを確かめに行こうとしていますか？」

今にも飛翔術か転移の術を詠唱しかけているジャノンの腕を、ニコラが掴み止めた。

「ったりめぇだろ!!　こんな面白いことを逃せるか!!」

心からの笑みを浮かべた金色の瞳は、消えた〈太陽〉のほうをまっすぐに見つめている。

「オレは三年後に死ぬんだから、やりてぇことやっとかないとな!!　だからほら、行こうって!!」

「だめですよ」

せっかちなパートナーの腕を掴んだまま、ニコラは静かに制した。

「いくら帝王陛下のご寵愛があるからといって、なんでもかんでもわがままが通ると思わないで下さい。さらなる下知が下るまでは隠密行動、その約束でレドレリカまで」

「嫌だ！　アレが気になる!!　アーレーが気ーにーなーるー!!」

地団駄を踏むジャノンのあまりの大人げのなさに、慣れているはずのニコラもため息をつかざるを得ない。正直レドレリカ行きが許された時から、こうなる予感はしていたのだ。

「……分かりましたよ。この調子じゃ、少なくともレドレリカ中の〈星〉に異常事態が伝わったでしょうし、いずれ調査の命は下るでしょうから。そもそもあなたに隠密行動ができるなんて、陛下が思っているはずがないですし」

物分かりよく言うものの、それは優しさゆえではなく、続く言葉は乾いている。

「ですが、くれぐれも慎重に。私の給料がかかってるんですからね。せっかく作った〈超新星〉が三年もたない、なんてことになったら、査定に響きますから」

「分かってるって」

お目付役の即物的な物言いにも、「マッド・キャンディ」の瞳に宿った好戦的な炎は勢いを増すだけだ。

「『暗黒星』に〈太陽〉か。面白くなってきたじゃねえか!!　人間太く短く楽しく生きねえとな!!」

金の瞳をらんらんと輝かせ、ジャノンはまたキャンディを摑み出して口に放り込んでは噛み砕く。飴を舐める時間さえ惜しむ性急さに、ニコラはもう一度ため息をついた。

グラシカルに握った鞭で頭を撫でられ、ディガンに口いっぱいに飴を詰め込まれる、謎の悪夢を繰り返し見ていた。

そのせいだろうか。ひどく頭が重い。

「やっぱり、こうなってしまったな」

めまいがする。熱いような、寒いような、感覚が麻痺していて温度が分からない。

「休日前だったのが、不幸中の幸いと言うべきだね。でも、一日二日でどうにかなることじゃないだろうな」

誰かがしゃべっている。この声は……、ディガンとグラシカルだ。

「せん、せ……、ディガン、さん……」

痺れが残る舌を動かしながら、エリッセは震えるまぶたを懸命に押し上げた。

味気ない白い天井が眼に入り、一瞬寮の自室に寝かされているのかと思った。しかしよくよく見れば、寝台がひとつしかないし、他の家具も暗い窓の外に見える景色も違う。おまけに空の羅盤の様子から察するに、現在は第二の月・至純の闇がそろそろ中天に差しかかろうという真夜中も近い時刻だ。少なくとも半日以上、エリッセは意識を失っていたことになる。

「……ようやく起きたか、馬鹿め」

薄暗い室内に、金の眼がかすかに光る。ベッドサイドからこちらを見下ろすディガンの

台詞は相変わらずだが、声音には安堵がにじんでいた。
「ここは……？」
質問に答えてくれたのは、同じくベッドサイドに立ったグラシカルだった。
「資料館の一室だよ。急ごしらえだけど、しばらくはここが君の部屋ってことになるから」
「え……？　い、いたた……」
滑らかな説明を、滑らかには飲み込めず、当惑してエリッセは聞き返そうとした。だが起き上がろうとした途端に頭痛に襲われ、質問を呑み込む。
「とりあえず、今日はお休み。詳しい話は、君の体調がもう少し回復してからにしよう」
エリッセの肩を軽く押し返し、グラシカルは言いつけた。
「でも、私……」
多少なりとも状況を把握しないと、休むに休めない。そう主張しようとするエリッセを、ディガンが突き放した。
「いいから休め。どうせ休めるのは、今日だけなんだからな」
急に冷たくなった声音に、思わず首を竦めてしまう。言われている意味も分からず、救いを求めるようにグラシカルを見上げるが、いつものように仲裁に入ってくれる様子はない。
ただ、切れ長の黒い瞳が無言でこちらを見つめ返している。

穏やかで優しい印象が強い青年が垣間見せる無表情は、去年の冬の記憶に直結した。初めて見た猛吹雪。初めて見た冷たい師の瞳。

寒気を感じ、声もなく身震いしたエリッセに、グラシカルは静かな声で話し始める。

「覚えているかい？　僕たちが君を昏倒させる前……君の〈太陽〉が、暴走したことを」

「は……、はい」

催眠の術と転移の術の合わせ技を受けたことは覚えている。無意識に腰の古傷に手をやると、ディガンがそっぽを向いてぼやいた。

「……当てつけのつもりか？　緊急事態だったんだ、仕方がないだろう」

「い、いえっ、ディガンさんを責めている訳じゃ!!」

上掛けの下での行為だったのに、ディガンの目ざとさには冷や汗をかいてしまう。転移の術に対するトラウマを吐露した直後とはいえ、場を脱するための最善策だったことぐらい、もちろんエリッセも理解している。

おまけに大声を出したら、また頭痛がしてきた。顔をしかめて黙り込んだエリッセに、腕組みしたディガンがこれみよがしにため息をついた。

「話を戻すぞ。箝口令を敷いたところで、今さらどうにもならんだろうな。ある程度以上の等星の〈星〉には、お前の存在はばれてしまったはずだ」

「他の星団、それにステッセルやヴェストラントからも、どういうことかと問い合わせが

来ているようだからね。……ギガンスティにも、たぶん」

レドレリカの遙か南部、それぞれが四つの一等星を擁する隣り合う大国。そこにまでエリッセの〈太陽〉の力が漏れてしまったということは、当然央海を挟んだ北の大地にも同じように伝わってしまっているだろう。

「ギガンスティには、あのランゼとかいう女がとっくに報告しているだろうがな。……しかしステッセルとヴェストラントか、奴らは二百年経ってもでかい面してやがるのか」

忌々しそうにディガンがつぶやいた。

「――きゃ、あああああああっ!?」

話が大きすぎて、一瞬ぽかんとしてしまったエリッセは、すぐに真っ青になって騒ぎ始めた。己の叫びでまた頭痛が起こったが、それすら気にならない。

南北大戦が終わって二百年。戦禍を被ったディガンがしばしば「ぬるい世の中になった」と嘆くように、本来ありがたいものであるはずの平和が人の心を蝕み始めている。

自分たちが負けた戦争のやり直しを願うギガンスティの蠢動も、ひとつの例だ。しかし皮肉なことに、戦勝国である南部連合の仲間割れのほうが、ずっと以前から噂されていた。

特に隣国同士であるステッセルとヴェストラントは、南北大戦以前から不仲で有名だ。ギガンスティという敵が存在していた頃は手を携えていたが、彼の国が膝を屈した現在は、

ギガンスティ内での勢力争いでもめ事が絶えない。

「きゃきゃー!? どちらの国も、レ、レドレリカが持ってる称号を欲しがってるって、聞きましたけど……!? わわわ私のせいで、その、南部大陸で戦争が起こったりしないですよね……!?」

南北戦争での功績により、レドレリカは戦勝国最多の五つもの一等星の称号を保持している。そもそもは功績を主張し合う二国間の調整のため、あえてレドレリカに多くの称号を贈った当事国たちが、今の時代になって取り返したがっているのだからとんだ笑い話だ。

一気に話を飛躍させたエリッセに、グラシカルは苦笑を浮かべた。

「いや、そんなことはないと思うよ。称号欲しさに戦争を始めるなら、シリウスの称号をハーシエルくんが正式に得た時点で起こしただろうし」

さらりと口にされた言葉にぎょっとするエリッセだったが、続く言葉はさらに衝撃的だった。

「けれど〈太陽〉を得るためなら、戦争とまではいかなくても、何かしらの手を打ってくることは十分考えられる。陛下は知らぬ存ぜぬで押し通すつもりのようだけど、もう一度〈太陽〉が暴走する、なんてことになったら言い訳はできない」

静かな断定に、ディガンの問答無用の宣言が重なった。

「そういう訳だから、小娘。この先お前に休息はないと思え」

「いや、休息は取ってもらうけどね、いくらなんでも」
ひどい物言いに一応突っ込んではくれたが、グラシカルの眼は笑っていない。
「でも、最低限の休みしか取れないことは覚悟してもらうしかない。君の〈太陽〉が、せめてもう少し安定するまでは」
淡々と語ると、彼は最後にこう結んだ。
「明日から普通の授業には出なくていい。昇星試験のことも忘れなさい。その代わり、今後は僕たち二人の特別授業を受けてもらう。このことは星団長も認可済みだ」
厳かに言い渡された内容に、エリッセの意志が介在する余地はなさそうだった。
悲鳴も追及も忘れ、すみれ色の瞳をただ見開いているエリッセに、ディガンがふんと鼻を鳴らす。
「だから中年の授業になぞ出るなと言ったんだ、馬鹿小娘。明日からは今までのように優しいオレ様ではないからな、今はせいぜい休め」
「僕たちは隣の部屋にいる。何かあれば、〈煌〉を使って呼んでくれればすぐ来るよ。じゃあ、お休み」
黒ずくめの長身と、白い制服の背中が部屋の外に消えていく。
まさかこの二人が同室なのかと驚いたが、廊下に出た二つの影はたちまち左右に分かれた。ディガンが左、グラシカルが右の部屋に待機しているということだろう。

奇妙な落ち着きをもってそれを確認したエリッセは、急に疲れを覚えてまぶたを閉じた。肉体の疲労に、精神の疲弊がとどめを刺した。もう指一本動かせない。何も考えられない。

「……どう、なる、の……？」

崩れるように眠りの底に吸い込まれていく最中、小さく漏らした問いに答えは返ってこなかった。

ふと思い返せば、日々は恐ろしい早さで過ぎているのだ。

なのになぜ、今というこの時間はこれほどまでに進みが遅いのだろうか。

〈導きの灯〉の端、星団長の命により関係者以外立ち入り禁止とされた講義棟の一画で、板張りの床に座り込んだエリッセは埒もないことを考えていた。

だが今は、無駄なことを考えている暇はない。

「立ちなさい、エリッセ」

感情のないグラシカルの声が、それを改めて強く実感させる。

「は、はい……」

集中しないといけない。どうにか呼吸を整えたエリッセは、言われるままによろよろと

立ち上がった。

〈太陽〉の暴走により、この世界にもうひとつの〈太陽〉が存在することが知れ渡ってからすでに五日。エリッセの生活は激変していた。

「もう一回。できるね？」

「はい……」

ふらつきながら、まずは空の羅盤を確認する。現在最も中天に近いのは、第三の太陽・終焉の夕。

「天空の覇者、太陽が三、終焉の夕よ」

下腹に力を入れ、理想の具現を強くイメージする。

「我が力示す力となれ、我が力示す剣となれ!!」

ごくごく初歩的な攻撃術を、現在エリッセが持てる〈煌〉すべてを出しきるつもりで放出する。生み出された光の塊が、あらかじめグラシカルの眼前に展開されていた防御術とぶつかって室内を真っ白に輝かせた。

とはいえ、それも一瞬のこと。まばたきするほどの間にエリッセの〈煌〉は弾き尽くされ、呆気なく消滅する。

本日は昼食を摂って以来、単調なこの繰り返しを何十回も行っているのだ。元々お粗末なエリッセの〈煌〉はとうに絞り尽くされ、派手な光を生み出すぐらいしか効果がない。

「今日はもうこんなところだろう」

少し離れてその様子を見守っていたディガンが、再び床に崩れたエリッセの側に近づいてくる。

〈煌〉の行使に体力や筋力は無関係で、物を言うのは精神力。性差も年齢差も関係ない、というのが定説であるが、こうも何度も何度も全開で術を使うと体力の消耗も激しい。

打ち上げられた魚のように、激しく胸を上下させてあえいでいるエリッセにディガンが冷静に尋ねてきた。

「何か変化は？」

「な、何も……」

「そうだな。お前の〈煌〉の伸びも悪くなってきた。『不幸の星』抜きでも、やはり〈煌〉の大きさだけならせいぜい五等星止まりか」

大きな素養をグラシカルに見込まれ、〈導きの灯〉入りしたエリッセであるが、彼女の力はあくまで〈太陽〉に特化したもののようだ。

「……あるいは、『不幸の星』に〈煌〉は喰らい尽くされてしまったのかもね」

「可能性はあるな。気が利かない小娘だ、オレが喰らう前に喰われているとは」

頭上で交わされる会話に、「どうせ劣等生ですよぉぉぉ」とか、「ディガンさんに喰われるためにがんばってたんじゃないんで!!」とか、突っ込む気力が湧かない。教師たちの会

話もそこで途切れ、険悪な言い合いにさえ発展しない。

すべてはエリッセに眠る〈太陽〉の制御方法を見つけるため。この五日間の生活はその目的のためだけに費やされていて、軽口を叩くような雰囲気はいっさい排除されていた。

「立てるかい？」

スカートの裾を払い、立ち上がろうとしていたエリッセにグラシカルが手を貸してくれる。その表情は、見慣れた優しい顔。

「あ、ありがとう、ございます……」

けれど最近は、冬の終わりまで知らずにいた無表情の印象が強くなり始めていて、お礼の言葉も少しぎこちなくなってしまう。

ともあれ、ようやく今日の特別授業は終わりのようだ。食事の席でも雰囲気は変わらないことを考えると気は重いが、これ以上絞られずに済むのだと思うと、知らず安堵のため息が漏れた。

「ところで今日は、僕たちはちょっと報告に出てくるから。帰りは遅くなりそうだし、先に寝てくれていいからね」

「え？」

星団長及び王宮に状況を報告している、とは聞いていたが、今夜は実際に顔を合わせての会が開かれるようだ。驚くエリッセに、ディガンが脅し文句を吐いた。

「監視の眼がないからといって、逃げ出したりするなよ、小娘。お前の嫌いな転移の術で、すぐに探し出してやるからな」

「に、逃げたりしませんよ！　……私だって、自分の立場は分かってます!!」

反射的に言い返した言葉が、エリッセ自身もびっくりするような大きさで響き渡る。

グラシカルも一瞬頬を強張らせたが、ディガンはかすかに眉根を寄せるに留めた。

「……いい心がけだ。なら構わん」

ディガンとしては寛容な態度に、逆に心がささくれるのをエリッセは感じた。そして、そんな自分を恥じた。

――だめだ、しっかりしないと。二人とも意地悪でこんな風にしてるんじゃない、私を〈太陽〉としてちゃんと育てるためにやってくれているのに!!

……でもそれは、果たしてエリッセのためなのか？

胸の底ににじんだ染みのような問いから眼を逸らし、エリッセはグラシカルに質問した。

「あの……、私は行かなくていいんですか？」

「大丈夫だよ。その代わり、一緒に食事をする相手は呼んであるから……ああ、来たね」

エリッセにはまだ分からないが、一等星であるグラシカルは知り合いの〈煌〉を察知したようだ。程なくエリッセの空の羅盤にも、覚えのある〈星〉が二つ浮かんできた。

「ハーシエルくん、ティリス先生！」

閉鎖された講義棟の入り口から、ディガンたちと入れ替わるように入ってきた二人の顔を見てエリッセは歓声を上げた。

ティリスはとにかく、最近のハーシエルと一緒にいると彼の将来への不安が募るばかりなのだが、今の気詰まりな状況では大歓迎だ。いつもは係の人間が届けてくれる食事を、仲良く半分ずつ持った二人もエリッセを見て嬉しそうにする。

「ごめんなさいね、リゼインちゃんやタタちゃんも、あなたのことを心配していたんだけど……」

恐縮した表情でティリスが口にした友達の名前に、エリッセは苦い笑みを浮かべた。

「いえ、いいんです、今の私に会える人は限られているだろうし」

担当教師のどちらの発案か知らないが、ティリスやハーシエルを呼んでくれたことがエリッセへのささやかな気遣いであることは明白だ。同時にこの人選は、〈太陽〉についての詳細な知識を持つ者以外をエリッセに近づける意志がないことを示している。

「とにかく、どうぞ。あ、ハーシエルくん、持つよ？」

ティリスが持っているのと同じ大きさのバスケットを重そうに抱えたハーシエルに手を

伸ばすが、彼は大人びたしぐさで首を振った。
「大丈夫だよ、子供扱いしないでほしいな」
ティリス先生の前で、という含みを感じ、ぎくっとしたエリッセに対しハーシエルはこう指摘した。
「それに、今の君みたいな顔色の人に、荷物を持たせようとは思えないよ。さ、いいから案内して」
言われてエリッセは、思わず頬に手をやった。
しばらく会っていなかった友人にはっきり分かるほど、自分は疲れ果てた顔をしているらしい。
「……まずは、お食事しながら、ね？」
ティリスも、指摘するタイミングを計っていたのだろう。困ったように微笑みながら促され、エリッセは強張った顔でうなずいた。

講義棟の一階の端、講義室の隅に用意された古ぼけた卓を三人で囲む。いつもディガンやグラシカルと食事をしているのと同じ場所だが、同席者が違うとずいぶん雰囲気が違った。

「噂はだいぶ収まってきたけど、表面に出なくなっただけかな。王宮から達しが出て、他星団からの問い合わせはなくなったけど、ステッセルやヴェストラントはうるさいようだし」

厚手のパンに鶏肉を挟んだものを行儀良く噛みながら、ハーシエルが語る状況にエリッセは重いため息をつく。

「ちょこちょこ聞いてはいたけど、やっぱりそういうことになってるんだね……」

君も知っておいたほうがいいと、グラシカルはエリッセに〈太陽〉が現在どういう扱いになっているかは教えてくれていた。だが傍観者の立場であるハーシエルの口から聞くと、事の重大さに改めて震えがくる。

「けど、あの二国間での足の引っ張り合いがあるからね。どっちも寛大な統治者を気取る見栄っ張り同士だから、表立って〈太陽〉を寄越せ、なんてすぐには言わないと思う」

「ちょっと表現がどうかと思うところはあるけど、私も同意見よ」

苦笑しながらティリスもうなずいた。エリッセも、そういうことは同じくグラシカルから聞いていた。

自身を南部大陸の導き手と位置づけているステッセルとヴェストラントは、表面的には寛大な外交を心がけており、レドレリカを「南北大戦の犠牲者」として妙に丁重に扱う傾向がある。内心では五つもの一等星の称号はもったいない、特にシリウスは我が手に欲

しいと思っていても、決してはっきりとは言わない。

そこに互いにだけは負けたくない、という競争心が加味された結果、双方の動きが鈍くなるという訳だ。〈太陽〉は喉から手が出るほど欲しいくせに、あくまで紳士的に、レドレリカ側から庇護を要請するように仕向ける。あるいは、「我が国にその意思はないが、隣国は違うようだ」と揺さぶってくる。

「それより問題は、ギガンスティでしょうね。王宮から去年の件について調査の申し入れはしているようだけど、どこまで有効かは分からないようよ」

二等星の教師、ランゼ・リトリス。グラシカルにべたべたし、エリッセを邪魔者扱いしてはばからなかった彼女の正体は、ギガンスティの間者だった。

「……それもステッセルとヴェストラントの人たちの問題なんですよね……」

ややこしい事態をさらにややこしくする関係図を思い描き、エリッセは付け合わせのサラダをつつきながら頭を抱えた。

南部同盟、はっきり言えばステッセルとヴェストラントの監視下にあるはずの敗戦国の人間が、身分を偽って他国に長期潜伏していた挙げ句、禁呪『暗黒星』の秘密に近づいた罪は重い。おまけにルトエに『不幸の星』を憑けたのも、彼女の仕業だという。

だが、間に二大国を挟んでいるゆえに、下手にギガンスティに抗議をするとステッセルとヴェストラントに文句を言っていると取られかねないのだ。体面を重視する大国は、当

然いい顔をしないだろう。
ルトエ王の苦悩を思いやり、エリッセまでしかめ面になってしまう。ただでさえ病弱な上、〈煌〉も持たないと後ろ指を指されがちである彼女にかかっている負担を思うと、申し訳なさでいっぱいになった。
――けれどルトエは、夫である宰相イライアスに支えられていて、グラシカルにも守られていて。
胸の底で、汚い染みが面積を増していく。
それを振りきるように、エリッセは無理をしてはしゃいだ声を出した。
「……まあ、でも、私の〈太陽〉がちゃんと制御できるようになれば……当面は、平気なんだよね。それどころか、もしかしたら私の存在が、国家間の勢力バランスを変えちゃうのかも！　わーすごい!!　私みたいな万年六等星が!!　わー……」
無理やりテンションを上げてみたが、長くはもたなかった。かえって不安そうな同席者の視線を感じながら、エリッセはあまり進んでいない食事を虚ろに見つめる。
「制御、できたらだけど、ね……」
五日前から、エリッセの〈太陽〉の力は暴走していない。だがそれはただの偶然であり、これといった制御方法が見つかった訳ではない。
「僕たちも手伝うよ。だってエリッセは、僕の数少ない友達だし。もう君の担当教師には

言ってあるから、安心して」

なんでもないようなハーシエルの声に、エリッセははっと顔を上げた。

「ハーシエルくん……」

「僕はもう昇星試験を受ける必要もないから。それに僕がシリウスの称号を得たことも、多少状況に影響していそうだし」

グラシカルも以前口にしたような言葉を聞いて、ティリスが身を縮める。

「あ、あの、じゃあ、私もごめんなさい……ハーシエルくんの力が、まさかこれほどまでのものとは思わなくて……」

〈導きの灯〉への入団当初、高い素養を持ちながらも心を閉ざしていたハーシエルを懸命に教育し、ついにはシリウスの座を摑むまでに育てたのはティリスだ。しかし今までは称号があると言っても形だけ、空位であることで見過ごされていた最強の一等星の称号を、十一歳の少年が得たことについて二大国は快く思っていないらしい。

「気にしないで下さい、先生。むしろ誇りに思って下さい。ティリス先生の熱意がなければ、僕は輝くことができなかった。つまり僕にとっての太陽は、エリッセじゃなくて、あなたなんですから」

どさくさに紛れて口説き始めたハーシエルから、ティリスが食器をひっくり返しそうな勢いで後ずさる。

「そ、そそそ、そうね、誇りに思うわ！　生徒として!!　教師として、あなたの成長の助けになれたことを誇りに思ってる!!」

　童顔を真っ赤に染め、眼鏡がずり落ちそうな勢いでまくし立てるティリスをハーシエルはじっと見つめながら、

「それに、友人の危機に何もしない男だなんて、僕の好きな人に思われたくないんだ。むしろここで僕が役に立てば、いいところを見せられるし」

「……そうだね……」

　一瞬の感動がどこかに行ってしまったことを感じながら、それでもエリッセはへにゃりと相好を崩した。

「うん、まあ、でも、嬉しい。二人の顔、見られて。そんな風に、言ってもらえて……」

　泣き顔にも似た笑顔に、今度はティリスが身を乗り出してくる。

「エリッセちゃん、本当に顔色が悪いわ。ちゃんと寝ている……？」

「も、もちろん、ちゃんと寝てますし、ちゃんと食べてますよ！　ただ、なんていうか、出口が見えない努力ってつらいなーって……」

　ぽろりと漏れた言葉を、生徒の心の機微に敏感な教師は聞き逃さなかった。

「ちゃんと寝て、ちゃんと食べて……、ちゃんと、息抜きはできてる？　グラシカル先生やええと、ディガン先生に、出口が見えない努力はつらいって言えてる……？」

ティリスもディガンを「先生」とは言いにくいようだが、それ以外の部分はよく伝わってきた。

だからこそ答えられず、うつむくエリッセにティリスは優しい声で提案する。

「エリッセちゃんから言いにくいなら、私がお二人に話しましょうか？　その……、非常事態だとは分かっているけど、もう少し気を遣ってくれるようにって」

穏やかで暖かい声音が、乾いてひび割れを走らせていた心に染み込む。

一瞬、ティリスにすがろうかと思った。でもすぐに、その考えを振り払った。

担当教師を奪われるとでも思っているのか、なんとなくこっちを見る眼がきついハーシエルに怯えた訳ではない。

仮にティリスに頼み、ディガンとグラシカルがもう少し手加減をするようになってくれたとしてだ。そのために制御方法が見つかるのが遅れ、また〈太陽〉が暴走すれば、他国はいよいよ本格的にレドレリカに介入してくるだろう。

そうするとルトエは困り、そんな彼女のためにグラシカルは懸命に……

違う、第一に考えるべきはこんなことじゃない。

「――いえ、大丈夫です!!　最低限の気は遣ってもらってます。だって私、ほら、貴重な〈太陽〉だし!!　うまく能力を育てれば、いろいろ役に立ちますものね!!　第一〈太陽〉を制御できなければ、一番困るのは私なんですから!!」

必死に虚勢を張るエリッセに、何かを感じたのだろう。
「私たちも、これからは時々こちらに顔を出すようにするわ。何かあったら、いつでも言ってね」
控えめなひと言を最後に、ティリスは以降二度と自分からこの話題に触れることはなかった。

ティリスとハーシエルがエリッセに会いに来るようになってから、二日目の夜。
「ティリス先生に怒られたよ。あまりエリッセを追いつめないようにって」
ディガンの部屋を訪れていたグラシカルは、開口一番淡々とした口調で告げた。
一度はエリッセに断られたものの、その疲労具合を見て取ったティリスが独断でグラシカルに話をしたのだ。最近はエリッセの前以外でもどこかよそよそしく、冷たい気配を身にまとっているグラシカルに多少怖じた風ではあったが、きっぱりと「あんな顔色のエリッセちゃんを、これ以上しごくのはやめて下さい」と言いきった。
普段は気弱な性格のティリスだが、ひとたび生徒のためだと思えば意外と大胆な行動に出る。一度などは、〈導きの灯〉を訪れたものの、ハーシエルの存在を完全に無視した彼の父親に食ってかかり、謹慎処分を受けかけたことがあるほどだ。

しかしディガンの反応は、金の瞳を一瞬揺らめかせたのみ。
「小娘の担当教師はオレたちだ。そしてオレたち二人が珍しく意見の一致をみている以上、方針を変える必要はないだろう」
「そうだね。僕もそう思ってる」
グラシカルも、事もなげに同意を示す。その表情は、静かすぎるぐらいに静かだ。
地味ではあるが品良く整った面を一瞥し、ディガンはおもむろに切り出した。
「だが、お前の小娘への接し方は変えてもいいかもな」
意味ありげな言い回しに、グラシカルがかすかに眉をひそめる。
「分かっているだろう。あの小娘は、お前を非常に慕っている」
誰の眼にも明らかな事実を突きつけられても、グラシカルの表情は動かない。ディガンも珍しく、淡々とした口調で続けた。
「だからオレが厳しく接し、お前がその分甘やかす。飴と鞭作戦でどうだ？」
「いい案かもね。事態がこれほど差し迫ったものでなければ」
読めていた展開だったらしく、グラシカルは素早くそう切り返した。
「僕だって、エリッセをいじめたい訳じゃない。でも君も分かっている通り、初めて彼女の〈太陽〉の力が発動してからもう数ヵ月以上経つのに、いっこうに制御方法が分からないんだ。次に暴走したら、他国に見つかる見つからない以前に、エリッセは自滅してしま

うかもしれない」

自分の中から湧き上がる光と熱に、内側から食い破られて。

「――そんなことには、このディガン・マキナウス様のプライドに懸けてさせない。仮にもオレが生徒とした小娘が、オレに喰われる前に自滅など許さん」

睨むようにグラシカルを見据え、ディガンが低い声を出した。相変わらずの態度に、グラシカルは微笑する。

「頼もしいね。でも、その気持ちは僕も同じだ。……僕には、エリッセの人生に対しての責任がある」

瞳を細めるディガンを尻目に、続ける。

「僕はエリッセに『不幸の星』を押しつけ、八年間もの間散々無駄な努力をさせてきた挙げ句、殺しかけた」

「貴様の罪は、それだけじゃない」

間髪を容れず、鋭く指摘されてもグラシカルは動じない。

「そうだね。エリッセが、それでも僕を慕うように……依存するように仕向けた、それが何よりの僕の罪だ」

薄暗がりの中、ディガンの金の瞳が強く輝き始めた。エリッセならたちまち縮み上がりそうな殺気を振りまく『暗黒星』に、グラシカルは同じ口調で語る。

「下手に僕以外の人間に懐いて、不要な知識を得て、『不幸の星』に気づいてしまっては困るからね。天涯孤独の女の子の心を摑むなんて、雑作もないことだった。君ほどじゃないけど、僕は割と女性受けするんだ」

かすかな笑みさえ浮かべての語りを受けて、ディガンの唇から氷のような声が漏れる。

「他人とは必要以上に交わらず、笑顔の仮面ですべてを閉め出し、まともに関わるのはあの小娘とだけ。それもすべて、昔想いを寄せた女のためか」

「……国王陛下のために粉骨砕身するのは、〈綺羅星〉の務めだからね」

無表情と変わりない笑みを維持してしゃべるグラシカルに、ディガンは口汚く吐き捨てた。

「オレ様が貴様より百倍いい男なのは周知の事実だが、そんなこととは無関係に、貴様は男のくずだ」

「全くだね」

これにも、グラシカルは穏やかに相槌を打っただけだった。そして、穏やかさはそのままにこう言った。

「その点、君は男の中の男だ。好きな女の子に邪魔だから消えろと言われて、むざむざ〈夜の底闇〉に封印されるなんて、滅多にできることじゃないよ」

「――お前には負けるさ。好きな女を救うために、十にも満たないガキの人生を踏みにじ

るなど、並みの神経でできることじゃない」
「本当にね」
指で弾けば音がしそうなほど、空気が硬く張りつめていく。
しばし黙って睨み合ってから、ディガンが話題を戻した。
「小娘が、お前に依存していることが分かっているなら。……責任を取ると言うなら、なおのこともっと優しくしてやればどうだ？　国王はすでに人妻で、ああ見えて夫との仲は良好のようだ。貴様はもう、あの女の人生にはそれほど必要ではないだろう」
重々しい声に、グラシカルが浅いため息をつく。
「……だから、飴と鞭、かい？」
「そうだ。オレ様はびしびしと小娘をしごき、貴様があいつを慰め、力づけて、またオレのところに寄越す。完璧だろう」
ふんぞり返って自説を披露するディガンから、グラシカルはふと眼を逸らした。
「確かに、少しやり方を変えるべきではあるかもね。エリッセは、最近……昔の国王陛下に、ちょっと似てきてしまったな、とは思ってる」
「昔の国王？」
「前に言わなかったっけ？　僕が王宮付きの〈綺羅星〉だった頃、まさに今君が言ったような状況になっていたことがあるんだよ。難しい立場に置かれたレドレリカを守る、優秀

な王を育てるため……宰相閣下はルトエ王女殿下をがんじがらめに縛りつけ、自由な時間など少しも許さなかった」

無論宰相イライアス・ルードラにも言い分はあろう。主に病弱を理由に腹違いの弟との継承権争いにさらされた王女は、能力を立証しなければ自分の地位を守れない。そして国内での政争にすら負けてしまうような王では、常に大国に振り回されるレドレリカの立場はもっと悪くなってしまう。

しかし、自身への思慕すら「王には不要です」と突き放し、ひたすらに鋳型にはめ込んでいくようなイライアスの教育にルトエは疲れ果てていた。

『あいつが望むような人形に、早くなりたい』

それこそ人形のような無表情で、彼女は言った。イライアスの教えだけを忠実に守る、心ない人形になれれば、いっそ楽なのだと。

疲れ果てていた王女を、救いたいと願った。

だが現在、彼女の側に在り支えているのは、彼女の初恋の男だ。

「だからもう、分かっているんだ。僕に飴役は向いてないってね」

淡く微笑んだグラシカルの眼が、黙り込んでいるディガンを見据える。

「だから、君がエリッセに優しくしてくれればいい」

「……はあ？」



ディガンが呆れ声を上げた。
「ふざけるな、なんでオレがそんなことをせねばならん」
「僕がやらないなら、君がやる。それだけのことじゃないか。だって君は、エリッセの担当教師だろう？」
瞬間、たじろぐような気配を見せたディガンの表情に険が広がっていく。
「……貴様、責任があるだのなんだの言ったくせに、オレにあの小娘の世話を押しつける気じゃないだろうな」
赤味を帯びた〈煌〉がディガンの全身を包む。
ベテルギウスの称号はただの自称ではない。一等星であり、他者の〈煌〉を喰らう闇星の圧倒的な力が、グラシカルを威嚇するように輝き始めた。
「分かっているのか？　オレは『暗黒星』。いずれ育った〈太陽〉を喰らうため、貴様らと共にいるに過ぎん」
立場の違いを見せつけるように、禁呪の名を口にする。
「それにこのオレとあの十人並み小娘が並んで、釣り合いが取れるはずがないだろうが。人並みの羞恥心を持ち合わせているなら、恥ずかしくてとてもそんなことは」
「ショナエルは、それほど美人だったという記録はないけどね」
ディガンの言葉を遮り、グラシカルが急にかつてのシリウスの話を始めた。

「むしろ十人並み、それ以下の容姿だったという話もある。くしゃくしゃの赤毛でそばかす、試験の順位ばかり気にしていて、友人もほとんどいなかったと」

「黙れ!!」

ぴしっ、と音がして、グラシカルの白い制服の裾が切り裂かれる。

特に詠唱などした様子もないのに、怒りにより瞬間的に増幅されたディガンの〈煌〉が鞭のように空を走ったのだ。

「黙れ。平和な時代でぬくぬくとしている貴様らが、オレたちのことを語るな!!」

世界を巻き込んでの大戦に青春を捧げた者と、二百年後の平和に生きる者。

自分たちの間に横たわる時間を思い知らせるように、ディガンはかっと眼を剝いて吠えた。

「……分かったよ」

隣室のエリッセの動向に意識を向けながら、グラシカルはため息をついた。泥のような眠りの底にいる彼女が騒ぎに気づいた様子はない。

「じゃあ、とりあえず明日からも、鞭と鞭作戦は継続。飴はティリス先生とハーシエルに任せよう」

何か言いかけたディガンを遮るように、言葉を継ぐ。

「エリッセの人生について、僕には責任があるんだ。君や彼女本人がどう思おうが、自滅

だけは絶対にさせる訳にはいかない。君の言う通り、いいかげん僕への依存心を断ってあげないとね。では、お休み」

それきり、あっさりと部屋を出て行くグラシカルが立っていた場所を意味もなく蹴飛ばしてから、ディガンは窓辺に向かった。その身にまとっていた怒気交じりの〈煌〉は消えており、表情も怒りよりは痛みを覚えた者のそれに近い。

「……小娘には、お前が必要なんだ。少なくとも、今はまだ」

言いそびれた言葉を喉の奥でつぶやいてから、睨むように窓の外を見上げる。

眼で確認するまでもなく、中天を外れて沈みつつある第二の月・至純の闇が煌々と輝いている。三つの太陽と三つの月だけは、二百年前も今も変わらない。

「……いや、これから変わる可能性があるのか」

つぶやいて、隣室に向かいかけた視線を律し、夜空に固定する。

「今のままで、変わらなくて、いい」

苦々しく細められた金の瞳に降り注ぐ月光が射し込み、半透明の光の膜が張ったようににじんだ。

「恋だ愛だと、つまらんことを持ち出さなければ……男と女の関係も、壊れずに済む……」

一方、ディガンと別れて自室に戻っていたグラシカルは、ディガンの〈煌〉の動きを読みながら微苦笑を浮かべていた

「君は案外細かくて、真面目な男だね。年頃の女の子の保護者代わりとしては、ありがたく思うよ。だからこそ、もうちょっとだけ踏み出してくれてもいいかな、とは思っているんだけど」

机の上に山ほど積み上がっている資料を一冊手に取りながら、肩を竦めて付け加えた。

「心配しなくても、君がライバルだと思ってる奴は、出会って半年にも満たない男にあっさり肩を並べられているんだけどねえ……」

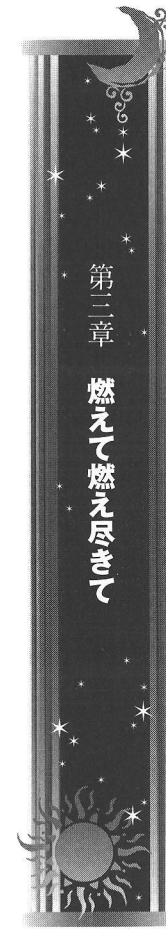
先日の〈太陽〉の暴走の際、周囲の動揺を抑えるための手続きを済ませてからエリッセの様子を見に行くと、なぜかディガンに彼女の世話を任された。

ディガンが言う通り、エリッセは「先生」を捜して手をさまよわせていた。だからグラシカルは彼女の手を握り、「大丈夫だよ、僕はここにいるから」と力づけた。

するとエリッセは、へにゃりと独特の笑い方をしながら夢うつつにつぶやいたのだ。

――やっぱり、ちゃんと「先生」って呼んだら、ちょっとは優しくしてくれるんですね……

複雑な胸の痛みが、古傷をうずかせる。だからグラシカルはそれ以上思い出すのをやめて、可愛い生徒とかつて愛した女性のための研究を再開した。



第三章　燃えて燃え尽きて

春の草原を渡ってくる風が、淡い金色の髪を揺らす。

「……やっちゃった」

〈導きの灯〉星団の外縁部、レドレリカの国土の六割を占める草原に接した場所にエリッセはいた。〈導きの灯〉全体が乗っている巨大な白い岩の側面に座りながら、半ば呆然とつぶやく。

「逃げちゃった。私」

通常、星団外縁部には出入りを監視する門番役の〈星〉がいる。まだ授業の終わっていないこの時間、悪い意味で名前が売れているエリッセは、本来ならすぐに呼び止められるはずだ。

だが現在エリッセがいる場所は、こたびの〈太陽〉騒動で関係者以外立ち入り禁止に指定された区域であるため、門番が存在しない。そして今のエリッセは、〈煌〉を完全に消している。

「ディガンさんの監視の眼を盗んで、一度もこけたり物をぶつけられたりしないまま、ここまで来られるなんて！　すごい!!　『不幸の星』がない上に、〈煌〉が上がると結構なんでもできちゃうんだ!!」

〈星〉が持つ〈煌〉を完全に他者の空の羅盤上から隠すことは、ある程度以上の力を持つ〈星〉にしかできない。万年六等星の身の上では不可能だったことも、ここ十日あまりのしごきに耐え、微弱なりに育てた〈煌〉なら可能になったのだ。

だが以前なら、たとえ〈煌〉を隠せたとしても数々のアクシデントに見舞われ、結局誰かに見つかって連れ戻されるというオチが待っていただろう。そもそもディガンの眼を逃れること自体、不可能だったと思われる。

しかし今は、ほとんど発作じみた突発的な行動だったにもかかわらず、無事に目的を達成できた。

それは、『暗黒星』で『不幸の星』を喰らってくれたディガンのおかげ。

昼食後のわずかな休憩時間にエリッセが逃亡したことを知り、今ごろ怒り狂っているに違いない彼のおかげ。

一時のはしゃいだ気分もどこへやら、春の日差しを浴びながら寒気を覚えてしまう。

「こ、今度こそ、『暗黒星』を使われるかも……」

身震いしたエリッセの耳に、鐘の音が聞こえてきた。鐘を突く教師の〈煌〉に乗ったそ

の音は、〈導きの灯〉のどこにいても必ずすべての住人たちの耳に届く。

「……試験終了、か……」

本当なら、今日は昇星試験だったのだ。

試験の手伝いに駆り出されていたグラシカルも、そろそろエリッセが姿を消したことに気づいたかもしれない。

なのに、ハーシエルやティリスにも心配をかけているのかもしれないのに、立ち上がる気になれない。

「あーあ、また一年、六等星は確定ってことか……」

気怠い喪失感が、恐怖を上書きしていくのが分かる。

毎年の目標にしていた行事が、自分だけ仲間外れにされて終わっていった。言いようのない寂しさと虚しさと焦りが、渾然一体となって心にのしかかってくる。

「また、試験すら受けられないなんて……ディガンさんてば、偉そうなこと言って、本当は『不幸の星』を喰らいきれてないんじゃないかなあ……？　だって全然、いいこと……」

すみれ色の瞳を暗く翳らせ、つぶやいた言葉がさらに心を重くする。これではいけないと、エリッセは自分に活を入れた。

「で、でも、いいもんね！　等星なんて関係ないもの!!　だって私は〈太陽〉!!　全世界垂涎の的だよ!!　すべての〈星〉が輝けるのは私のおかげ!!」

ディガンが乗り移ったかのように、意識して傲慢な言い方を選んでみる。

多少気分が明るくなったが、反動はすぐに来た。慣れないことをするんじゃなかった、と悔やみながら、抱えた膝の上に頭を乗せる。

「〈太陽〉の力を、制御できさえすれば、だけどね……」

〈太陽〉の存在を全世界に知らしめた暴走からすでに十日以上が過ぎた。いまだ、エリッセの能力は安定していない。

数日前、一度また暴走の気配が出て焦ったが、大事には至らなかった。ただし制御方法を摑むきっかけにもならず、散々二人の教師にその感覚を説明させられたエリッセは、しゃべり疲れて喉がかれてしまった。

「……私ががんばって、立派な〈太陽〉になれれば……先生は喜んでくれる……ディガンさんも、ちょっとぐらいは褒めてくれる……万一『暗黒星』を使われそうになっても、きっと撃退できるし……」

そうでなければ、待っているのは自滅だ。だからこんなところでやさぐれていないで、すぐにも立ち上がり、ディガンに平謝りでもなんでもして特別授業を再開するべき。

頭では分かっているのに、胸の奥に降り積もった懊悩が重い。疲れきった心と体に、すぐさまそれを振りきって駆け出すだけの余力がない。

徒労でないという保証のない努力を、延々と続ける疲労がエリッセの心身を蝕んでいた。

出口の見えない努力に、自分だけでなくディガンやグラシカルも疲れてきているのが分かるから余計に。

「でも、がんばるから……、一生懸命、がんばるから……だから、今はちょっとだけ、休ませて……」

額を膝頭に当てたまま、眼を閉じる。常に光にあふれたこの世界から切り離され、まぶたの裏の闇に隔離されたような錯覚が奇妙な安寧をもたらした。

年一回会えればいいや、と思っていたディガンのみならず、今はグラシカルにもあまり会いたくない。

穏やかで優しいばかりの人ではないことぐらい、分かっているつもりだった。意外に辛辣な面があることは、『不幸の星』とは無関係に、八年間の付き合いの中で知っていると思っていた。

けれどそんなものは、彼のほんの一部だったのだ。

『あら～、どうしたの～？　お顔が悪いわよ、エリッセちゃん～』

髪を撫でる春風に紛れ、聞き覚えのある声がした。はっと顔を上げたエリッセの意識から、数々の悩みが吹き飛ぶ。

「えっ……、きゃ、きゃきゃきゃきゃあああああっ!?」

誰かに見つかってしまうかもしれない、という危惧も忘れ、盛大に叫んでしまったのも

無理はない。

緩く波打つ明るい栗色の髪。質素な服装なのにどこかしどけない艶を感じさせる、大人の女性。

ギガンスティの間者だった元〈導きの灯〉教師、ランゼ・リトリスの姿が眼の前にあったのだ。

『あ、ごめんなさい、お顔の色が悪いわよ、エリッセちゃん～。お顔の作り自体は別によくも悪くもないけど～』

きゃあきゃあと騒ぐエリッセを尻目に、ランゼは相変わらずのほわほわ口調で毒舌ぶりを披露している。尻で後ずさるようにして距離を取ったエリッセは、震える声で一応確認した。

「ラ、ランっ、ランゼ、先生……？」

姿といい、〈煌〉の感じといい間違いないと思うが、なぜ今、ここへ。

『あらぁ、嬉しいわ～。まだ私のことを先生って呼んでくれるの～？』

とうの昔に〈導きの灯〉からは除籍され、レドレリカはおろか南部大陸全体への侵入が禁止されているはずの彼女はのんびりと笑った。

「……ランゼ、……さん……？」

ディガンに「先生」をつけるのもいまだ不慣れだが、ランゼに「さん」付けするのもどうも妙な感じだ。ぎこちない呼び方に、ランゼもふふっと微笑んだ。

『まあ、先生呼びでもいいわよ～？　今日は私、エリッセちゃんにいいことを教えてあげに来たんだから、その呼び方でも大丈夫よね～』

「いいこと……？　いえッ、も、もうだまされませんからッ!!」

そもそもエリッセに『暗黒星』の存在を教え、禁呪の力を用いて貧弱な〈煌〉を増幅すべしと、そそのかしてきたのはランゼなのだ。

幸いと言うべきか、故意に改ざんされた術に無意識に〈太陽〉の力を注いだことにより、『暗黒星』ディガンの封印を解除。巡り巡って『不幸の星』を排除する結果に繋がったが、ランゼがエリッセにちょっかいをかけてきたのは、禁呪の暴走に見せかけて殺すためだったのである。

ランゼの顔を睨みつけながら、立ち上がってさらに距離を取る。隠していた〈煌〉を解放し、グラシカルかディガンを呼ぼうとした矢先、ランゼの姿が不自然に揺らめいた。

『人を呼んでもいいけど～、呼んでる間に私は消えちゃうわよ～？』

言われて、エリッセはようやく気がついた。

「通信術……？」

『あらあら、ようやく分かったの～。さすが万年六等星は伊達じゃないわね～』

微笑むランゼが、おそらくは意図的に己の虚像を陽炎のように揺らめかせてみせた。なんのことはない、通信用の幻術だ。

ただし南部大陸にはいないはずの彼女が、これだけはっきりとした虚像をエリッセの前に出現させられることを考えると、その能力の強大さに冷や汗がにじむ。他の場所ならとにかく、〈導きの灯〉がある一帯には許可のない通信術を遮断する結界が張り巡らされているはずなのに。

「な、ならさっさと消えて下さいよ!!」

幻影のランゼの首元、二等星の証である二つの輝石に眼をやりながらエリッセは叫んだ。戦争に負けた際、ギガンスティ帝国が所有する一等星の称号は、代々の帝王に贈られるリゲル・ケンタウリだけとなった。逆に言えば、北部大陸にいるどんな優れた〈星〉も帝王以外は二等星ということだ。

ましてランゼには、どこか得体の知れない不気味さがある。諸事情により、やむなく二等星を名乗ってもらっているディガン同様、その実力はいまだ底が知れていない。

『そう警戒しないで～。エリッセちゃんとお話ししたくて、はるばるギガンスティから術を使ってるのに～。〈太陽〉についての、とっても耳寄りな情報なのよ～。今を逃したら、もう教えてあげられないと思うの～』

エリッセの警戒など全く意に介した風なく、ランゼは会話を続けようとしてくる。もうだまされない、と思いはしたが、いいかげん打つ手もない状況に疲弊しているのも事実だ。

「……どうしても、今じゃないとだめ、ですか？」

『ええ、だって～、せっかく差し伸べた手を叩き返されたりしたら～？　気弱で繊細な私は、もうお話しする気力を失ってしまうじゃない～？』

――〈太陽〉の力が使えるならまだしも、ランゼは今のエリッセがひとりで立ち向かえる相手ではない。

けれどランゼの性格から言って、一度対話を拒否すれば二度と話してくれない可能性が高い。

「……生きてたんですね。ディガンさんに喰われて、死んだのかと思ってましたけど」

短い逡巡の後、エリッセはランゼの策に乗ることに決めた。もしも彼女がその気なら、何をどうしても話されそうな気がするのと……、心の奥に積み上がった、現在の教師たちへの不審が背を押した。

『私みたいな才色兼備の美女があれしきで死んだら、世界的な損失じゃない～』

やっぱりこの人とディガンさんは似てるなあ、とひそかに呆れているエリッセを尻目に、ランゼは何やら思わせぶりな流し眼でこちらを見ている。

『エリッセちゃんこそ、まだ〈太陽〉を制御しきれてないとはね～。さすが八年間六等星

だっただけあるわね～』

「いッ、嫌味を言いたいだけなら、人を呼びますからね!?」

泣きそうになりながら叫ぶと、ランゼはそれは優しく微笑んだ。

『大丈夫よ～、心配しないで～。エリッセちゃんは、きっと〈太陽〉を制御できるようになるわ～』

思わぬ言葉に、エリッセはぱっちりと大きく眼を見開く。

『あらどうしたの～？　聞こえなかった～？　二百歳過ぎのおじいちゃん『暗黒星』と仲良くしている間に、耳が遠いのがうつったの～？』

「ディガンさんは、たとえ本当に耳が遠くなっても、自分の悪口だけは絶対聞き漏らさないと思いますが……いえ、その、まさか、ランゼ先生が私をまともに褒めてくれるとは思わなかったので……」

これは絶対に裏がある。警戒に身を硬くするエリッセに、ランゼは心外だと言わんばかりだ。

『あら失礼ね～。私はエリッセちゃんの図太さとか、諦めの悪さとか、打たれ弱いのか強いのかよく分からないところは前から褒めてるじゃない～』

「……ああ、ええと、もういいんで、消えて下さい」

これ以上聞いても無駄のようだ。さっさと人を呼ぼうとしたエリッセに、ランゼはこう

付け加える。

『皮肉のつもりじゃないから、安心して～。――あなたはきっと、〈太陽〉として完成する』

いつもだらだらと間延びしていた語尾が、突然引き締まった。驚いて見返すが、次にランゼが発した台詞は普段と変化がない。

『ふふ、でもね、エリッセちゃん、知ってる～？〈太陽〉が、どうやって輝いているのか～』

「……そ、その辺がよく分からないから、制御のとっかかりがなくて、苦労してるんですよ」

内心びくびくしながら言い返すと、ランゼは現在中天の位置にある第二の太陽・至高の陽を眼を細めて見上げながら、

『〈太陽〉はね、周りに輝きを提供するために、自分を燃やしてるの～。だからそのイメージを元に、制御すればいいんじゃない～？』

なんでもないような指摘に、エリッセはあっ、と短く声を上げた。

〈星〉は〈煌〉を使い、己の理想を太陽と月の光に乗せて現実世界に投射することで様々な術を使う。だから〈煌〉自体の大きさももちろんだが、具体的なイメージを最初に描くことが大事なのだ。

今まで〈星〉として長年教育を受けてきたエリッセは、〈太陽〉を〈星〉に力を与えるもの、輝くものとしてイメージすることで制御しようとしてきた。

だがランゼが言うように、〈太陽〉の輝きはその身を燃やすことで生じているのだ。その根本的なイメージの差異が、制御を不可能にしているのだとしたら……

「――で、できる、かも」

太陽は燃えている。そう思っただけで、不思議な確信が心の中に生まれた。

〈星〉としては昇星試験すら受けられない身の上だけど、〈太陽〉としてならきっと、輝ける。

『ほら、やっぱり～。エリッセちゃんはできる子だわ～』

ここぞとばかりに、ランゼがおだててくる。

いや、きっと裏があるに違いない。気を引き締めたエリッセの予感は、当たった。

『そんなできる子のエリッセちゃんは、〈太陽〉として、どれぐらい燃えていられるかしらね～？』

「え？」

『だから～、〈太陽〉は自分を燃やしてるの～。燃やして、その力で〈星〉たちを輝かせてくれるの～』

意味もなくくるくるとその場で回りながら、ランゼは歌うようにつぶやいた。

『〈太陽〉の力を使いこなせるようになったエリッセちゃんは、燃え尽きるまでどれぐらいもつかなって、そう思っただけ～』

このまま暴走を続ける〈太陽〉の力に呑み込まれれば、自滅。

けれど、〈太陽〉の力を使いこなせたとしても、燃えて燃えて、燃え尽きて――消滅。

声もなく立ち竦むエリッセに、ランゼが猫撫で声で誘いかけてきた。

『ねえ、エリッセちゃん～。ギガンスティに来ない～？』

以前ディガンのおまけとして、ランゼはエリッセを北の帝国へ連れて行こうとしたことがある。だが今彼女は、明確にエリッセを……〈太陽〉を狙ってスカウトしようとしていた。

『私はあなたたちよりは、〈太陽〉に詳しいの～。他にもいろいろ、教えてあげられることがあると思うんだけど～？』

「そ、そんな手、には」

どもりながらエリッセは誘いを蹴ろうとしたが、明らかにその声は震えていた。

『来てくれたら～。ディガンが好きだったショナエルって子のことも、もっと詳しく教えてあげるわよ～？』

「それは……」

さらに重ねられた条件にためらったのも束の間、内容を反芻したエリッセはいきなり冷

静になった。

「いや、確かにショナエルさんのことも気にはなりますけど、だからってそれを理由にギガンスティに行く気にはなれないですよ」

ショナエル・アルケイシア。二百年前のシリウスのことに興味がないと言えば嘘になる。だが〈太陽〉についての知識と同等に並べられ、それを対価としてギガンスティに来い、と言われても戸惑ってしまう。条件として、見劣りしすぎだ。

「大体私がショナエルさんのことを詳しく知った、なんてディガンさんに知られたら……、きゃーきゃー！　いいです、あの人が自主的に話してくれるまで待てるんで私!!」

ちょっと彼女のことを匂わせるだけで、ディガンは露骨に態度を変えるのだ。想像するだけで報復が恐ろしく、怯えるエリッセをランゼは少々意外そうに見つめていた。

『あらまあ、エリッセちゃんの『暗黒星』への興味ってその程度なの～？　見た目だけはいいし、能力だって高いのに、普通の女の子ならもっと違う意味できゃーきゃー言っちゃわない～？』

「そりゃあ、ディガンさんはご自分でよくおっしゃる通り、かっこいいし強いですし、たまーに優しいのかなーって錯覚する時もありますけど、始終私のことを『十人並み』って馬鹿にしますし」

おまけに最近のディガンときたら、馬鹿にする手間すら惜しんでいる節がある。教師陣

の考えた制御方法を試して失敗、叱責もなくまた次の指示をされる、という無限の繰り返しに、エリッセは神経をすり減らしていた。

グラシカルの態度も似たようなものだから、今やエリッセが心安らげるのはティリスとハーシエルが来た時だけだ。だがこの二人はこの二人で、ハーシエルの「恋愛相談」が始まった途端にエリッセそっちのけで騒ぎになってしまう。

エリッセの思考がどんどんディガンから離れていくのを感じ取ったらしく、ランゼは心地よさそうに笑った。

『うふふ、あらあら～。エリッセちゃんは、顔がいい男性ならとりあえず興味を持ってくれる子なのに、お気の毒な『暗黒星』～』

「か、かっこいい人は女の子はみんな好きですよ！　それに、私も結構お気の毒だと思いますけど……？」

グラシカルが優しかった分だけ、いっそ『不幸の星』が憑いていた時のほうがましだったのではないかと思えるほどだ。しかしエリッセの弱々しい突っ込みを、ランゼは流した。

『じゃあ、〈太陽〉について知りたければってことで、どう～？』

「……お断りします。グラシカル先生とディガンさんが、あれこれ手を尽くして調べてくれていますし。それに今のあなたの話で、ギガンスティ側に資料があるってことも分かりましたし」

エリッセとて、振り回されてばかりではない。〈太陽〉についてギガンスティが情報を持っているのなら、ランゼ以外のルートを使って手に入れる方法もあるはずだ。

『あらあら、素直に情報を渡す私や帝王陛下だと……、まあいいわ～。今の私じゃ、無理やりさらって行くこともできないし～』

至極あっさりと、ランゼは諦めた。一見なんともなさそうだが、さすがに『暗黒星』を受けた傷は深いのだろう。

『あなたの先生たちが来たみたいだし、そろそろ私も消えるわ～。お二人によろしくね～』

「……一応、伝えておきます」

エリッセにはまだ感知できないが、ランゼは本体が遠隔地にいるにもかかわらず、早くもディガンたちの接近を察知したようだ。

『それと、私以外にあなたに興味を持ってる人はいっぱいいるから～。その中でも結構厄介な相手が、あなたに会いたくてうずうずしてるみたいよ～。気を付けてね～』

「えっ!?　ちょ、ちょっと、どういうっ……!?」

去り際のどさくさに紛れてもたらされた情報を聞き返しても遅い。

ランゼの幻影はすでに春風に紛れ、代わって覚えのある複数の〈煌〉が頭上から近づいてくるのが分かった。

飛翔術を用いて空から降りてきたのは、血相を変えたディガンとハーシエルだった。
「小娘、無事か!?」
「エリッセ!!」
なぜこの二人なのだろう、グラシカルはどうしたのだろう、と瞬間考えたがそれどころではなかった。現在の自分は逃亡者なのだ。
反射的に逃げようとしたエリッセの腕を、地上に降り立ったディガンが素早く掴む。
「きゃきゃー！　ディガンさん、ご、ごごごご、ごめんなさいッ!!」
どんなに彼を怒らせた時も殴る蹴る、はないにしろ、小突かれたり髪を引っ張られたりぐらいはある。まして今、エリッセはディガンの特別授業から逃亡中の身の上だ。
しかしディガンは、掴んだ腕を支点にしてエリッセの体をくるくると左右に回し、その様を真剣な眼で眺めている。
「……ディガンさん？　あの、これ、ディガンさんみたいな人たちの中で、はやってるんですか？」
先ほどのランゼのしぐさを思い出しながら問うが、ディガンが漏らしたつぶやきは質問とずれていた。

「……心配をかけやがって、馬鹿小娘が」
「えっ……、あ！　ご、ごめんなさ、痛っ!?」
怪我などさせられていないか、確認してくれていたのだ。ようやくそれに思い当たり、謝ろうとしたエリッセの額をディガンの指が弾く。
赤くなった場所を押さえてうめくエリッセを見下ろし、ディガンはふん、と鼻を鳴らした。
「お前が〈煌〉を隠したりしているから、居場所を正確に特定できずに、転移の術が使えなかったんだ。別にお前に気を遣った訳ではないので、勘違いするな」
「い、いえ、そんなつもりじゃ」
転移の術へのトラウマについて、まだディガンが気にしていたとは驚きだ。意外に細かい人なんだ、と思っていると、今度はティリスが小走りに駆けてくるのが分かった。
「エリッセちゃん、よかった！　無事みたいね……」
どうやらいなくなったエリッセを捜すため、ハーシエルとティリスも手を貸してくれていたようだ。ティリスが飛翔術を使ってやって来なかったのは、単純に彼女の〈星〉としての力量の問題だろう。
「ティリス先生、来ちゃだめだって言ったじゃないですか!!」
ハーシエルが慌てている様子を見るに、恋する女性を戦場に連れ出したくなかった彼の

想いも関係しているようだ。しかし、ではグラシカルはどうしたのだろう。

落ち着かない気分になってきたエリッセを、ディガンが改めて見つめた。その表情が真剣なのに変わりはないが、先ほどまでの柄にもなく慌てた様子は消え失せている。

「馬鹿な真似をしたことについての謝罪は、後でじっくり聞いてやる。今、例のランゼとかいう女の〈煌〉を察知したぞ。本体ではなかったようだが、何があった？」

金の瞳が炯々と光っている。元よりごまかす気もないエリッセは、素直にしゃべった。

「どうやら無事だったらしいランゼ……さんが、私に通信術を使って話しかけてきたんです」

そこで、はたと止まる。

どこまで話すべきだろう、そう考えている自分に驚いた。

「……小娘？　どうした。やはりどこか痛むのか？」

いぶかしげに聞かれ、エリッセは急いで首を振った。

「いえ、あの、ま、また万年劣等生扱いされたんで心の傷は痛みますけどね!!　でも、別に怪我をさせられたりした訳じゃないです。……むしろ……、あの人は、〈太陽〉の制御方法に、心当たりがあるって」

「なんだと!?」

ディガンも眼を見張ったが、すぐに冷静に続きを促してきた。

「……それで？　あの女が、制御方法だけをおとなしく教えてくれるとは思えん。何か取引を持ちかけられただろう、言え」

「ギガンスティに、来ないかって……来たら……まあ、優遇してやる、みたいなこと、を」

ショナエルの名前は口には出せない。

――覚醒した〈太陽〉が燃え尽きる可能性については、もっと口に出せない。

「以前もそんなことを言っていたな。ふん、一度は殺しかけたくせに、図々しい連中だ」

王宮にて似たような呼びかけをされたことがあったので、ディガンは案外簡単に納得してくれた。育てて喰おうとしている人間に言えた義理ではないと思ったが、エリッセは賢い沈黙を守った。

「あの……、ところで、グラシカル先生は？」

「ここだよ」

慣れ親しんだ〈煌〉が背後で輝き、聞き慣れた声がいきなり返事をする。

「きゃきゃきゃあああ!?」

転移の術を使って唐突に現れたグラシカルを、エリッセは飛び上がりながら振り向こうとした。

しかし見えたのは、闇に塗り潰されたような漆黒。

自分とグラシカルの間に、ディガンが立ったことが一瞬分からなかった。

「――今は別に、転移の術を使わなくてもよかっただろうが」

背中しか見えないエリッセにも、その表情が容易に想像できるぐらいディガンの声は鋭い。

「確かにランゼはもう去ったようだけど、油断は禁物だ。非常時の移動時間は短いに越したことはない」

しかしグラシカルの表情も受け答えも、極めて落ち着いたものだった。

「あの、大丈夫ですよ、ディガンさん。転移の術はちょっと苦手ってだけですし、今の状況ならグラシカル先生のおっしゃることが正しいですし」

この差し迫った状況下で、いちいち自分の古傷についてなど気にしてくれなくても平気だ。グラシカル先生だってわざとやったんじゃないんだから、と思いながら見上げた恩師と視線が合った。

「それよりエリッセ、大丈夫かい？」

「あ、は、はい。グラシカル先生は、その、ランゼさんを捜しに行っていたんですね……？」

すぐに彼が来なかった理由について、エリッセはおずおずと聞き返す。

「うん、もしかしたら本人、もしくは伏兵が側にいる可能性があるからね。けれどやはり、少なくともレドレリカ内にはいないようだ」

ディガンとハーシエルがエリッセの身の安全を確保し、その間にグラシカルが敵を捜す。役割分担としては間違っていないけれど、小さな棘がまたひとつ、胸に刺さるのを感じた。

ディガンとグラシカルの役目は、本来逆ではないだろうか。

いつだって、優しい担当教師は、側で守っていてくれたのに。

心にしんしんと降り積もる冷たいものの存在を感じながら、エリッセは報告した。

「あの……、ランゼ、さん、は、私に興味を持ってる厄介な相手が、会いたくてうずうずしてる、って……」

グラシカルの眼が鋭くなり、ディガンも「なんだと!?」と叫んで振り返る。

「小娘、それはギガンスティの人間のことか？」

「わ、分かりません。もしかしたら、他国の人かも……それ以上は、何も教えてくれなかったんです」

ステッセルやヴェストラントの間者の可能性は十分考えられる。今のところ公式にエリッセを引き渡すような話は来ていないが、だからこそ、秘密裏に探ろうとしていてもおかしくない。

「――とにかく、情報集めと、お前の護衛が必要なようだな」

これ以上推測で物を言っても仕方がないと、ディガンは素早く決断した。

「すぐに長期の休みに入るのが、不幸中の幸いだね。最悪の場合、星団長や国王陛下にお

願いして、僕たち以外は近くの街にでも避難してもらうことになるかもしれないけど……どこまで説明したものかな」

いかにも煩雑そうな手続きのことを考えているのか、グラシカルも物憂げな表情でうなずく。

昇星試験が終われば、〈導きの灯〉全体が春の休暇に入る。エリッセのように帰る家のない一部の生徒を除き、大半の生徒は実家に戻るのだ。つまり、それだけ非常時に巻き込むおそれのある人間が減る。

「あ、あの、すいません、私なんかのために……」

どんどん大事になっていく状況に身が縮む思いをしているエリッセを、ディガンは冷ややかな眼で睨みつけた。

「今ので十分分かっただろうが、お前が置かれた立場も忘れてふらふらすると、こういうことになるんだ」

「……はい。本当に、ごめんなさい……みんなに迷惑をかけてしまって、申し訳なかったです」

冷静な口調での正論は、下手に怒鳴りつけられるよりこたえる。至極素直にエリッセが頭を下げると、ティリスが耐えかねたように割り込んできた。

「エ、エリッセちゃん、でも私は嫌になるのも無理はないと思うの！　だってグラシカル

先生もディガン先生も、まるであなたのことを実験動物か何かみたいに扱って……!!」
「ティリス先生、その言い方はあんまりじゃないですか？」
横合いから口を挟んだのは、グラシカルだ。ディガンに負けず劣らず冷ややかな眼で、ティリスとエリッセを交互に眺めやる。
「僕たちはただ、エリッセを不幸にしたくないだけです。このまま暴走する〈太陽〉を放置しておけば、一番困るのは彼女自身だ」
「ですけど、やり方ってものが……!!」
食い下がるティリスに、エリッセは緩慢に首を振ってみせた。
「……グラシカル先生のおっしゃる通りです」
「エリッセちゃん……」
もどかしそうなティリスの気持ちは痛いほど伝わってくる。凍りついたハーシエルの心さえ溶かした熱意はありがたくもあったが、状況が状況だ。
「だって〈太陽〉を制御できないと、私はこの力に潰されちゃうんですよ？　だから、自力で制御方法を編み出せない私なんかのために、お二人に貴重な時間を割いてもらっていることに感謝してるんです。に、逃げ出しておいて、偉そうなことを言いますけど……」
うつむきながら付け足したエリッセは、不意にこみ上げた衝動を抑えるために唇を噛んだ。

——制御できたらできたで、今度は使い潰されて消滅するかもしれませんけど。

顔を上げられないエリッセのつむじあたりを見つめながら、ディガンがさらに言った。

「小娘。不可離の紋を、またお前に刻む必要があるか？」

「えっ、い、嫌ですよ!!　もう逃げたりしませんから、やめて下さい!!」

さっきはディガンに指で弾かれ、冬の終わりには禁呪を刻まれた額を手で覆いながらエリッセは激しく首を振った。術者の視線が届く範囲から出られなくなる術までかけられるなんて、まさに繋がれた実験動物そのものではないか。

「オレだってごめんだ。アレを使うと、いつでもどこでもお前と一緒になってしまうからな。……今以上にべったりなんぞ、お互いにきついだろう。だから、もう突然いなくなったりするなよ、小娘」

少しだけ疲れた顔でつぶやいたディガンは、すぐに表情を戻してグラシカルを見やる。

「報告諸々は任せるぞ。オレ様は小娘を守る防護結界に注力する」

「分かった」

いまだ二百年前の常識に生きている上、自分より目上の人間などいないかのように振る舞うディガンには多方面への報告云々は難しいだろう。適材適所と分かっていても、またもさっさと転移の術を使って去っていったグラシカルに、エリッセは言いようのない寂しさを感じた。

「エリッセ、これからは僕も君と一緒にいるよ」
切なげに表情を曇らせたエリッセに、ハーシエルが話しかけてくる。
「どうせ僕は家に帰るつもりもないし、君をギガンスティの間者から守ることができれば、僕の評価が上がりそうだから」
後半、彼の眼は明らかにエリッセではなくティリスを見ていた。
「……ハーシエルくん……、ちょっと引っかかるところもあるけど、ありがとう……」
純粋な好意から出た言葉ではないと分かっているが、彼の心遣いにエリッセは泣きそうになってしまった。
それはきっと、ランゼとの再会によって芽生えた疑惑のせいだ。
グラシカルにもディガンにも、〈太陽〉の制御方法が分からないのは事実だろう。貴重な能力である〈太陽〉が、いつ暴走するか分からないのでは彼らだって困る。
しかし、〈太陽〉として目覚めたその先は？
――覚醒した〈太陽〉がいずれ燃え尽きてしまう可能性も、彼らは知らないのか？　あるいは……知っていて、黙っているのではないか？
自分たちの目的を遂げたい、ただそれだけのために。
「気にしないで、エリッセ。その代わり、僕の良さをうーんとティリス先生に話してほしいな。あと、男の価値は年齢でも身長でもないってことも」

自分勝手なハーシエルの台詞を聞き流しながら、エリッセはディガンに促されてその場を後にした。

改めて〈導きの灯〉周辺への調査が行われ、王家が他国にも探りを入れてくれたようだ。しかし、〈太陽〉目当てに潜り込んだ間諜は発見されなかったらしい。

ランゼと再会してから二日目の夜、現在のエリッセの部屋である講義棟の一室を訪ねてきたグラシカルはそう教えてくれたが、彼の表情は特に明るくはなかった。

「間諜はどこも規制されてはいるけど、裏を返せば規制しなければいけないほど日常茶飯事的に潜り込んでいるってことだからね」

むしろ綿密な調査で尻尾を出さないだけ、面倒な相手とも言える。ただの脅しの可能性はあるが、あのランゼが「結構厄介」と評するだけはある。

「……そもそも、そんな人はいないんじゃないですかね……？　あれから大きな暴走も起こしていませんし、私のことなんかみんな忘れてるんじゃ……」

おそるおそるエリッセが反論すると、壁際に立っていたディガンが「ならいいけどな」と肩を竦めた。

「レドレリカが他国に潜り込ませている間諜の話では、〈太陽〉についての関心は依然と

して高いらしいぞ。国家の方針としてではなく、個人でレドレリカ入りして来るやつは最近多いらしい」

脅し文句に、エリッセは押し黙る。

〈太陽〉目当てに、非公式にやって来る他国の人間。そんな者たちまで出始めているとは……

「そんなに心配しないで、エリッセ。陛下も国境警備に一層力を入れて下さっていて、不審者は見つけ次第身元を洗ってから国外退去を命じている。〈導きの灯〉全体の結界も強化したし、一部を除いて関係者以外には移動してもらったし、同じく出入りは厳しくチェックしている。期間があまりにも長引くようなら、王宮に居場所を移すことも検討中だ」

力づけるようにグラシカルが言ってくれたが、エリッセの表情は晴れない。二百年の平和で緩みが生じているとはいえ、ランゼが何年も〈導きの灯〉に潜伏していたことを思えば、どれだけ警護を固めても不安は残る。

そういう意味では、王宮付きの高位の〈星〉たちに守られたレドレリカ王城のほうが安全ではあるだろうが、しかし。

「……でも、王宮には国王陛下がいらっしゃいます。私だけでも危ないのに、陛下まで守らなければいけないとなると、手間がかかりすぎるんじゃないですか？」

王位継承権争いにはとうに決着がついているが、病弱な上に〈煌〉を持たない国王へ

の反発は水面下に残っていると聞く。それもまたギガンスティの間者が煽っていた節があるのだが、いずれにしろ妾腹の弟王子がいまだに国王の座を狙っているのは事実だ。

「いや、こうやって戦力を分散させているほうがかえって危ないんだ。守る対象は一ヵ所に固まってくれていたほうが、守るほうとしてはありがたい」

グラシカルが語る正論に、エリッセは口をつぐんだ。

先生は、単に陛下の側に行きたいだけではないかと……そんなつまらないことを考えてしまう自分が、嫌になる。

「……それもこれも、お前が〈太陽〉としての能力を発揮できるようになれば、問題ではなくなる。お前のことを公表するにしろしないにしろ、自在に力を発揮できる〈太陽〉の側に、オレたち一等星が三人も揃っていれば勝てない相手などいない」

気まずい沈黙を断ち割るように、ディガンがそう結論づけた。

同じ建物の別室にいるハーシエルも含め、エリッセの側には常時三人の一等星がいるという布陣だ。ディガンは自称ではあるが、彼の持てる〈煌〉を思えば他の二人と比べて遜色はない。

ちなみにティリスも、本人とハーシエルの希望で同じ建物に滞在している。なお、ハーシエルのさらなる希望だった彼女との同室は却下された。

「そ、そうですね……」

周囲すべてが敵となったような恐怖を押し隠し、エリッセは思い詰めた表情でつぶやく。
「――そうですね。がんばります。まずは、制御できるようになってから、ですよね」
ぎゅっと両の拳を握り、口にされる決意は硬く強張っている。何かあればすぐぎゃあぎゃあとわめくはずのエリッセにしては、反応が小さい。
「……そうだね。がんばらないとね。君には少しずつ、何か見えてきているようだし」
昇星試験の日に逃亡して以来、エリッセはひたすら熱心に〈太陽〉の制御訓練に打ち込んでいる。
本日も根を詰めすぎて途中で意識を失って倒れかけ、慌てた教師たちに駆け寄られたが、「まだできます」とその手を振り払ったぐらいだ。ランゼとの対面で危機感を煽られたせいだろうと、グラシカルとディガンは見ていた。
そしてエリッセの態度からは、制御についての明確な指針を得たらしき確信が見え隠れしていた。尋ねても言語化するところまでいっていないのか、曖昧な返事しかないが、何かのイメージを摑めたのならそれを足がかりに一気に目的に到達できる可能性がある。
「そうなんです。まだ……その、はっきりとは、言えないんですけど……見えてきては、いるんです。〈太陽〉として……、自分が輝く、様が」
握った拳を見つめて、エリッセはつぶやいた。語る言葉のたどたどしさや、奇妙な虚ろさを含んだ瞳の色に気がかりな部分はあるが、グラシカルはそこを追及しない。

「そうか。……でも……いや、そうだね、がんばらないと」
にこりと微笑むと、ディガンに視線をやる。
「では、僕はもう休ませてもらおう。じゃあディガン、先に戻るから」
そう言い置いて、出て行ってしまった。

「おい、オレも」
さっさと外に出て行ったグラシカルに慌てたディガンも、退出の素振りを見せた。
「あ、じゃあ、ディガンさんも、おやすみなさ……あれ？」
見送ろうとしていたエリッセは、いったんドアのほうに向かったディガンが戻ってきたことに驚いた。妙に顔が険しい。
「あれ？　え、ちょ、ちょっと、ディガンさん!?」
大股に近づいてきたディガンが、どすんと音を立てて横に座った。ベッドのスプリングが軋み、弾みで軽く体を浮かせながら、エリッセは腕組みして正面を睨んでいる彼を当惑の眼で見つめる。
「あ、あ、あの……？　ディガンさんの部屋、隣ですよね……？」
今さらすぎる突っ込みに、金の瞳がちらりとエリッセを一瞥する。威圧感に呑まれそう

になったエリッセは、慌ててこうまくし立てた。
「えっと、あー、わわ、私が部屋を間違えてるとか？　そ、そういうこともあるかもしれないですけど、たぶん」
「小娘、何かしてほしいことはないか」
またまっすぐ前を向いて、ディガンが吐き捨てる。口にした内容とは裏腹に、その口調は吐き捨てる、としか言いようがないものだった。
「……え？　ディガンさん、あの、これ、新手の皮肉ですか……？」
意図が読めず、馬鹿にされることを覚悟して尋ねても、返ってくる言葉は相変わらず意味不明だ。
「お前がどうしてもどうしてもそうしてくれと言うのなら、このオレ様がひと晩ぐらい添い寝してやってもいいぞ？　無論下らん勘違いなどしないことが条件だが」
「い、いや、別に、ディガンさんにそんなことは求めていないので、いいです」
ティリス先生は大丈夫だろうか、と思いながら断ると、ディガンは忌々しそうに舌打ちした。
「グラシカルなら……」
「え？　グラシカル先生？」
「うるさい、あいつの名前を口に出すな」

自分が先にその名を言ったくせに、勝手なものだ。さすがにむっとしたエリッセだったが、続くディガンの言葉の意外さに怒りを忘れてしまう。

「じゃあ、オレにどうしてほしい」

「……え？」

「……どうしたら、その辛気臭い顔をやめるんだと聞いているんだ」

尋ねる声は小さく、まるで本当に弱っているようで。

もしかして、慰めようとしてくれているのだろうか。そう聞こうとして、思いとどまる。なぜ、彼のような男が「十人並みの小娘」を慰めてくれるのか。

答えは簡単。エリッセが四番目の〈太陽〉であり、『暗黒星』のまたとない餌だからだ。言うなれば、いずれ食卓に上げるために家畜の世話をするようなもの。

心が冷えていく。

ディガンの自分への評価など分かっているつもりだったけれど、今この時、実際に言葉にして突きつけられたくはなかった。だから、代わりにこう言った。

「それなら、あの……申し訳ないですけど、ディガンさんも部屋に戻って下さい。私、これからまたひとりでイメージトレーニングするんで……」

「――そうか」

恐縮しながらも断ると、ディガンはプライドを傷つけられたのだろう。瞳を怒らせ、



肩をそびやかして立ち上がるなり、
「ふん、まあ、そうだろうな。オレのようなかっこよくて強くて賢い男が同じ部屋にいたら、どうしても胸が高鳴って集中できないだろうからな!!　二度とないチャンスを不意にしたことを、この先百年悔やむがいい!!」
さっきまでの殊勝な態度などなかったかのような、偉そうな態度。
あまりにも分かりやすい変化に、エリッセは思わず噴き出してしまった。
「おい、何がおかしい小娘!!」
「きゃーきゃーのきゃー痛いー!!　ご、ごめんなさい、だってなんだか、久しぶりにディガンさんらしい台詞を聞いたなって……!!」
金髪を一房引っ張られながら、エリッセは悲鳴を上げた。と、その答えを聞いたディガンがぱっと手を離す。
「――お前も、神妙な面をして黙っているよりは、きゃーきゃー馬鹿みたいに騒いでいるほうがまだましだ」
つぶやく声はひどく静かで、こちらを見つめる金の瞳も怖いぐらい真摯だ。
「……ディガンさん？」
「まあ、十人並みの小娘がせいぜい七人並みあたりになるだけだが……いかにこのオレ様が素晴らしい力を持っていても、相手の心がすべて分かる訳じゃない」

表情にも声音にも、深い後悔がにじんでいる。

「本当につらい時は、どうにもならなくなる前に……、ちゃんと、言えよ。話ぐらいは聞いてやる」

どこか苦しげなその表情に釣り込まれそうになる。胸につかえていた数々のことを、吐き出してしまいそうになる。

しかし、すんでのところでエリッセは思いとどまった。

違う。ディガンの眼は現在ではなく、過去を見る者のそれ。

シリウスの称号を求め、そのためにディガンを封印したショナエル。ハーシエルのように名家の出身だったという彼女は、きっとプライドが高い女性で、望みに届かない己の〈煌〉に耐えられなかったのだろう。

今ディガンが言ったように、ショナエルが素直に「シリウスを譲ってほしい」と口に出せていたら、事態は変わっていたのかもしれない。あるいはディガンが彼女の胸の内に気づき、助け船を出せていればよかったのかもしれない。

――ショナエルさんを助けられなかったから、私を助けてくれようとしているの？

エリッセにとってのディガンは、おじいちゃん、が失礼なら親戚のおにいさんぐらいの存在だ。だからショナエルに対して女性として嫉妬している訳ではない。

けれどしょせん、身代わりでしかないのだという思いが、エリッセの唇を閉ざしてしま

った。

「……とにかく、根を詰めすぎても暴走に繋がる可能性がある。熱心なのも結構だが、適当なところで切り上げて、睡眠は十分に取るように。いいな」

ディガンらしく、ついでに教師らしくもある台詞でぶっきらぼうに結ぶと、彼は去っていってしまった。

「分かってますよ……」

ひとりきりになった室内に、エリッセの乾いたつぶやきが落ちる。そのまま彼女は、ベッドの上に横倒しになった。

いつ敵の襲撃があるか分からないので、最近寝る時も上着以外の制服は着たままだ。ごわごわとしたその感触も、ささくれた神経を刺激してやまない。

グラシカルに対してもディガンに対しても、真意を問いただせない己の弱さがみじめだった。敷布の上に散らばった自分の金髪をなんとなく見つめながら、泣いてしまう前に眼を閉じる。

まぶたの中の暗闇は、ひどく静かだ。

ある意味ここが〈夜の底闇〉に一番近い場所だろう。関係者を除けばほんの数名しか

〈導きの灯〉には残っていないので、空の羅盤も静寂そのもの。

「いっそ、ずっとここに……」

でもそうはいかない。今のエリッセには、万年劣等生には身に余るほどの役割があるのだ。

優しい無関心が保たれた闇を切り裂いて、燃え上がる輝きを心に描く。

最近は特訓の成果で、瞳を閉ざしさえすれば、闇に輝く炎の玉を容易にイメージできるようになっていた。

暗闇を照らす巨大な力。その源は、己を焼いて生み出す光。

これがエリッセの未来。

さもなくば巨大な力を制御しきれず、自壊するだけ。

「自滅よりは、やるだけやって消滅のほうが、まだましだものね……」

最近は不気味なほどの沈黙を守っている〈太陽〉を抱くように、抱き潰すように、自らの両肩に回した指先に力を込める。

目覚めた〈太陽〉の力がどれぐらいもつかは、誰にも分からない。ランゼが思わせぶりなことを言っていたが、ギガンスティからもなんの情報も得られていないとのことだ。

来年の昇星試験は受けられるだろうか。ふと思いついた途端、はかない笑みが唇に浮かんだ。

下手をすれば来年、いやこの夜が明けるまで、自分は生きていないかもしれないのに。

そもそも〈太陽〉に、〈星〉としての等星の高さなど必要か？

「短い間でも、役に立たなきゃ……グラシカル先生に、ディガンさんに、国に、恩返し、しなきゃ……」

疲れ果てたエリッセは、イメージトレーニングを放棄して眠ろうと努めた。

しかし太陽の幻は努力すればするほど執拗に、まぶたの裏で赤々と燃え上がり続けた。

第四章　星は消えゆく

古い文献で見たような、火刑に処されている悪夢を見ていた。両手両足を縛られ、足元に積まれた薪に火が点けられる。

「う、うーん、うーん……水系の詠唱……いや、氷系の詠唱は……、確か……」

うなされるエリッセを救った、もとい叩き起こしたのは、耳をつんざく巨大な爆発音だった。

「きゃきゃきゃきゃあああああああああああッ!?」

悪夢の余韻も吹き飛ばす勢いで叫びながら飛び起きたエリッセは、まだ暗い窓の外に眼をやった。爆発音は続いており、そのたびに夜空の一部が明るくなる。

すでに空の羅盤の状況から、現在が第三の月・終末の影が空に残っている、夜とも早朝とも言い難い時間帯であるとは分かっている。人間が最も油断する時間を狙った襲撃だと思われるが、その割にあまりにもやり方が派手すぎる。

「こ、これやってるの、ひとりだよね……？　同じ〈煌〉を感じるし……でも、それも陽

動……？」

元々〈導きの灯〉は、強力な防護術に守られている。その上にディガンたちが厳重に張り巡らした結界に、大槌のように叩きつけられる〈煌〉は、〈星〉であれば誰でも分かるぐらい明らかだ。

いずれも同一人物のものに間違いないが、いくら転移の術などによる侵入ができないからといって、この大雑把さはひどい。突然空の羅盤上で巨大な光を放ち始めた〈星〉に、今ごろレドレリカ中の〈星〉が仰天しているだろう。

「おい小娘、無事か!!」

そうこうしている間に、ディガンが転移の術を用いて室内に出現した。まだ視線が窓の外に釘付けのエリッセは、それに驚くことなく質問する。

「なん、何なんですか、これぇ!?」

「敵の襲来だ」

事もなげに答えたディガンの眉間に縦皺が寄った。

「……チッ、破られたか。なんてやつだ」

一瞬遅れてエリッセも、ディガンの言う意味を悟って真っ青になる。

単調に、だが恐るべき破壊力を持つ〈煌〉を結界に叩きつけていた〈星〉が、ついに結界の破壊に成功したのだ。爆発音も、それを引き起こしていた巨大な〈煌〉も消えたが、

まさか破るだけ破って終わりではあるまい。
目的はどう考えても、〈太陽〉――エリッセ。
しかし、そう考えるとこの派手さは奇妙だ。
「敵の襲来って、ちょっと、まさか本当に戦争でも始まったんですか!?」
〈太陽〉は貴重な能力であり、他国が狙うなら情報収集か拉致が目的。ディガンたちはそういう見解だったし、エリッセもそう思っていたので、なんとなく夜陰に乗じて音もなく忍び寄る暗殺者のような相手を想像していた。
現在暴れている敵も一応夜陰に乗じてはいるが、それ以外はこの上なく派手だ。無論陽動の可能性はあるが、こんな大量の〈煌〉をこんな音を出しながら使っていたら、あっという間に身元が割れるだろう。
最悪〈太陽〉に手を出したことを理由に、他国から攻め込まれるかもしれない。それでは本末転倒ではないのか。
「さあな。とりあえず、他の連中をよそに移したのは正解だったようだ……、おっと」
ふとディガンの眼が動いた。エリッセも、グラシカルの〈煌〉が夜空を渡ってこちらに届いたのを察知した。
『確認できた敵は二人。ただし今〈煌〉を使っているのはひとりだけで、二人とも等星石はつけていない。王宮からは、まずは僕たちだけで対応するようにとのことだ』

幻影を伴わない、簡潔な通信術により伝えられた内容にエリッセは首をひねった。

「二人……、ですか。どこの国の……？」

居場所を特定されないためだろう。すぐに術を切ってしまったグラシカルに代わり、ディガンに尋ねかけてみる。

「まだ分からんが、等星石はなし、か。〈流れ星〉、とか言うんだったか？」

「そ、そうです、ディガンさんと同じ……、いえその」

ディガン曰く「ぬるい世の中」ではなかった二百年前の世界に、等星石はなかったそうなのだ。そのためディガンも、封印を解かれた直後は等星石のことを知らなかった。

現在等星石の着用は〈星〉の義務であり、着けていない〈星〉は〈流れ星〉と呼ばれ犯罪者に分類される。かつての大戦の際、彼我の実力差を知らずに戦った〈星〉たちの悲劇を繰り返さないため、戦後世界で取り決められたルールだ。

他にも二等星以上離れた〈星〉同士は戦ってはいけない、戦う際はフルネームと等星を名乗るべしなど、細かいルールが制定されている。そもそも国の財産である〈星〉同士が、無闇に戦うことも禁止事項のひとつである。

「じゃあ、本当にただの犯罪者の可能性もありますね。ギガンスティとか、無関係に……」

星団入りを拒み、あるいは途中退団した〈流れ星〉はどの国にも存在している。特にレドレリカは世界的にも〈星〉の産出国として知られているだけに、その数は多い。

「そう見せかけているに過ぎない可能性はあるが、いずれにせよ……、面白い」

ディガンにとっては、等星が分からない敵といきなり交戦など慣れたものなのだろう。エリッセのように怯えるどころか、かえって闘志をかき立てられているらしく、金の瞳が炯々と光っている。

「元より王宮の連中の手など借りるつもりはない!!　このディガン様の結界をぶち壊し、あまつさえオレ様より派手に〈煌〉を使うようなやつはただちに成敗してやる!!　行くぞ小娘、ちょっと我慢しろ!!」

言うなり引き寄せられたエリッセは、ディガンが転移の術を使おうとしているのを察して慌てた。

「きゃーきゃーのきゃー!?　ちょっ、向こうの目当てはたぶん私なんですよね!?　じゃあ、私はここに隠れていたほうが……!!」

「向こうは結界を粉々にして侵入してくるような、めちゃくちゃな連中だぞ？　こそこそ身を隠したぐらいで、逃げられるとも思えん。そもそもお前目当てにしては、動きがおかしいんだ」

下手に威力の高い攻撃などすればせっかくの〈太陽〉を傷つける可能性もあるのに、侵入者たちは全くお構いなしだった。それを思えば、ディガンの指摘は妥当だ。

「それに、お前の〈太陽〉が不安定であることを忘れるな。今暴走でもしたら、オレたち

と離れ離れでは取り返しのつかないことになる」
さらなる指摘に、エリッセははっと身を硬くする。
「まだ、制御はできていないんだよな」
「……はい」
悄然とうなだれるエリッセを眺め、ディガンは彼女の肩をしっかりと抱いた。
「分かった。オレ様から離れるなよ、小娘!! あと転移の術はたぶん連発することになるが我慢しろ!! 天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！ 我が身を距離より解き放て!!」
夜明けも近い現在、元々転移の術との相性がいい太陽の力を借りることをディガンは選んだ。私の〈太陽〉はどんな名前で呼ばれることになるんだろう、と思いながら、エリッセはぎゅっと眼を閉じた。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ！ 熱よ炎と踊れ、すべてを焼き払え!!」
癖のある金茶色の髪を揺らし、赤い衣服に身を包んだ男が生み出した熱波が石畳を舐めながら広がっていく。
植え込みにぶつかれば燃え上がり、建物にぶつかれば爆発が起こる様をきょろきょろと見回しながら、男は豪快に笑った。

「あー、さいっこぉー!!　やっぱ他人の土地は、がんがん焼き払ってもいいから楽しいよなぁ!!」

気分の盛り上がりに合わせ、腰にぶら下げていた金属缶から色とりどりのキャンディを摑み出しては噛み砕く。よほどストレスを溜め込んでいたらしく、それが解消される喜びに浮かれる男のすぐ後ろ、影のごとく付き従っていた亜麻色の髪の青年が注意した。

「ジャノンさん、言葉に気をつけて下さいよ」

「分かってるって、ニコラは心配性だなあ。そーら、出ーて来ーい、〈太陽〉ー!!『暗黒星』でもいいぞー!!」

その体を駆け巡る強大な〈煌〉を遠慮なく撒き散らしながら、「マッド・キャンディ」ジャノン・グラスは吠えた。

「ジャノンさん、ちょっと、やりすぎですって。ほら、さっき壊したあの建物にお目当ての〈太陽〉がいた可能性もありますよ？」

当然の忠告を、ジャノンは軽くいなしてしまう。

「はっ、あの程度の攻撃でやられるようなやつらじゃ、遊ぶ気にもならねえよ。おーい、出て来ないとぉー!!〈導きの灯〉だけじゃなく、レドレリカ王宮あたりもぶっ壊すぞー!!　おーいってー!!」

「……ジャノンさん、それはさすがにやりすぎですよ。私の給料に響くんで」

そろそろ本気で止めますよ、とのニコラ・セイドリックの言葉が途中で切れる。ジャノンも子供のような挑発をやめ、講義棟に囲まれた四角い広場の中央で足を止めた。

青白く燃え上がる、強い〈煌〉の存在を感じ取ったのだ。

「ご指名じゃないけど、シリウスじゃ不足かな」

つぶやいて、広場を形作る講義棟のひとつの陰から姿を現したのは小柄な銀髪の少年。ジャケットの袖とズボンの裾に白いラインが入った黒い制服の胸元で、誇り高きひとつ星が輝いている。

「おっ！　お前はまさか、天才ハーシエルか⁉」

世界で最も有名な一等星、最強の称号シリウスを持つハーシエル・ディファリア・トールズはうなずいた。

「その通り、一等星・シリウスのハーシエル・ディファリア・トールズだ。お前は？　等星石を着けていないけど、ただの押し込み強盗でもなさそうだ」

〈星〉同士の闘争のルールに従った、行儀のいい名乗りにジャノンはきな臭いような笑みを浮かべた。金の瞳が底光りを始める。

「オレはジャノン・グラスという名前だが、世間じゃ『マッド・キャンディ』のほうで知られているようだぜ。等星は、お前が感じた通り」

あだ名を強調するように、「マッド・キャンディ」は腰に下げていた缶からキャンディ

を取り出して口に放り込んだ。がりがり、と音をさせながら、たちまち噛み砕いてしまう。
「……国籍は」
「忘れたよ」
「ここに来た、目的は」
「噂の〈太陽〉と、『暗黒星』を拝みに」
飄々とした答えを無表情に聞いていたハーシエルは、そこである結論に達した。
「ということは、お前もランゼと同じ、ギガンスティの間者だな」
「……あれ？」
導き出された結論に、ジャノンがきょとんとする。素直な反応ににこりともせず、ハーシエルは推理過程を説明した。
「『マッド・キャンディ』という名前は、ギガンスティで暴れている〈流れ星〉として聞いたことがある」
「へえ、でもそれだけじゃ決め手に欠けるんじゃないか？」
「でも、『暗黒星』の名称を知っていて、かつ『会いに来た』と言えるのは去年の件の関係者だけ。『暗黒星』の詳細を知っているのは、レドレリカ人のごく一部のはずだからな。つまりランゼから、『暗黒星』のことを聞いていると判断した」
ぱちぱちとまばたきをしてから、ジャノンは小さく口笛を吹いた。

「さっすが天才、頭いいな！」
「……ジャノンさん、認めちゃだめですよ……」
ニコラがうめくのを聞きながら、ジャノンは鷹揚に笑った。
「ふうん、まあそう思うならそれでもいいさ。なんならギガンスティにでもステッセルにでもヴェストラントにでも、かけ合ってみろよ」
浮かべた笑みが、獰猛な獣のそれに移行していく。興奮してきたらしく、また腰の缶からキャンディを摑み出し口に放り込みながら、
「レドレリカの連中に他国が望むのは、おとなしく〈太陽〉と『暗黒星』を差し出すことだけさ。ついでにシリウスもとなれば、みんな喜ぶだろうなあ」
人ごとだと思って気楽に述べたジャノンの体から、強大な〈煌〉が放出され始めた。ハーシエルでさえわずかに足を引くほどの〈煌〉は、どう見積もっても二等星以上。
「だがオレは、別にお前らが今後どうなろうが知ったこっちゃねえんだ。どうせオレは三年後に死ぬんだから、今の出会いを楽しみたいねぇ」
限りなく嬉しそうに笑ったジャノンが詠唱を始める。それを悟ったニコラが、合わせて転移の術の詠唱を始めたことにハーシエルははっとしたが、ぐんぐんふくらんでいくジャノンの〈煌〉はよそ見を許さない。
「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ！　きらめく王の剣を我に、我が敵を征服せよ!!」

まだ空に顔も出していない三つの太陽の輝きを強引に跳ね返し、ジャノンの右手にまばゆい一振りの剣が生じる。並みの〈星〉なら一発で〈煌〉が枯渇しそうな強力な攻撃術を、彼は難なく完成させた。

「……！　天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！　刃を断じる不屈の盾となれ!!」

対するハーシエルは、結界破りにあれだけ大量の〈煌〉を放出した相手と若干たかをくくっていたらしく、反応が遅れた。初歩的な防御術を展開させようとしているのを見て、ジャノンはつまらなそうにする。

「おいおい、なんだよ天才くん、意外に使えねーなあ。もっとこう、お互い〈導きの灯〉を丸ごと吹っ飛ばすような術を……、うおッ!?」

王の剣を振りかぶり、嘲笑を浮かべたジャノンの右側面を、巨大な〈煌〉の塊が襲った。突然のことで全く無防備だったジャノンは、吹っ飛ばされて近くの建物に叩きつけられる。腰の缶に入った飴たちが、がしゃがしゃと派手に鳴った。

「どうした？　ご指名に応じて、この『暗黒星』様がわざわざ足を運んでやったんだぞ」

せっかく用意した王の剣を失い、顔をしかめているジャノンを見下ろして金の瞳が冷たく笑う。

場所は広場を形作る講義棟の屋上、ハーシエルに注視していればちょうど死角になる位置。黒ずくめの美青年が、傲然とあごを上げて「マッド・キャンディ」を睥睨していた。

昇り始めた第一の太陽の光を浴びてなお、艶やかな黒髪は妖しい輝きを宿している。
「わざわざそこの小僧が名乗ってやったというのに、まともに名乗り返しもしないやつにはこの扱いで文句はないだろう？　さあ立て、ジャノンとやら。このオレ様が、特別に遊んでやる」
エリッセを連れて近辺に転移してきていた、ディガンだった。
「……うわ、正々堂々分かりやすく結界をぶち破ってきたオレに、この仕打ちかよ」
「ふん、そんなことは墓石の下で好きなだけほざけ!!　負けたやつに正義を主張する権利などない!!」
ジャノンの文句に、ディガンは悪辣な笑みと悪辣な台詞で報いた。

「……どっちが悪役なんですかねえ……」
実に堂々とした奇襲の様子を術を用いて確認しながら、エリッセは呆れ声を上げた。彼女の力では術の精度が低く、音は聞こえないのだが、ディガンの勝ち誇った顔を見れば言っている内容は想像がつく。
エリッセが身を隠しているのは、ディガンたちが戦い始めた場所から少し離れた教師用の寮の一部屋である。いったんここに転移したディガンは、エリッセだけを置いて戦場に

向かっていった。

「君を奪われないためなら、ディガンも僕もどんな手でも使うさ」

代わってエリッセの側に残っているのは、グラシカルだ。同じく戦況を確認しながら、難しい顔をしている。

「……そ、そう、です、か」

素っ気ない口調ながら、内容がどこか甘く感じられて。面映ゆい気持ちでどもるエリッセの反応を一瞥し、グラシカルが付け足す。

「――そうだよ。なにせ君は、一等星より遙かに貴重な〈太陽〉なんだから」

「……そうですよね……」

この状況で何をのんきなことを考えているのかと、エリッセはひそかに恥じ入った。そしてこの状況ではグラシカルの側を離れることもできず、せいぜい声を潜めて愚痴る。

「オレ様から離れるな、とか言ったくせに、ディガンさんの馬鹿……」

わざわざグラシカルにエリッセを押しつけ、行ってしまうなんてディガンの戦闘好きも相当なものだ。

名指しされた以上出て行かねば、という負けず嫌いが発動したのかもしれないが、「どうせお前は、こいつと一緒のほうが安心できるだろう?」などという発言はなんだったのか。最近はむしろグラシカルと二人きりのほうが気詰まりなことが多いと分かった上での、

嫌がらせなのだろうか。

「どうかした？」

無意識に顔を伏せていたエリッセは、急に話しかけられて内心焦りながら聞いた。

「いえ、あ、あのなんとかキャンディとかいう人、グラシカル先生は知ってるんですか？」

「あだ名ぐらいは聞いたことがあるね。一等星にも匹敵する〈星〉、なんて誇張された表現かと思っていたけど……、そうでもなさそうだな、くそ」

珍しく、グラシカルの口調が乱れた。エリッセも、思わぬ展開にはっと息を呑む。

「うわ、まさか、そんな……!?」

いくらジャノンという〈流れ星〉が強いとはいえ、迎え撃つはシリウスと『暗黒星』。ついに想い人にいいところを見せられる、と張りきっているはずのハーシエルと、〈煌〉の高さだけでなく実戦経験も豊富なディガンの敵ではないと思っていた。

だが奇襲で先手を取ったのも束の間。今、二人はジャノンの攻撃に防戦一方だ。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ!! 熱よ波となれ、すべてを呑み込め!!」

意気揚々と唱えたジャノンが生み出した熱の大波が、ハーシエルとディガンを呑み干さんと襲い来る。

「ちッ」

舌打ちしたディガンは、すばやく転移の術を唱えて数十歩離れた場所に移動した。一方のハーシエルは、触れずとも皮膚を炙るような強烈な熱波に対抗すべく、懸命に叫び返す。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ!!　風よ友を呼べ、渦巻き逆巻け!!」

小さな嵐に挑みかかられ、熱波は幾分勢いを減じたが、完全には防げなかった。全身のあちこちに小さな火ぶくれを生じさせたハーシエルに対し、ジャノンに届いた攻撃はぬるい風がひと吹きのみ。

「おー、さっすが天才シリウス。攻撃術も実に多彩だ、勉強してるなあ。その点オレは、炎と熱の攻撃ばかりで申し訳ないぐらいだ」

出来のいい生徒を褒める教師のように、ジャノンが笑う。

「だが、ちょっと多彩すぎる。昇星試験ならそのほうが受けがいいだろうが、ひとつひとつの術の練度が低いんじゃないか、天才ぼうや？　試験重視教育の弊害だな」

「黙れ、僕を子供扱いするな!!」

触れられたくないところに触れられ、ハーシエルが眼を剝く。その反応こそがお子様なんだと、ジャノンは面白そうに笑った。

「それと、さっきからやたらとひとりで前に出て来るが、ちょっとはそこの『暗黒星』に

も戦わせてやればどうだ？　猪突猛進ばかりじゃ、実戦では勝てないぜ。あとオレ、もうちょっと『暗黒星』の戦いも見たいなって」

「うるさい、お前はせっかくこの平和な世界に出て来てくれた敵なんだ！　僕の女にいいところを見せるためにも、必ずこの手で倒してやる!!」

功績を立て、ティリスに結婚を承諾させようと、ひとり『暗黒星』にさえ挑んできたハーシエルだ。再び巡ってきた好機を、必ず摑むとひそかに誓っていた。

そのために、不本意ながらグラシカル経由で頼み込んで、ティリスには先ほど〈導きの灯〉を出て他の一時避難者たちと合流してもらった。これで彼女に累が及ぶことを心配せず、心おきなく戦える。

「……なんか知らんが、最近のガキはススんでるのな」

やや気後れした様子でつぶやいたジャノンの眼が、好戦的に輝いた。

「けど、生憎だな。実戦知らずの優等生はここまでだ!!　天空の覇者、三つ子の太陽たちよ!!」

ジャノンの〈煌〉がまた高まる。ただでさえ背の高い彼の姿が頭の上から覆い被さってくるような威圧感を覚え、ハーシエルは直感した。

負ける。

「負けない……!!」

冷たい予感を否定して、無意識に引けていた腰と足に力を入れる。
逃げるでもなく、防御するでもなく。真っ向対決の姿勢を変えないハーシエルに、ジャノンは白けた声で言った。
「一応逃げるぐらいの猶予はやったのにな、見込み違いか。さよならだ、天才くん。火の山よ来たれ、火の海を生め」
威圧感が、すべてを押し流す赤い海に変化した。
なすすべもなくそれに押し包まれる寸前、眼の前の光景が切り替わった。

気がつくと、生徒用の寮と寮の間の狭い隙間に立っていた。ジャノンと彼が放つ〈煌〉は、空の羅盤上にはあるが目視できる距離ではない。
「全く、これだからお子様は……」
はっと我に返ったハーシエルは、背後でため息をついている黒髪の男を憤然と振り返る。
「邪魔するな、ディガン、いたっ!!」
ハーシエルを連れてこの場に避難してきたディガンは、すかさず銀色の頭をはたいた。
「黙れマセガキ!!　オレ様は貴様より年上である上に教師だぞ、最低でも『様』ぐらいつけろ!!」

「ディ様ガン」
「ぶち殺すぞクソガキ」
半眼でハーシエルを睨んだディガンだが、すぐに余裕を取り戻す。
「ふん、まあいいだろう。オレ様は男の見苦しい嫉妬には慣れている。ここは寛大なところを見せてやろう」
「お前のグラシカル先生への嫉妬も、結構見苦し、いたっ!!」
同じところに第二撃を食らい、ハーシエルは悲鳴を上げた。狭い通路で逃げ場が少ない上に、この時代の〈星〉は〈煌〉なしで繰り出される攻撃に慣れていないのだ。
「誰が誰になんの理由があって嫉妬していると!? ……そ、それと、実戦経験豊富な年上の〈星〉として忠告だ。一瞬でも勝てないと思ったら逃げろ。――お前、さっきのをまともに食らっていたら殺されていたぞ」
やや動揺を見せたものの、後半になるにつれディガンの声音は冷静な、非情とさえ表現できるものになっていた。
経験に裏打ちされた大人の男の態度に虚を衝かれ、ハーシエルは思わずうつむく。
「……勝てないなんて、思ってない」
「思っていた。思っていたのに、ちんけなプライドが邪魔して明らかに格上の相手に向かっていこうとしていた。違うか?」

「……プライドを守りたかった訳じゃない。僕は、ただ……」
絞り出すような声を聞いて、ディガンはまたため息をついた。そして、いきなり話題を変えた。
「このディガン様に考えがある。お前、囮になれ」
急展開に、ハーシエルは露骨に不審そうな顔をした。
「……年齢も立場も下の人間を囮に？　どこまで下種、いたっ!!」
「悠長に言い争っている場合じゃない。いいか、認めがたいことだが、オレ様にとってもあのジャノンとかいう金髪野郎は難敵だ」
無尽蔵に湧き出すかのような〈煌〉を惜しみなく行使する、謎の〈流れ星〉。あのランゼの関係者らしく、性格もアレだが規格外の能力を持つところまで同じだ。
「だから協力しろ。お前が時間を稼いでくれれば」
「囮なら、お前がやれ。あいつは僕が倒す」
ディガンの言葉を遮り、ハーシエルは彼を押し退けようとした。しかしディガンは、身長差を誇示するように腰に手を当て少年の瞳を覗き込む。
「どうやって？」
「……!!」
顔を引きつらせたハーシエルの、いかにも不慣れなパンチをディガンはあっさり手の平

で受け止めた。
「お前はオレやグラシカルのような、自分より年上で背が高い男が嫌いだものな。だが女は、そういうことにうじうじする器の小さい男が嫌いだ」
「……囮を使うような男は、器が小さいと思うけど」
「まあ、そうだな」
意外にあっさりとディガンは認めた。いぶかしげに瞳を細めるハーシエルに、まずは「オレ様は元々もてすぎるぐらいだから、少々器が小さいと思われたぐらいでちょうどいい」と続ける。
真面目に聞くんじゃなかった。そう顔に書いているハーシエルを見下ろす金の眼が、鋭く光った。
「しかしいくら器が大きかろうが、死んだらそこまでだ。まあ、あのティリスとかいう女は、もしもここでお前が死んだら、残りの一生を可愛い生徒の墓守として捧げてくれそうだけどな。それともそれが、お前の望みか？」
どんな形であれ、ティリスの人生を独占する。そんな小さなことを望む、小さな男なのかと。
「お、お前こそ、いつまでショナエルの墓守を続ける気だよ……」
せめてとハーシエルは言い返すが、声は明らかに弱々しかった。それを確認し、ディガ



ンは少年から通路の外へと眼を向ける。
ディガンたちを挑発するように、盛大に放たれるジャノンの〈煌〉。
転移の術で完全に戦線離脱した、とは彼も思っていないだろう。だから挑発しているのだ。出て来い、もう少し遊ぼう、と。
「行きがかり上やむなしとはいえ、オレは現在ここの教師なんだ。担当生徒でなかろうが、どんなむかつくクソガキだろうが、守ってやらねば詐欺師がうるさい」
「詐欺師？」
「こっちの話だ。……それにオレは、もうここで人が死ぬのは見たくない。ましてシリウスはな」
ハーシエルは、気まずそうにうつむいた。
「……ごめん」
「気にするな、オレ様は世界一強くてかっこよくて賢くて器のでかい男なんでな。……ところで今の話、あの小娘には秘密だぞ。妙に気を遣われると鬱陶しいからな」
微妙に器が小さいことを言ってから、ディガンはジャノンには秘密の作戦を手短に伝えた。

「おーい、出て来ーい、出て来ーい、と、おやおや、ひとりで帰ってこられるとは、えらいでちゅねーぼうや。それとも彼我の実力差も分からない馬鹿だから、『暗黒星』に見捨てられたのかい？」

周りの建物をひとしきり壊し、飽きてでたらめな歌を口ずさんでいたジャノンは、眼前に転移してきたハーシエルを見てにやっと笑った。

「オレは強いやつにしか興味がないから、あのまま逃げたなら見逃してやったんだぜ？はは、しかし二百年前のシリウスといい、今のシリウスといい、最強の一等星なんて名前ばかりがひとり歩きしてるよなあ。ああ、もしかして、ボクチャンの称号はおとーさまに買ってもらったものだったりして？」

安っぽい挑発に、ハーシエルは口元を歪めた。怒りを含んだ〈煌〉が青白く燃え上がる。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ……!!」

「へえ、まだ三つ返せるのか。ちっちゃいくせにタフだねえ」

本気の賞賛交じりの揶揄に、さらにがりがり、と固形物を噛む音が交じる。キャンディ片手に余裕綽々の姿を眺め、タフなのはどっちだ、とハーシエルは心の中で毒づいた。

詠唱に織り込む恒星の数が多いほど、大量の〈煌〉を消耗する。姿を見せて以来ずっとすべての太陽の光を返し続けているジャノンに対抗するためには、自然ハーシエルも同じことをせざるを得ないが、その消耗は半端なものではない。

なのに、明らかにジャノンには余裕がある。いかに彼がハーシエルの嫌いな、背が高くて年上の男だからといって、この差は異常だ。

「ニコラ」と呼ばれていた亜麻色の髪の青年が、転移したきり全く戦闘に参加してこないのも気になる。

しかしこれは、実戦なのだ。昇星試験の時のように、より難易度の高い術を繰り出せればいいというものではない。

どんな手を使っても、最後に立っていた者だけが勝者だ。……つい先ほど、ディガンがそれを教えてくれた。

「つまり僕より年上で背が高い男をすべて打ち倒して、最後に僕だけ残ればティリス先生は僕のものにならざるを得ない……!!」

危険な発言にジャノンが突っ込んでくる前に、ひと息に叫ぶ。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ。我が力示す力となれ、我が力示す剣となれ!!」

威力最弱、発動は最速の攻撃術はあっという間に完成し、光り輝く力の塊がジャノンに迫っていった。大技ばかりのハーシエルの攻撃パターンに慣れ始めていたジャノンは、虚を衝かれて防御が遅れる。

しかし、しょせんは威力最弱の攻撃術。即座に防御術を展開させたジャノンの手の甲を、薄く焼いただけで消えてしまった。

それでいい。最初から、一瞬の隙を作る以外の目的はなかった。

「星喰い星。暗黒の星。すべての光を食む闇星。光を喰らう定めの者」

いつの間にかハーシエルの背後に転移してきたディガンが、ジャノンにできたわずかな隙を縫って、禁じられた呪文を口にする。

「始原の黎、至高の陽、終焉の夕、起源の陰、至純の闇、終末の影。一等星ディガン・マキナウスのあぎとへ、輝きを捧げよ!!」

はっと眼を見開いたジャノンが、薄い火傷をした手を突き出して防御しようとする。だが禁呪『暗黒星』は、他者の〈煌〉を喰らう闇星だ。発動した暗黒の〈煌〉はディガンを中心にみるみる広がって、ジャノンを防御術ごと丸呑みした。

繭のような形状の黒い〈煌〉の塊を、ハーシエルは荒い息を吐きながら見つめている。ジャノンの猛攻の隙を縫い、ディガンが持ちかけてきた戦法は無事に成ったようだ。

ハーシエルの空の羅盤から、嫌味なぐらいに大きく輝いていたジャノンという〈星〉は消えた。もう、二度と輝くことはないだろう。

「外から見たら、こんな風になってるのか……」

ハーシエルも一度、『暗黒星』を喰らったことがあるのだ。一瞬だったはずなのに、途

方もなく長く感じられた闇の中での時間を思い出し、改めてぞっとする。
「それにしても、この状態の僕を助けようとしてくれたなんて、さすがは僕の未来の妻だな……やっぱり結婚しかない」
ティリスの無謀な突撃を思い出し、口元をかすかに緩めたのも束の間、別の意味でぞっとした。
黒い繭状の〈煌〉の側面から、いきなり赤い腕が生えたのだ。同時に空の羅盤内に、消えたはずの〈星〉が出現する。
「なっ……、『暗黒星』!?」
術と術者を同時に示すその名に応えるように、黒い繭が中から真っ二つに裂かれた。
中から現れたのは二つの人影。物珍しげに消えゆく黒い〈煌〉を見つめているジャノンと、肩で息をしているディガン。
「ディガン……、まさか」
「『暗黒星』が効かない、だと……!?」
数歩下がって体勢を整えるディガンの金の瞳を、同じ色をしたジャノンのそれが含み笑いをしながら見つめている。
「せっかくタイミングを計ってくれてたようだが、無駄無駄。だってオレの〈煌〉は、本を正せば『暗黒星』と同じところから来てるからな」

『暗黒星』を使わせるために、ハーシエルが囮となったことは読まれていたようだ。その上思わせぶりなひと言に、ディガンは表情を強張らせた。

「なあ、〈夜の底闇〉はひたっすら暗くて、寂しくて、見事になんにもないところだったよな？　『暗黒星』。あんなところに二百年もいたなんて、本当に尊敬するぜ」

『暗黒星』について、ランゼから情報を受け取っているとの予想はあった。だがジャノンの言い方は、明らかに実体験として〈夜の底闇〉――ディガンが二百年間封印されていた、太陽も月もない暗闇を知る者のものだ。

「……貴様も……、過去の人間なのか？」

「過去っちゃ過去だな。だってオレ、もう死んだことになってるし」

どうでもよさそうに言うなり、ジャノンはまた〈煌〉を高めていく。

「さて、おしゃべりはここまでだ。天才くんは案外実戦慣れしていないようだし、『暗黒星』は思ったほどじゃないし。せめて〈太陽〉ぐらいは、オレの期待に応えてくれるよなあ？」

〈太陽〉。

そのひと言で、ディガンの表情が険しく引き締まる。

「――あの〈太陽〉は、オレ様のものだ。貴様などには渡さない」

「ふうん、かなりご執心のようだ。いいね、ますます顔を見てみたくなった。すげー美

少女とか美女だと、嬉しいなあ」

「実物に幻滅する前に殺してやるぞ、感謝しろ!!　天空の覇者、三つ子の太陽たちよ!!　冷たい死の針を五体に打ち込め!!」

『暗黒星』による消耗を無視して、ディガンは禁呪に近いレベルの攻撃術を放った。針状に凝縮された〈煌〉が、ジャノンの腹に無数に突き刺さる。

しかしディガンもハーシエルも、ジャノンがあまりにも無防備にその攻撃を受けたことに驚いた。防御されることを予測した上で、それを上回るための強力な攻撃だったのに。だがジャノンは、相当なダメージを受けたに違いないのに、にいっと笑って詠唱を始めた。強大な〈煌〉が、金の瞳を燃え上がらせている。

「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ！　海枯らす劫火よ来たれ、乱れ咲き狂え!!」

赤い男を中心に、紅蓮の炎が瞬時に巻き起こり――

周囲に向かって弾けた。

「なっ……!?」

ジャノンを中心とした、熱波の無差別攻撃だ。ディガンもハーシエルも慌てて防御術を展開させたが、周囲の石畳に亀裂が走り、四方の講義棟の壁にまでひびが入る。

一気に温度が上がったために、熱源となった広場に向かって突風まで生じた。激しい風を腕を上げて防ぎながら、ディガンは明け始めた空の向こうを反射的に見る。

その動きを、同じ金の瞳が見ていた。
「あっちか」
この状況下でディガンが気にする、その方角に目当ての「彼女」がいるに違いない。
赤い衣服に赤々と己の血を滴らせながら、「マッド・キャンディ」は転移の術を唱えた。

「あっ、ハーシエルくん、戻って……え、『暗黒星』、破られ……えっ、転移!?　どこに!?」
めくるめく展開に、エリッセはついていくのがやっとだ。一方ジャノンの意図を察知したグラシカルは、彼女に向かって厳しく言いつける。
「エリッセ、君は何があってもここを動くな。万一僕たちに何かあったら、王宮を頼りなさい。状況は向こうも見守っているはずだ、分かったね!?」
「先生……!?」
身を強張らせるエリッセを無視して、グラシカルは物陰に隠れて窓の外を見やる。
眼に見える距離の地面に出現したジャノンは、エリッセたちがいる棟の隣の教育棟に目星をつけたようだ。後を追ってディガンたちが転移してきたことなどお構いなしに、「早く出て来いよー！」などと叫びながら派手な攻撃をかましている。
距離が近くなったせいで、エリッセにも火傷しそうなほどにその〈煌〉は強く感じられ

る。ディガンとハーシエルの〈煌〉はだいぶ減っているのに、ジャノンのそれはいっこうに衰えを見せない。

怖い。

〈太陽〉を見つけて、ジャノンはどうするつもりなのだろう。

――そう思ったのが、たぶんいけなかったのだ。

「エリッセ!?」

グラシカルが険しい表情で振り返るなか、エリッセは声もなく床に崩れ落ちる。

ジャノンの〈煌〉の感触など、最早気にならない。

この身の内から湧き起こる、巨大な熱源に比べれば。

「ごめん、なさ、こ、こんな、時、に」

グラシカルが何か言っているが、熱くて耳がぼんやりしていて、何も聞こえない。

今度こそ制御しなければ。イメージを、足がかりに。

太陽は燃えている。

ねえエリッセちゃん。どうせ燃え尽きるなら、今でもいいんじゃないの？

「やめて！　邪魔しないで……!!」

耳をふさぎ、悲鳴を上げるエリッセの上半身を抱き上げていたグラシカルが立ち上がった。決意を秘めた無表情の下、カノープスの一等星が悲痛な輝きを放った。

まだエリッセには何も聞こえなかったが、大きな〈煌〉の爆発と衝撃は伝わった。さっきまで自分を抱き上げていたはずの師の体が、物か何かのように無抵抗に倒れ込んでくる。

「……え……、あ」

エリッセの背中にも彼を襲った衝撃の一部が届いていた。防御の術が織り込まれているはずの制服があちこち裂けてしまったようだが、そんなものはささいなことだった。

見下ろす白い制服に染みた赤い色が恐ろしいほどに鮮やかで、眼が離せない。

「逃げろ……」

麻痺していた聴覚が最初に捉えたのは、左腰から太股をべったりと血に染めたグラシカルのうめき。

「あっ、てっ、て……」

そしてもうひとり、〈太陽〉の暴走に気づいて転移してきたジャノンのぼやきだった。

「くそ、人様の転移の術に無理やり干渉してくるとは、性格の悪い野郎だな……」

ぶつぶつうめくジャノンの言葉で、エリッセは何が起こったかを知った。

グラシカルはジャノンがここに転移してくることを悟り、着地点を狙いすまして妨害し

たのだ。底なしの〈煌〉を誇るジャノンを普通に迎え撃つよりも、そのほうが分があると思ったのだろう。

ヒントはおそらく、エリッセに大怪我を負わせた転移の術の事故。しかし、目論見どおりであれば相打ちとなるはずだったのだろうが、意識を失いかけているグラシカルとは対照的にジャノンは平気で立っている。

「ありゃ、嬢ちゃんが例の〈太陽〉か。ふーん、まあ、五年後に期待ってところな。オレは三年後に死ぬけど」

エリッセの顔を見るなり、ディガンほどではないが、かなり失礼なことを言えるぐらい元気だ。だがエリッセは、間近で見たその姿に悲鳴を上げてしまった。

「……きゃあああああああッ!!　よ、よよ、よく、それで、立ってられますね……!?」

衣服が赤いせいで若干分かりにくいが、ジャノンも背中からだらだら血を流している。ぐったりして動けないグラシカル以上の出血ではないのか。

「おっと、そうだな、うわ、穴空いてら」

「きゃーっ、きゃーのきゃー!!　見せないでー!!」

慌てて眼をつぶったが、妙に白っぽい筋組織の一部が見えてしまった気がする。二百年の平和に浸かった身には、刺激が強すぎた。

だが驚きに一瞬遠ざかっていた熱が、再びエリッセを支配し始める。

「あ……、あっ」

グラシカルに言われた通り、逃げなくてはならないのに。国の財産である〈星〉として、〈太陽〉であるこの身を守らなくてはならないのに。

いいや、〈太陽〉を制御し、ディガンたちと協力してこの男を倒し、グラシカルを助けなければならないのに。

また音が聞こえなくなってきた。何も考えられない。

「嬢ちゃん？　おい、どうした、そんなに驚かせたか？」

さすがにダメージが大きいのか、大雑把に術で血止めしたジャノンがいぶかしげな声を上げる。

その背後に人影が生じた。振り向いたジャノンの瞳を睨みつけ、黒髪の男が声高に叫ぶ。

「天空の覇者、太陽が四、我が弟子たる太陽よ！」

エリッセには、その声は耳では聞こえなかった。だが、分かった。

呼ばれている。

気づけば馴染んだ〈煌〉に導かれる。欲されている。――奇跡を、願いを叶えるために。

「我が力示す力となれ、我が力示す剣となれ!!」

最弱の攻撃術がジャノンを襲う。その刹那、ジャノンは叫んだ。

「天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ!!　我が身を距離より解き放て!!」

瞬時に発動した転移の術が、間一髪彼を部屋の隅に退避させる。ほぼ同時に発動した攻撃が、ジャノンがいた空間を一直線に貫いた。

そのまま建物の側面までぶち抜いた光は、隣の建物にぶつかって巨大な爆発を起こす。

ジャノンが攻撃を受けずに回避したのも、〈煌〉を温存するようにひとつの太陽の名だけを使ったのも、ここに来てから初めてだった。

元々何重にも防御術を重ねられた星団の建物でなければ、光が貫通した部分より上は崩れ落ちていただろう。

恐るべき威力を目の当たりにしたエリッセは、呆然としつつも『暗黒星』を呼んだ。

「ディガン、さん……!!」

安堵のあまり泣きそうになりながら、エリッセは身を起こそうとした。その手を摑んで立たせ、ディガンは彼女を自分の後ろに庇う。

「き、来て下さってありがとうございます、ディガンさん!!　グラシカル先生を」

「後回しだ。まずはあいつをやる」

床に倒れたままのグラシカルを一瞬見やってから、ディガンはジャノンをきつく見据えた。

確かにグラシカルは、まだ死んではいないようだ。苦しげな低いうめきや、胸が激しく上下している様からそれが分かる。むしろ心配なのは……

「ディガンさん……ハーシエルくんの、〈煌〉、が」

「ちょっとやられた。気絶しているだけだ」

ディガンの言うことを信じるなら、さっきからハーシエルの〈煌〉が感じられないのはそのせいだろう。自分を絶望させないための方便ではないことを、エリッセは心から祈った。

「うわー!!」

一方のジャノンは、先ほどまでとは打って変わったきらきらした眼で二人を見つめている。

「すっげえ!!　これが新しい〈太陽〉の力か!!　なあなあ、今の、どうやったんだ!?」

気安い態度に、ディガンは冷ややかに応える。

「ただ〈太陽〉の光を返しただけだが？　分からなかったのか、凡夫は悲しいな」

偉そうにディガンが言うのが、事実だということはエリッセも直感的に理解していた。彼は暴走しかけた〈太陽〉を詠唱に織り込み、奇跡として跳ね返すことを成功させたのだ。

まだ熱源は腹の奥に凝っているが、内側から溶かされていくような恐怖は薄れている。エリッセ自身を破壊してあふれ出しかけた輝きを、ディガンが消費してくれたからだろう。

――だが、消費され尽くしたら？

冷たい予感に身震いしたエリッセを無視して、ジャノンはディガンに質問した。

「へー、今なんて詠唱した？　我が愛しの太陽、だっけ？」

「違う!!　十人並みの太陽と言ったんだ!!」

「わ、私は〈太陽〉としても、十人並みなんですか……？」

この期に及んで馬鹿にされなくてはならないのか、と悲しい気持ちになっているエリッセを置き去りに、ジャノンのボルテージは上がる一方だ。

「よーし、じゃあオレも！　天空の覇者、えー、じゃあ十人並みの太陽よ!!　我が力示す力となれ、我が力示す剣となれ!!」

ぶわりとふくれ上がった彼の〈煌〉が、失礼極まりない詠唱の効果を引き起こす、はずだった。

「きゃきゃー！　天空の……、あれ？」

怯えながら防御術を展開させようとしていたエリッセが、おかしな顔をする。

「あれ？　なんだ？　なんの手応えもないぞ」

ジャノンも不思議そうに光を生まない己の手を眺めたが、すぐにからくりに思い当たったようだ。

「……はーん、なるほど、そっか、オレは初対面だもんな。嬢ちゃんのことなんか全然知

らないし、イメージが摑めてないから光も返せないのか」

〈太陽〉を制御する時同様、〈星〉側も〈太陽〉の明確なイメージがないとその力を使うことができない様子だ。エリッセだって、「十人並みの太陽」と呼ばれても応じる気にはなれないが。

「ふーん、じゃあいっちょさらっていって、オレが嬢ちゃんのイメージを摑めるまで待つか？」

ディガンの背中に隠れているエリッセを、ジャノンが無遠慮に覗き込んでくる。

「い、いいいいい、嫌ですッ!!」

激しく首を振っての返答に、ジャノンもにっこり笑う。

「嫌か？　そうだよな、実はオレもだ」

「オレ様もだ!!」

無視するな、と言わんばかりにディガンが拳を繰り出す。戦争経験者であるディガンは、〈煌〉一辺倒ではなく、〈星〉たちが不得手とする一般的な体術も身につけているのだ。

「っと!!」

ここで普通に殴られるとは思わなかったらしく、ジャノンはまともに頬を打たれてよろめいた。が、その眼はむしろ興奮にぎらぎらと輝き始めている。

「やっぱり天才ぼっちゃんよりは、お前のほうが戦ってて面白そうだな、『暗黒星』」

餓えた獣のように笑うなり、ジャノンはある術の詠唱を始めた。
「天空の覇者、三つ子の太陽たちよ！　彼の者を距離より解き放て!!」
「貴様、逃げ……っ!?」
言うだけ言って転移の術で離脱する気だと思ったのだろう。逃げるな、というディガンの台詞の後半が、その存在ごとぶつんと消えた。

「転移の術ってのは、面白い使い方があるんだなあ。やっぱ実戦はいいぜ、いろんなことが起こる」
「……あ……、あ」
したり顔でうなずいているジャノンとまともに向き合う格好になったエリッセは、声もなくよろめき、壁に貼りついた。
転移の術のアレンジにより、ディガンはいずこかへと飛ばされたようだ。しかもただ飛ばされただけならいいが、このジャノンがそんな生やさしい真似をするとは思えない。
おまけに身の内に眠る莫大な力は、またじわじわと暴走の気配を見せ始めている。
「なあ〈太陽〉の嬢ちゃん、オレは〈超新星〉。『暗黒星』にヒントを得た実験により、〈煌〉を大幅に強化された〈星〉だ」

体温が上がり始めたせいか、不気味な残響を伴いながら、聞き慣れない単語が耳に飛び込んでくる。

「だ、から、眼の色……？　ディガンさんと、一緒……」

耳鳴りに苦しみつつ尋ねると、ジャノンはうなずいて、

「ああ、そうみたいだな。あと、無理に〈煌〉を増幅した反動で寿命が減った。オレ、三年後に死ぬんだ」

「えっ……？」

何度か口癖のように言っていた言葉ではあったが、まさかそんな理由があるとは思わなかった。

相槌に困るエリッセだが、ジャノンの口調に悲愴感は微塵もない。

「はは、そんな顔するなよ。オレは元々、強い〈星〉と思う存分喧嘩をしたくてちょこっとあちこちで暴れすぎて、投獄されてたのさ。拘束されたまま無駄に長生きするより、太く短く楽しい人生のほうがいいだろ？」

おそらくは第二次南北戦争をにらんだ生体実験により、〈煌〉と寿命を引き替えにした〈超新星〉。

恨みなり憎しみなり抱くのが普通だろうに、彼は己が置かれた境遇を楽しんでいるようだ。

「だから、悪いな嬢ちゃん。オレには時間がないんだ。死ぬまでにせっかく得た〈煌〉を使って強いやつといっぱい戦いたいし、キャンディも死ぬほど食いたい。――嬢ちゃんのことをよく知るまで、待てそうにない」

言いながら、ジャノンは摑み取ったキャンディを口に放り込んで噛み砕いた。行儀良く舐めて味わう時間すら惜しい、と言いたげに。

「嬢ちゃんの〈太陽〉を使いこなせれば、面白そうだとも思うんだけどなあ。でも今の状態じゃ、オレだけ嬢ちゃんの光を返せず負けることになりそうだ。それってフェアじゃないだろ？」

「ちょ、〈超新星〉なんて存在そのものが、フェアじゃないと思いますけど……!?」

エリッセの突っ込みは無視された。

「そういう訳なんで、殺す。天空の覇者、三つ子の太陽よ」

ジャノンの〈煌〉がふくれ上がっていく。せめて防御術を展開させたい、と思うのに、体の奥で暴れる〈太陽〉が邪魔でそれさえできない。

〈太陽〉として燃え尽きる前に、熱と炎の操作を得意とする〈超新星〉に蒸発させられてしまうのか。

「熱よ波となれ、すべてを呑み込め!!」

あっという間に完成した術が全身を取り巻くより先に、エリッセは燃え尽きていく自分

を幻視していた。

だが、恐怖は現実とはならなかった。熱と衝撃は、エリッセの手前のものにぶつかって止まった。

「――グラシカル、せん、せ」

床に血で貼りついた足を引き剝がし、立ち上がったグラシカルがその身をもって生徒を庇ったのだ。

「おー、さすがレドレリカの担当教師は優しいなあ。ギガンスティの星団教師ときたら、みんな軍人気質だからそりゃあ厳しくてさー。まあ貴重な〈太陽〉だし、当然か？」

ジャノンの思い出話など耳を素通りした。

白い制服の半分を黒こげにしたグラシカルの体が、エリッセに半ばもたれるようにしながらずるずると床に滑り落ちていくのは分かる。

弱々しくも空の羅盤に映り込んでいた彼の〈星〉が消えたことは、分からなくてもいいのに分かる。ただ気絶しているだけだと、楽観視できるような状況では到底ないことまで。

喪ってしまう。

「うわ、あちッ」

熱や炎には慣れ親しんだはずのジャノンが、びっくりしたように身を引いた。金の瞳が、一片の憐れみを込めてエリッセを見つめている。

「……あーあー。こりゃだめだな、嬢ちゃん。オレ以外の失敗作と、同じ末路ってことか。お気の毒に……、おっとぉ、来たか天才少年!!」

ディガンの言うように、気絶していただけだったのだろう。制服をぼろぼろにしたハーシエルが転移の術を用いて室内に出現したため、ジャノンは歓声を上げてそちらに向かっていった。もう、エリッセには興味をなくしたようだ。

それもそうだよね、と、霞む視界の中でぼんやりと思った。——だってもう、使えないんだもの、私。

床に倒れたまま、ぴくりともしないグラシカルの側に人形のように立ったエリッセの体は透明な光に包まれている。

正確には、透明な光に焼かれている。

彼女の体から漏れ出した熱は、見えない炎となって触れる物を焦がしていた。グラシカルの血に汚れた制服を、背にした壁を、倒れた師の体を焼きながら、徐々に範囲を広げていく。

「エリッセ!!」

ハーシエルの呼び声が聞こえた気がする。分からない。幻聴かもしれない。

「小娘!!」
ディガンの声が聞こえた気がする。分からない。幻聴かもしれない。
「小娘、どうした!!　お前は意外に図太く諦めが悪く、打たれ弱そうで打たれ強いのが取り柄だっただろうが!!　何を優雅に自滅を待っているんだ!!」
幻聴にしてはやけにリアルだ、と思ったら幻聴ではなかった。不本意な転移でダメージを受けたのか、服装は乱れ顔色も悪いディガンがすぐ側で叫んでいる。
こちらに伸ばされた大きな手が、透明な光に阻まれて引っ込められた。『暗黒星』ディガンも〈超新星〉ジャノンも躊躇するような力が、今のエリッセからは放たれているようだ。
器となる彼女自身を、食い破りながら。
「ディガン、さん」
本物の人形のようにぎこちないしぐさで、エリッセは彼を呼んだ。
「喰らって」
「……なに？」
にわかに険を増した表情を見ても、今のエリッセは臆さない。
「私を、喰らって。もう、その機会は、なくなっちゃう。私を喰らって、そして、あの人を、倒して」

先ほどディガンがエリッセの〈太陽〉を使って吹き飛ばした隣室に移動し、ハーシエルと戦い続けているジャノンを眼で指して訴える。

ハーシエルは、もしかすると心配して駆けつけたティリスから治癒を受けたのかもしれない。服はぼろぼろだが、思ったよりも元気そうである。

ただし、最悪よりまだましというレベルの「元気」だ。〈煌〉による治癒では体力まで回復はできないし、たとえ万全の状態だったとしてもジャノン相手にどこまでもつか。

「馬鹿な」

わずかに狼狽したディガンだったが、すぐに大声で怒鳴り返してきた。

「ふざけるな、今のお前は〈太陽〉を制御している訳じゃない、ただ暴走をひとごとのように傍観しているだけだ!! グラシカルにあんな態度を取られながら、がんばってきた努力を無に帰すつもりか!?」

「ディガンさんにも、迷惑、かけたのに、ごめん、なさい。でも、もう、だめ。私は、もう、なくなる」

事ここに至っては、ランゼが口にした「燃え尽きる」恐怖など失せている。

だがそう思えるのは、最早今から制御することなど不可能と理解しているからだ。

ならば今、エリッセにできることはひとつだけ。

グラシカルは間に合わなかったかもしれないけれど、ジャノンの暴虐を、彼がこれ以

上親しい人たちを傷つけていくのを、見過ごす訳にはいかない。

「ディガンさん、お願い。みんなを、助けて。このままじゃ、また、〈導きの灯〉で、人が死ぬ。それは、嫌でしょう……？」

『学徒虐殺』とはまるで様相が異なるが、ギガンスティの人間が〈導きの灯〉に入り込み、暴れているのは同じ。

「転移の、術のこと、気にして、くれたもの。私も、あなたの傷を、抉りたく、ない」

恩には恩を、気遣いには気遣いを、優しさには優しさを。

ディガンは嫌がるかもしれないが、それが師グラシカルから受けた教育であり……劣等生を支えてくれた、唯一の誇りなのだから。

「……あのマセガキが、約束を破りやがったんじゃないよな……？　くそ、なんでお前は、たまに強いんだ……」

不快な記憶を呼び覚まされたせいか、ますます険しい表情になるディガンにエリッセは懇願した。

「私も、無駄死に、いや。役に、立たせて。どうせ、消える、なら、あなたにだけでも、恩返し、したいの……!!」

他者の〈煌〉を喰らう闇星、『暗黒星』。〈太陽〉として育てて喰ってやる、と始終脅してくるこの男に散々いじめられてきた。

最近は実験動物のような扱いまで受けていたが、思い返せば去年の騒動の際、自分は死んでいてもおかしくなかったのだ。

ならば今、ディガンに喰われても惜しくない。

せめて彼だけでも、助かってほしい。

「――……分かった」

ややあって、重々しくディガンがうなずいた。声はよく聞こえなかったけれど、しぐさで彼の意思を理解して、エリッセはふわりと微笑んだ。

「あり、がと……、え？」

はかない笑みを最後に眼を閉じようとしたエリッセに、やにわにディガンが背を向ける。

「馬鹿め、誰がお前のような十人並み小娘の言うことなど聞いてやるか!!」

掲げた右手を左手でしっかりと支えた状態のディガンの全身から、赤味を帯びた〈煌〉が放出され始めた。

「地上に光臨た、我が唯一なる太陽よ」

透明な光に焼かれる以外、すべての感覚を失い始めていたエリッセは肌がざわめくのを感じた。

喚ばれている。さっきよりも遙かに、強く。優しく、どこか悲しげに。

「きらめく王の剣を我に」

一等星特有の、固有の色を宿した〈煌〉が、エリッセの放つ光を取り込んでいく。交じり合い、溶け合って、ふくらんでいく。

「我が敵を征服せよ!!」

見る間に長く伸びた〈煌〉による剣は、ルビーのような真紅の光沢を持っている。その切っ先がかろうじて無事だった壁の一部に触れた途端、じゅっ、と音を立てて石材が溶けた。

あ然とするエリッセはおろか、戦いの手を止めてこちらを見ているハーシエルもジャノンも、真っ赤な剣に魅入られたように動けない。

にいっと邪悪な笑みを浮かべたディガンが、手にした剣を大きく振りかぶった。

「避けろよ、マセガキ!!」

壁や天井を易々と切り裂きながら、〈煌〉でできた剣が振り下ろされる。

「えっ……、きゃ、きゃきゃきゃきゃあああああああああッ!!」

久しぶりに盛大な悲鳴を上げたエリッセの視界を、赤い光の爆発が焼き尽くした。

第五章　陽はまた昇る

はっとエリッセが気づいた時、第一の太陽・始原の黎がさんさんと自分を照らしていた。
「あ……、あ、れ？」
困惑しながら身動きすると、火傷を負った指先が空を掻く。
「きゃっ、きゃーきゃー!?」
そのまま真っ逆さまに地面に落ちそうになり、エリッセは慌てて瓦礫が散乱した部屋の中央部に飛び退いた。
天井と壁がないのだ。
ディガンが放った剣型の攻撃術が貫通した結果、建物の反対側まできれいに床しか残っていない。
「た、〈太陽〉は……？　ディガンさんは？」
おろおろしながら、当てどころもなく視線をさまよわせたエリッセの耳にうめき声が届いた。

「う……」

「あっ……、グラシカル先生!!」

瓦礫に挟まれているグラシカルに気づき、エリッセは慌てて駆け寄った。

「エリッセ……、君、大丈夫……」

転移の術への強制干渉に続き、ジャノンの術を至近距離で食らったグラシカルだが、なんとか生きていたようだ。しかしその顔は蒼白で、全身が細かく震えている。

「しゃべらないで!!　て、天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！　その二、至高の陽よ!!彼の者の痛苦を飲み込め!!」

治癒術による応急処置が効いたのか、グラシカルの呼吸が少しだけ穏やかになる。〈煌〉を育てた甲斐があった、とほっと息をつくエリッセの足を、誰かが掴んだ。

「ひっ!?」

一瞬ジャノンかと思って怯えたエリッセだったが、がらがらと細かな欠片を振り落としながら立ち上がったのはディガンだった。

「おい、オレも治せ、小娘」

「ディ、ディガンさんは、自分、で」

できるでしょうと、言いかけて固まる。

ディガンの服の両袖は二の腕付近まで焼け落ち、そこから覗いた逞しい腕は火傷で真

っ赤だ。

「ど……、て、てててて天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ！　その二、至高の陽よ!!　彼の者の痛苦を飲み込め!!」

どうしたのかは、後で聞けばいい。まずは治療だと、エリッセは慌てて詠唱した。

「ふん、さすがしょっちゅう怪我をしていただけあって、治癒術は得意なようだな」

焦げた皮膚が見た目上は蘇生されたのを確かめながら、ディガンは修復術を唱えてすけた衣装と髪を元に戻す。常に身なりへの気配りを忘れない彼らしい態度だが、怪我人が取るべき態度ではない。

「ちょ、とりあえず応急処置はしましたけど、服を直接患部に当てちゃだめです!!　ちゃんと包帯巻いて保護しないと!!」

「いらん。すぐ治る」

鬱陶しそうに断るなり、金の瞳がひたとエリッセを見つめた。

「――地上に光臨た、我が唯一なる太陽よ」

またあの、「喚ばれる」感触がエリッセを襲った。

「癒しの泉に我らを浸せ」

詠唱の完成とともに、暖かな湯に浸かったような安心感がエリッセを取り巻く。全身に負った火傷を含めて怪我が治っていくのが、裂けた皮膚が結合されていく独特のこそばゆ

さで分かった。

「……今の」

「お前の力だ、〈太陽〉」

微苦笑を浮かべて、ディガンはエリッセの金色の頭をぽんと軽く叩いた。痛みが残っているのか、指の動きが若干ぎこちない以外に怪我の痕跡はない。

「私……、え、あの、私のこと……？　じゃあ、私がディガンさんの、その、『地上に光臨た、唯一なる太陽』……？」

思わぬ格上げが信じられず、恥ずかしい名称を繰り返した瞬間、ディガンが目元を薄赤く染めた。

そして、ひと息にこうまくし立てた。

「詠唱はあくまで術の効力を最大限に引き出すためのものでありオレは私情などいっさい挟まずあくまで効果を上げるためだけに語句を選んだのであって勘違いするなよ小娘!!　もっとお前に相応しい単語はあるが術の格調が落ちるから選ばなかっただけだ!!」

「きゃきゃー!?　わ、分かってます、毎回そう呼ばれるのがちょっとくすぐったいなって思っただけで!!」

「……素直じゃないなあ……」

条件反射で弁解したエリッセの足元で、グラシカルもよろよろと立ち上がろうとしてい

る。出血までは治癒しきれなかったようだが、怪我はあらかたふさがっている様子だ。
「本当に。あと、僕じゃなければさっきのは絶対死んでたよ」
同意したのは、銀髪についたすすを払いながら同じく立ち上がったハーシエルだ。しばらくジャノンと一対一で戦っていた彼はなぶるような熱波を散々浴びせられていたが、その傷も薄いピンク色の痕跡だけ残して消えている。
「……まあ、その、やはりお前のような馬鹿な小娘には、『暗黒星』をかけるレベルの荒療治が必要だったようだな」
この二人がタッグを組んで参戦してきては分が悪いと思ったのか、ディガンが話を戻した。もっともハーシエルは「ハーシエルくん、よかった……！」と言いながら駆け寄ってきたティリスに、ここぞとばかりに抱きつくことに夢中だが。
「オレ様に喰われる覚悟まで決めて、ようやく制御が可能になるとは、手間をかけさせやがって。この貸しはでかいからな、覚えておけよ？」
「えっ……、あ！」
言われて、エリッセも気がついた。
つい先ほどまで自分を焼き尽くそうとしていた〈太陽〉は、暴走もしなければ消滅もしていない。ただ静かに、エリッセの中で透明な輝きを放っている。
特に何をどうしている、という意識はない。五感に続く六つ目の感覚として肌に馴染ん

だ、〈煌〉を使う方法と同じだ。

内側から溶かし尽くされる寸前までいったことで、大いなる力はようやく手の中に収まった。

あるいは、『暗黒星』に輝きを返されたことも原因なのかもしれない。

「……すごいな。これが、君の〈太陽〉なんだ」

修復術で身なりを正したグラシカルも、しみじみとした眼でエリッセを見つめている。穏やかなその表情は、見慣れたもの。

二人の視線にどぎまぎしながら、エリッセはディガンに尋ねた。

「あ、あの……、どうして……、私を喰らわなかったんですか？」

暴走した〈太陽〉の輝きを返すのと、『暗黒星』で丸ごと喰らい尽くして己の〈煌〉を増幅させるのと、どちらに勝算があったかはエリッセには分からない。

しかし両腕にあんな火傷を負ったことを考えると、素直に喰らったほうがディガンの利益は大きかったのではないか。

「……お前はたぶんまだ強くなれるからな。今喰らったらもったいないだろうが」

手間をかけた分の報酬としては足りない、と口で言いはするものの、その口調はどこか優しい。

「お前を喰う時期はオレ様が決めるんだから、二度と寝ぼけたことを言うんじゃないぞ。

どんな禁呪でも死人は生き返らないんだ。恩返しをしたいなら、勝手に死ぬな」

傲慢なはずの命令が、治癒術のように作用した。ささくれていた心の表面が潤っていくのを感じる。

だが、表面が治っても、見えないところにはまだ傷口が隠れているのだ。

「……で、でも……、待っててもらっても、私……、その前に、消滅、する、かも」

言えずにいた恐怖を、エリッセはとうとう口にした。

「……なんだと？」

グラシカルも困惑した顔になっているのを感じながら、うつむいて続ける。

「ランゼ先生が、言ったんです。〈太陽〉は自分を焼いて力を出すから……だからたとえ能力を制御できるようになっても、いずれ燃え尽きてしまうだろうって……」

思わぬ言葉に、二人の担当教師は一瞬顔を見合わせた。

そして、深々と息を吐いた。

「――確かに、それも一理あるな。千年後ぐらいには、お前も他の太陽も燃え尽きているかもしれない」

代表してディガンがうそぶいたのを聞いて、エリッセは眼を丸くする。

「え？」

「お前、今この世界にある太陽が、全世界の〈星〉に光を与えながら何百年燃えているか

知ってるのか？」

露骨に呆れた顔で言われ、瞬時に真っ白になった頭になおも声は注がれる。

「少なくとも二百年前空にあったものと、今のものは同じだと思うが？　だからこそオレも、この時代で難なく術を使うことができる」

言うなればぽっと出の〈太陽〉であるエリッセの輝きを、イメージを摑んでいないジャノンが扱うことができなかったのは事実。

「まあお前は人間で、空の太陽とは確かに違うがな。あれより早く燃え尽きる可能性がないとは言いきれないが、文献で見る限り、今まで確認されている〈太陽〉候補はすべて制御に失敗して自滅している。逆に言えば、己の力を制御することが可能になった〈太陽〉が、燃え尽きて死んだ事例はないぞ」

「……そうだね」

苦笑いしながらグラシカルがうなずくのを確認し、エリッセは頭を抱えて絶叫した。

「ま、まままただまされたあああああ!!」

『暗黒星』に続き二回目だ。本当に私の馬鹿、と己の単純さを呪いながら、エリッセは二人に平謝りした。

「ご、ごめんなさい、ディガンさん、グラシカル先生！　私、ずっとそのことが怖くて……!!」

「道理で妙な態度を取ると思っていたんだ。そんなに不安だったのなら、さっさと言え馬鹿。……それとも、まさかグラシカルにだけ相談したりしていないよな？」

ちらりとグラシカルを一瞥し、すねたようにつぶやくディガンにエリッセは焦った。

「い、いえ……その、相談して……それでも、〈太陽〉としてがんばれって言われそうで、私……きゃっ!?」

伸びてきた指が視界をかすめる。

髪でも引っ張られるかと思ったが、予想外にその指はむにんと優しくエリッセの頬をつまんだ。

「そんなすぐ燃え尽きるような〈太陽〉を、誰が命懸けで守るか」

むにっむにっと頬肉をつまみながら、かけられる言葉は限りなく偉そうで、暖かい。

「お前はな、このオレ様が認めた小娘だ。確かに見た目は十人並みだし、きゃーきゃーうるさいことこの上ないが、もう少し自信を持て。このディガン様が、お前の強さを保証してやる」

「ディガン、ひゃん……」

頬を引っ張られているため、かなり間抜けな顔になっていることも忘れ、エリッセは潤んだ瞳でディガンを見上げる。そろそろ中天の位置にかかりつつある第一の太陽の光を浴びて、黒い髪と金の瞳がひときわまぶしく輝いている。

自分勝手で偉そうで、エリッセを振り回すばかりだった男が初めて正式に認めてくれた。

「――またここで、人が死ぬところを見せないでくれたことには、素直に感謝してやる」

さらには、少し寂しそうな、それでいて嬉しそうな笑みまで付け加えられて。

何度も繰り返された自称「世界一かっこいい」が、ようやく実感を持って心に染み通る。

この頬のほてりは、〈太陽〉のせいではないだろう。

「どうしましょう、い、今ディガンさんが、すごくすてきに、きゃあああああッ!?」

降り積もった瓦礫を払い除け、立ち上がった人影に怯えたエリッセは悲鳴を上げて飛び上がった。

「ちっ、いいところで……しつこい男は嫌われるぞ!!」

エリッセの前に、ディガンとグラシカルが素早く進み出る。いつまでもティリスにべたべたしていたハーシエルも、彼女を庇いながら構えを取った。

「――……すっっっ、げー!!」

瓦礫の山を崩して立ち上がったのは、まだ息があったジャノンだった。ディガンの王の剣の直撃を受けたはずなのに、恐ろしい生命力である。

しかし、その〈煌〉が大幅に減じているのは誰の眼にも明らか。消し炭と化して剝がれ

落ちた真っ赤な衣服の代わりに、酸化して黒ずんだ血糊が肌を覆っているような有様だ。

だが金の瞳は好奇心に輝いており、そこに悲惨さは全くない。

「すげー、やっぱ〈太陽〉すげーわ!!　残りの寿命つぎ込む価値がある!!　オレも死ぬ前に今のアレ使いたい!!」

エリッセの〈太陽〉の威力が、よほどお気に召したらしい。無警戒な足取りでずかずかと、間にいるディガンたちなどお構いなしに近づいてきて、

「〈太陽〉の嬢ちゃん、結婚してくれ!!」

行動が読めず、とっさに誰も手出ししなかったのをいいことに、大声で求婚を始めた。

「はあ!?」

突然すぎて思考が麻痺し、次の言葉が出ないエリッセにジャノンは意気揚々と語る。

「だってオレには時間がないんだ、だから結婚！　結婚すれば、お互いのことがよく理解できて、オレにも嬢ちゃんの力が使えるようになるだろ!?」

「い、いや、いや、その、ま、ままま、待って、しょ、初対面ですよ私たち!?　大体結婚って、お互いのことをよく理解している人同士がするものですよね!?」

おまけに初顔合わせで「五年後に期待」と言われた挙げ句、殺されかけた相手だ。しかも結婚の目的が、〈太陽〉の力を手っ取り早く使うため。

冗談じゃない、と首を振るエリッセだがジャノンはめげない。

「それがまどろっこしいから結婚しようって言ってるんだよ!!　なーなー、嬢ちゃん、じゃあ三日ぐらいは恋人やってやるからさあ!!　あっそういや名前もちゃんと聞いてなかったな!!　その前にオレから!!　オレはジャノン・グラスってんだけど、通称」

言葉が不自然に途切れる。物も言わずに足を上げたディガンが、ジャノンの腹を容赦なく蹴飛ばしたのだ。

「寝ぼけるな貴様、誰が誰と結婚するだと!?」

肩を怒らせたディガンは、その場に尻餅をついたジャノンを怒鳴りつける。

「オレがこの小娘に散々迷惑をかけられ、振り回されて、ようやく得るに至った〈太陽〉をそんな安直な方法で手に入れるなど許さん!!　大体オレよりは劣るがそれほど顔もまずくない貴様には、もっと別の選択肢があるだろうが!!」

「えっ……、私、ディガンさんを振り回してたの……？」

他にも言いたいことはあったが、とりあえずエリッセはそこに突っ込んだ。

「はは、そんなことを言えば言うほど自分の首を絞めるだけなのに、馬鹿だなあ」

グラシカルはグラシカルで、よく意味が分からない感想を口にする。

「ティリス先生は渡さないからな!!」

「ハーシエルくん落ち着いて!?」

ハーシエルたちは勝手に盛り上がっている。そんな彼らの前で、腹にも大怪我を負って

いるはずのジャノンは軽快に立ち上がった。
「嬢ちゃん――」
ひっ、と喉を鳴らしたエリッセを、燃えるような情熱を秘めた金の瞳が見つめている。ジャノンがディガンに「顔もまずくない」と言われるぐらい、整った容貌を持っていることに今さら気づいた。
血に汚れた手が腰に吊るされた金属缶に滑り、半分ほど詰まった中身を慎重にまさぐり始める。摑んでは口に放り込む、といった先ほどまでの粗雑さが全くない、真剣なしぐさだった。
ディガンも眉間にしわを寄せて静観するなか、やがてジャノンは丁重に一粒の飴を選び出した。粉砂糖がまぶされた、橙色の飴を儀式めいたしぐさでエリッセに向かって差し出して、
「一番大きい飴……、やるから。な？」
「私なんで待っちゃったんだろう!?」
厳かな雰囲気に飲まれていた自分を、エリッセは心から呪った。
「なんだよ、『暗黒星』も〈太陽〉もケチだなー。しょうがない、じゃあもう一粒」
たちまちいつもの調子に戻り、事もなげにしゃべり始めたジャノンの唇の端から、つーっと赤いものが垂れた。

「え？」

今ごろ腹部への蹴りが効いてきたのかと、驚くエリッセの視界に鮮血が散る。

「が、は……っ……!!」

「きゃ、きゃあああああああっ!?」

ジャノンの口から尋常ではない量の血が噴き出してきて、一部がエリッセのところまで飛んできた。

顔と制服に散った血に騒ぐ彼女の空の羅盤の中に、すっかり存在を忘れていた〈星〉が映り込む。

「始原の黎があの位置、と……やれやれ、吐血までの時間、最短記録でしたね」

どこからともなく転移してきた亜麻色の髪の青年、ニコラ・セイドリックが、血を吐きながらその場に膝を突いたジャノンの肩に触れる。

「お手数をおかけしました。では、私たちはこれで。天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ。我らを距離より解き放て」

淡々とした詠唱を最後に、襲撃者たちはあっさりと消えた。

ディガンとグラシカルは一瞬ジャノンたちを追いかける素振りを見せたが、結局その

場を動かなかった。

「……ふん、今回のところは見逃してやる」

「あのニコラという男も、油断できない力を持っていそうだし……何より僕たちの〈煌〉も体力も限界に近いからね。大きな怪我は君に治してもらったけど、ちょっと休まないともたない」

まだ青い顔をしたグラシカルが言えば、ディガンはエリッセのほうにあごをしゃくってみせた。

「礼ならそこの小娘に言え。オレ様が治癒術にも長けた大天才であることはもちろんだが、あれだけの怪我を負った四人を一度に癒せたのはあいつのおかげだ」

自画自賛は毎度のことながら、ちゃんと自分を認め、褒めてくれる。いつになく優しく、素直にかっこいいと思えるディガン。

そんなすてきなディガンに、エリッセは何かお返しをしたいと思った。

「あのっ、私、ショナエルさんのことを知りたいか、ともランゼ先生に言われましたけど、ディガンさんに悪いと思って聞かないでおきましたから！　安心して下さいね!!」

ランゼが意味ありげに出した追加条件について、自分が示した毅然とした態度を披露する。するとディガンは、微妙に口元を曲げた。

「……気に、ならないのか？　オレと……、ショナエルのことは」

「気にならないこともないですけど、絶対ディガンさんが怒ることを考えると、まあ別にいいかと思いましていひゃいッ!!」

むんずと頬を引っ張られ、悲鳴を上げたエリッセにディガンが怒りの形相で吠えた。

「やっぱりお前なんぞ、『マッド・キャンディ』にくれてやればよかったんだッ!!」

なぜか噴き出したハーシエルの様子も気になったが、他人のことを気にしている場合ではない。

「そこを動くな小娘、今『暗黒星』を使う!!」

「い、嫌ですよ、今さら何言ってるんですかぁぁ!?」

どうにかその手を逃れたエリッセは、なおも追いすがる指先から懸命に距離を取る。

「本当に、素直じゃないなあ……」

二人のやり取りを見守っていたグラシカルが、穏やかな表情で微笑んだ。

「差し当たって、ここを離れないか。君たちのおかげで、ここはいつ崩れてくるか分からないし……あちこちに報告もしないといけない」

星団長へ、王宮へ、山ほど伝えるべきことはある。恐るべき力で破壊された多くの建物も修復が必要だろう。他に怪我人が出ている可能性もある。

「そ、そうですね、それにグラシカル先生は早く休まないと!!」

貧血を起こしているのか、足元がふらふらしている彼をエリッセは慌てて支えた。

「転移の術は私には無理ですし、体への負担も大きいですから、飛翔術にしますね」
ありがとう、とおとなしく肩に回された腕の懐かしいぬくもりが、胸の奥に沈めていた疑いを呼び覚ます。飛翔術の詠唱に代わり、質問が唇から飛び出した。
「――先生は国王陛下のために、私の力を育てたいのですか？」
自分の声に驚いて、エリッセは慌てて謝罪した。
「きゃーっ、きゃきゃーっ!?　やだ、私何言って……!?　ご、ごめんなさい、なんでも」
「……最近妙に僕を避けていたのは、陛下のことを気にしていたのかい？」
グラシカルが、少し驚いたように聞き返してくる。こうなっては後戻りできないと、エリッセはすべての疑いを吐き出すことにした。
「だって……国王陛下は、先生の、その、大切な人……ですよね。あっ誤解しないで下さいね、私はあくまでグラシカル先生のことを、本当の家族みたいに慕ってるだけなんで!!　た、ただ……、その、私に優しくしてくれたのも、全部陛下のためかと思うと……」
「そうだよ」
悪びれもせず、グラシカルがうなずいた。即答に言葉を失っているエリッセの金髪を、彼の手が優しく撫でる。
「だって陛下の覚えがめでたくなれば、君も堂々と胸を張って生きていけるようになるからね。〈太陽〉なんて巨大な力は、ちゃんとした後ろ盾がないとどう利用されるか分かっ

たものじゃないし」

元は王宮に仕えていたグラシカルである。王位を懸けた国内での争い、他国の思惑に振り回されざるを得ない小国の苦悩など、汚い駆け引きを山ほど見てきたのだろう。

「だから君にとっても、陛下は利用価値のある相手だ。仲良くするといいよ」

想いを寄せていたはずの女性にそんな言葉を使うくせに、エリッセに微笑みかける眼は悲しいほどに優しかった。

「最近冷たくしてごめんね。君のためのつもりだったけど……それすらも、僕の思い上がりだったか。……いつもこうなんだよね、僕は」

「いつも」とは、いつのことを指しているのだろう。

疑心暗鬼に満ちていた時のエリッセなら気になって仕方がなかっただろうが、今はそんなことはどうでもいいと思えた。

「いろいろあったけど、僕が君を守りたいと思っていることだけは本当だ。すべては君の未来のため、教師として、家族代わりとして、できる限りのことをしたい。それが僕の贖罪であり、願いだ」

「先生……!!」

エリッセが知っているグラシカルだ。

帰って来てくれたのだ。

喜びのあまりグラシカルに抱きつきそうになったエリッセは、二人でひっくり返りかけて慌てた。『不幸の星』が憑いていた時なら絶対こけていたな、と思い出しても、今はくすぐったい笑みしか浮かんでこない。

「じゃあ、行きます。天空の覇者、太陽が一、始原の黎よ。我に天駆ける翼を与えよ!!」

実質四等星レベルまで上昇したエリッセの〈煌〉は、危なげなく飛翔術を完成させた。そのままグラシカルを支え、焼け焦げた石畳の上に降りていく。

「馬鹿ははっきり言わないと分からないのか、やっぱり馬鹿だな」

同じく飛翔術を使ったディガンが、ぶつぶつ言いながらその後に続く。

「今度こそ功績を立てて、ティリス先生と結婚できると思ったのに……!!」

「ハーシエルくん、はっきり名指しはやめてちょうだい!!　そ、それに私は、あなたが大きな怪我をしなかっただけでとりあえず嬉しいわ!!　あと先生、自分で飛べるから!!」

無理やりティリスの手を引いたハーシエルも後をついてきた。

楽しいはずの試験明けの休日が、休養と後処理であっという間に消費されていく。気づけば本日も第二の太陽・至高の陽が中天を過ぎていた。

「まあ私の試験休みなんて毎回、ひとりで寮に残って、孤独に反省会でしたけどねウフ

フ……」

昇星試験に落ちた後の休暇など、元々楽しくはなかったのだ。強がりながら、エリッセは広い卓の上に散乱した書面を見回す。

「もう、提出する書類、ないですよね……？」

ここは〈導きの灯〉星団、教師用の寮の一部屋だ。エリッセはグラシカルの指導の下、星団長と王宮に向けて送る報告書に眼を通している最中だった。

「ちょっと待ってね、今確認するから。その間に君は飲み物でも飲んで、少し休みなさい」

エリッセが眼を通し、幾枚かは自分の〈煌〉を込めてサインした書類をグラシカルが取り上げて確認を始める。いいかげん喉も渇いてきていたエリッセは、卓の隅に退けてあった水差しの水を含んだ。

「ふー、でもこれさえ終われば、とりあえずはひと安心、ですよね……」

破壊された〈導きの灯〉の修復は、意外なほど早く完了した。ジャノン襲撃からすでに十日余りが経っているが、建物の修理自体は三日ほど前に完全に終わっている。

今では〈太陽〉の力をある程度制御できるようになったエリッセだが、レドレリカの外交の切り札になるかもしれないその能力は無闇に使わないように、と王宮から達しが出ていた。だから今は、〈太陽〉の暴走を抑えているだけの状態だ。

しかし彼女の〈太陽〉なしで、グラシカルやディガン及び戻ってきた教師たち、そして

王宮から派遣された〈綺羅星〉たちは見る間に〈導きの灯〉を再建した。時間が巻き戻るようにすべてが元に戻っていく様を、本当なら今後の参考のために見ておきたかったのだが、

『別に〈綺羅星〉の助けなんぞいらなかったんだがな。小娘、やつらの目的はお前だ。勝手に外に出るなよ』

〈綺羅星〉たちの目論見を読んでそう言いつけたのは、同じ卓を囲んで書類を睨んでいるディガンだ。他国の人間もいまだ興味津々だが、国内の主だった〈星〉たちも〈太陽〉に強い関心を寄せているらしい。

「でも、王宮に行かずにすんで、よかった……」

このまま〈導きの灯〉にエリッセを置いておくのは危ない。以前グラシカルも言っていたように、庇護すべき対象は一ヵ所に集まってくれていたほうが安心できる。

〈綺羅星〉たちはそう力説したそうだが、数日をかけて〈導きの灯〉側と王宮が話し合った結果、その案は却下された。

まず、王宮自体に元王子派という不穏分子が根を張っている点。

次に、〈導きの灯〉には一等星・カノープスのグラシカル、同じく一等星・シリウスのハーシエル、そして『暗黒星』ディガンという最強の〈星〉たちが揃っている点。

他生徒や教師が巻き添えを食う可能性もあるが、〈星〉は元々潜在的な兵士として国庫

に養われている存在だ。無論『学徒虐殺』の轍を踏まぬようにせねばならないが、悲惨な出来事への反省により堅牢に作られた〈導きの灯〉は、ひとつの軍事要塞でもある。

何より下手に事を大きくするとギガンスティ、そしてその背後に控えたステッセルとヴエストラントが不快感を示すおそれがある。——三国の公式見解としては、今回の騒動は所属不明の〈流れ星〉が〈太陽〉目当てに襲ってきたことになっているからだ。近くまでは来ていたらしい〈綺羅星〉たちが援護に来なかったのも、政治的配慮のためだとか。

「ふん、何が所属不明だ、ぬけぬけと」

凝視していた書類を、ディガンがぴっと指で弾いた。過たず眼の前に滑ってきた報告書には、エリッセも知っている男の顔が〈煌〉で焼きつけてある。

ただしその眼の色は、ただの灰色。あのぎらぎらとした金の瞳は、〈超新星〉となった時からなのだろう。

「マッド・キャンディ、か……」

エリッセも、不敵な笑みを浮かべたジャノンの顔と、彼についての報告書を強張った表情で見つめた。

ジャノン・グラス、通称「マッド・キャンディ」。ギガンスティの人間であり、素質ある〈星〉として彼の国の星団に所属していた二等星。

入団時は将来を嘱望されていた彼だが、あっという間に誰彼構わず喧嘩を売る問題児

になった。やがては籍を置いていた星団を飛び出し、〈流れ星〉となって各地で大暴れ。いつも好んでキャンディを噛んでいることから「マッド・キャンディ」と呼ばれている、という説明文が、硬質な文体から妙に浮いている。

ついにはギガンスティを訪れていたステッセルの〈星〉に戦いを仕掛け、激怒したステッセルの意向で投獄。懲役三百年を言い渡されていたが、去年の冬に獄死。敵の多い男だったので、他の囚人に殺された可能性が高い、と報告書は結ばれている。

実際には獄死ではなく、『暗黒星』にヒントを得たという秘密の実験に供されてしまったのだろう。そして寿命と引き替えに、〈超新星〉の力を得た。

「この人、一体何しに来たんですかね……？」

「喧嘩だろう」

「……まあ、報告書にもはっきりそれが出てますけどね……本人もそういうことを言ってましたし……」

苦笑いしつつ、エリッセもうなずかざるを得ない。

悲惨な経歴にもいまいち同情する気が起きないのは、ジャノン本人に悲愴感がまるでないからだ。根っからのバトルマニアには、寿命と引き替えにしてでも得られた力を存分に使い、暴れる快感が何物にも代え難いのだろう。

「しかしあの人、あの感じだとまた来そうですよね……」

最後に血を吐き、ニコラの転移の術で姿を消したジャノン。あれ以来どうなったのか全く情報がないが、あのまま血を吐いて死んだとも思えない。

去り際のニコラの言葉を信じるなら、恐るべき耐久力と膨大な〈煌〉を誇るジャノンの能力にも限界はあるのだ。そこを超えると吐血し、動けなくなってしまうのだろう。

「小娘、お前、まさか……友達から始めよう、なんて言葉にのぼせ上がってるんじゃないだろうな」

ため息をつくエリッセの表情を勘違いしたのか、ディガンが絡んできた。

「わ、分かってますよ、あの人ディガンさんより露骨に私を殺そうとしてたじゃないですか!!　絶対にごめんです!!」

「五年後に期待」の暴言も、「殺す」とあっさり口にした冷酷さも、ともに心に刻まれている。

大体エリッセの好みはグラシカルのような、穏やかで優しい知的なタイプだ。ディガンをより好戦的にしたようなジャノンに求婚されても、別に嬉しくはなかった。

そもそもジャノンの目当てはあくまで〈太陽〉であり、エリッセ個人とは関係ない。大きい飴一粒で未来を買われそうになったことを思い返すと、また腹が立ってきた。

「そりゃあ確かにあの人、割とかっこよかったですけどね！　真剣に『友達から始めよう』って言われたら、ちょっとどきっとしちゃうかもしれませんけど……」

――またここで、人が死ぬところを見せないでくれたことには、素直に感謝してやる。

そう言って切なく微笑んだディガンのほうが、よっぽど。

思い出すと、なぜか顔が赤くなってきた。熱を持ち始めた頬を、エリッセは急いで両手で隠す。

「や、やだ、ディガンさんは、いつだって顔だけは文句なくかっこいいじゃない……!!」

もごもごと口の中でつぶやいた声は、ばん、と卓の表面を叩いて立ち上がったディガンには聞こえていなかったようだ。

「やっぱりのぼせ上がってるんじゃないか、この尻軽(しりがる)が!!」

「……!?　なッ、乙女(おとめ)になんて言葉使うんですかぁ!?　あくまで顔だけ見て言ってるんです、か・お・だ・けッ!!」

別の意味で真っ赤になり、怒鳴り返したエリッセにグラシカルがたまりかねたように噴き出す。

「ちょ、ちょっとグラシカル先生、きゃあやめて、笑わないでー!!」

なぜグラシカルが噴き出したのか分からず、エリッセは悲鳴を上げた。何がつぼに入ったのか知らないが、「尻軽」なんて単語を聞いて笑い出すなんてやめてほしい。

二人の教師のどちらを止めようか、慌てている間にまたディガンが同じ単語を連呼する。

「顔だけ見て惚(ほ)れる女を尻軽と言うんだろうが!!」

「いや、だから、顔だけならかっこいい範疇だったって言ってるんですけど!?　もう、そんな風に私のことを思っていたら、私の〈太陽〉が使えなくなっても知りませんよ!!」
「尻軽」なんてイメージを元に、あれだけ苦労して会得した〈太陽〉の輝きを使われるなんて御免だ。憤るエリッセを見つめていたディガンの眼から、急に強い輝きが消えた。
「あ……、い、いや、でぃ、でぃがん様ニ使ッテモラエルナンテ、私ノ〈太陽〉ッテバ幸セ者ー」
　より深く怒らせたのかと、慌てて虚ろなよいしょをしてみたがディガンはまるで耳に入らない様子だ。
「……そうか、お前は尻軽な訳だ」
「……は？」
「ちょっと好みの男となら、気楽に、手軽に、後腐れなく遊べる、そういう女なんだな？」
「ちょ、ちょっと、なんかひどいこと言われてないですか私!?」
「へえ、エリッセ、そうなの？　面食い傾向があることには気づいてたけど」
　まだ含み笑いをしながら、珍しくグラシカルまで悪乗りしてきた。
「やめて、グラシカル先生に変なことを聞かせないでぇぇぇぇ!!」
　グラシカルに対するイメージまで変わってしまいそうだ。泣きそうなエリッセの絶叫に、ディガンが苦くひとりごちた言葉はかき消されてしまった。

「……それなら、簡単には、壊れないか」

かすかにうつむいていたディガンは、やがて傲然と顔を上げた。金の瞳を艶然ときらめかせながら、意味もなく前髪をかき上げ、命じる。

「小娘、オレに惚れろ」

「――はい？」

突然何が始まったのか分からず、エリッセは聞き返した。

しかしディガンは、思いきり作った顔に薄い笑みを浮かべ、ただこちらを見下ろしているだけだ。

「オレ様に惚れろ、と言ったんだ、小娘」

「……あのー、私、もしかしてディガンさんの耳が遠いのがうつっいったぁ!!」

ランゼの言葉を思い出しながら言うが早いか、すさまじい速度で耳たぶを摑まれた。そのまま顔を近づけられ、大声で説明される。

「耳が遠いのはお前だけだ小娘!!　いいか、オレ様は世界一強くて美しい男だぞ!!　なのに不本意ながら側に置いている女が、オレ様を差し置いて他の男とほいほい付き合うなどおかしいだろうが!!　だからまずオレに惚れろ!!」

「ほ、惚れろって……、私に惚れられてディガンさんはどうするつもりなんですか!?」

「もちろん相手にしない!!　なおかつ〈太陽〉として育った後に喰らう!!」

「なんで私が言うことを聞くと思いました!?」
説明になっていない説明に、エリッセは半泣きで叫び返した。
「それはもちろん、オレ様がいかにもお前の好きそうな見目のいい男だからだ!!　ははあ、オレを呼び出したのもこの美貌が目当てだったんだな!?　人間は自分が持っていないものを相手に求めるからな!!」
「知りませんよ単に強くなりたかっただけです私は!!」
ディガンさんのほうがかっこよかった、なんて余計なことを言わなくてよかった。心底そう思っていると、不意に手首を掴まれ後ろに引っ張られる。
「えっ……、あっ、先生?」
「ディガン、君がエリッセを気に入って、優しくしてくれるのは個人的には歓迎するつもりだよ。けれどまさか、お嫁に行く前の女の子を変な意味で食べる気じゃないだろうね?」
穏やかな笑みを浮かべつつも、眼が全く笑っていないグラシカルがエリッセを背に庇った。
「……貴様、オレが小娘を気に入っているなど、何を勘違いしている?　大体これはオレ様と小娘の問題だ。部外者は引っ込んでろ」
「へえ、部外者ね。最近調子に乗っているようだけど、エリッセの〈太陽〉の力を使えるのは君だけじゃないんだよ?」

にこやかに述べるグラシカルも、ディガンとほぼ同程度にエリッセの〈太陽〉の光を返すことができるのは実験済みだ。ハーシエルも多少は可能なようだが、やはりエリッセとの接点が担当教師と比べれば少ないせいか、「僕の想い人の知り合いである太陽よ」という呼びかけのせいか、ディガンやグラシカルほど自在には扱えない。

ぐっと詰まったディガンを見上げて、グラシカルは静かに宣言した。

「エリッセは僕にとっては、妹や娘同然なんだ。これまではあえて傍観していたけど、『暗黒星』だろうが『マッド・キャンディ』だろうが、本人に了承を取らないで手を出したら殺す。分かったね」

家族のようなものだという宣言に、胸の奥がほんの少し痛むのを感じた。

だが同時に、冷たくも厳しい態度でディガンの無茶から守ってくれる師の態度に、新たな魅力を感じてしまう。

「……こういうグラシカル先生は、ありかも……」

「おい、結局顔がよければなんでもいいんだろうが、この尻軽が!!」

ディガンが何か言っているが、ぽうっとなったエリッセの耳にはあまり届かなかった。

さらに日は経ち、授業開始まであまり日数がなくなった頃。

「エリッセー、大丈夫だったかー!?」
「タタ、リゼイン!!」
ジャノンの侵入により派手に打ち壊されたことなど嘘のように、きれいに直った門を潜って駆けてきた親友たちをエリッセは歓声を上げて出迎えた。側にはディガンとグラシカルもいる。
タタやリゼイン以外にも、ある者は徒歩で、ある者は転移の術を使って、長い休みを終えた生徒たちが続々と門を潜って入ってくる。
休み明け直前の、いわゆる帰校のピークはもう少し先とはいえ、その人数は普段と比べるとかなり少ない。くわえて、エリッセを見てひそひそとささやき合う生徒や保護者が非常に多い。
「ふ、二人とも、その、これからも〈導きの灯〉に通うんだ……？」
おずおずとエリッセが聞くと、タタは周囲の好奇の視線などまるで感じていない様子で笑った。
「ああ、またギガンスティの連中が来たら怖いからって、特にいい家の子供は休暇を延長したりしてるらしいけどな。でも私は、三等星になるためにまた勉強しないといけないし」
今年の昇星試験に、タタもリゼインも残念ながら受からなかったのだ。他人ごとでもつらくて、エリッセはうなだれてしまう。

「ご、ごめん、言いにくいこと……」

「気にするなよ、だってエリッセは、結局今年も試験を受けられなかったんだろ？　まあ、もう等星なんかどうでもいいと思うけど」

ずばずばとした物言いの、変わりのなさが頼もしい。エリッセはしみじみと、ちょっと言葉がストレートすぎるけどいい友達を持ったな、と思った。

〈太陽〉という能力を隠していたこと、隔離されたきりなかなか話す機会もなかったこと……それぞれの実家に戻っていた友人に、エリッセはそれらのことを書き送ったのだ。内心怒っているのではないか、返事が来なかったらどうしようとびくびくしていたのだが、二人は連名で「一緒に〈導きの灯〉に戻るから、迎えに来てほしい」との手紙をくれた。

無論態度が変わらないこの二人が特殊であり、劣等生からいきなり超重要人物になってしまったエリッセに対する周囲の眼は複雑である。あのロージナウに「ぜひ私の生徒に!!」と詰め寄られ、走って逃げたのはつい先日のことだ。

「ねーねー、ところでこの間の騒ぎってさぁ、要するにエリッセを拉致したいぐらい好きな人が押しかけてきて、グラシカル先生とディガン先生とハーシエルくんを巻き込んでの壮大な痴話喧嘩になったってことだよね!?」

それに引き替え、リゼインの変わりのなさは尊敬に値する。

「……いや、違うと思うよ……」

苦笑いしながら答えていた時だった。

「へえ、そうだったんだ」

下から聞こえてきた声に驚いて振り向けば、そこには実家に帰っていたはずの銀髪の少年が立っていた。横には出迎えらしきティリスもいる。

「きゃっ!?　あ、ハ、ハーシエルくん、お帰り……」

「うん、ただいま。……やっぱり、ここが僕の家って感じで、落ち着くよ」

ふう、と大人びたため息をつくハーシエルをティリスが心配そうに見つめていた。

ジャノン戦での傷を癒す、との名目で、数日間だけ家に呼び戻されていたハーシエル。しかし家族との折り合いが悪いハーシエルは、「どうせ〈太陽〉について聞きたいだけだよ」と一刀両断した。

〈導きの灯〉にてジャノンが起こした事件とその顛末が、この先公にされることはないだろう。エリッセの身の内に眠る〈太陽〉についても、いまだ明確な発表はされていない。

とはいえ、自分の〈煌〉を隠しもせず、大胆不敵に攻め入ってきたジャノンの存在がばれないはずがない。器を溶かす寸前まで暴走したエリッセの〈太陽〉も、あの瞬間世界中の〈星〉たちの空の羅盤に現れていたはず。

だからこそ、普段は〈星〉を軽視しているハーシエルの両親もその情報を求めたのだ。しかしハーシエルのこの態度からすると、ろくに話もしないままさっさと逃げ出してきたとみえた。

「ハーシエルくん、あの、大丈夫だった……？」

こわごわと尋ねると、ハーシエルは心配いらない、と乾いた声で告げた。

「いろいろしつこかったけど、僕は何も知らないし、〈星〉じゃない人に話したって分からないって突っぱねておいたよ。……ふん、社交界で目立ちたい程度の気持ちで、国家機密を聞き出そうなんて本当に愚かな連中だ」

「……そ、そうなんだ……ごめん、気を遣ってもらって」

実の家族を「愚かな連中」と切り捨てる、彼の心中を察してエリッセは複雑な気持ちになった。ティリスもこの結果が分かっていて止められなかった自分を責めるように、表情を曇らせている。

しかしハーシエル自身は、すでに絶縁状態の家族への関心などなくなったようだ。いきなり話を戻した。

「それにしても、この間の騒ぎは、リゼインが言うような内容だったんだね。……僕はエリッセのことが好きなのか、へえ」

ハーシエルの青い瞳が、何やら危険な光を宿してエリッセを見つめる。

「……おい、どうしたマセガキ？　二股まで授業で習ったのか？」

生徒たちの会話を聞き流していたディガンが、にわかに険悪な声を出した。対照的に、リゼインは瞳を輝かせ始める。

「きゃっ、やだっ、ここで痴話喧嘩第二弾!?」

細い三つ編みを振り、はしゃぐ彼女の声を聞いてますます周囲の視線が集まり始めた。

「な、ちょっと、そんな……！　ディガンさん、誤解ですからね、余計なことを言わないで!!」

誤解を解かなければ、またディガンが「尻軽」云々と言い出しかねないとエリッセは焦り始めた。最近はディガン以外の男とちょっとしゃべっただけで、ぎゃあぎゃあうるさいのだ。

「誤解？　まだオレの耳が遠いとかふざけたことを抜かすのか？　小娘。今はっきりと、このガキ本人が言ったんだぞ？」

「だから、それが誤解なんですって！　ハーシエルくんが私のことを好きだなんて、そ、そんなはずないでしょう!?　だって、ディガンさんも知ってる通り、ハーシエルくんが好きなのは……」

「エリッセちゃん!?」

焦るあまり、リゼイン以上の大声である女性の名を口にしようとした途端、ティリスに

口をふさがれる。眼鏡の下の童顔は真っ赤だ。
「なに？　エリッセ。僕が好きなのは、誰だって？　僕は誰と結婚すべきだって？」
すかさずハーシエルがそんなことを聞いてきた。天才少年の策を知り、エリッセは戦慄する。
「ハ、ハーシエルくんが天才すぎて怖い!!」
「え？　なに？　今度家に帰る時はその人も連れて帰るべきだって？」
「きょ、教師として、親御さんとは一度お話ししたいとは思っているわ、教師としては!!」
意味もなく眼鏡を直しながら、ティリスが上ずった声を上げた。
恋愛話にまるで興味がなく、さっさと寮に向かってしまったタタを除き、エリッセたちは延々と門の前で騒いでいる。
「やっぱり平和が何よりだねえ。君とエリッセが守った場所を誇るといいよ、『暗黒星』。まあ、あまり調子に乗りすぎたら制裁を加えるけど」
ひとり輪から外れた位置で微笑むグラシカルの黒髪を、初夏の風が軽やかに揺らしていった。

終章　闇に光る

窓の外にはこの国には珍しい青空が広がっている。爽やかな空を一見のんびりと眺めながら、聖職者のような豪華な白い長衣を着た男はランゼ・リトリスの報告を受けていた。

「そういう訳で、ジャノンは敗退～。ダメージが大きいため、現在集中治療中ですわ～。ちょっと治るとすぐ『〈太陽〉と結婚する』と寝言を言って暴れるので、ニコラが抑えるのに苦労しているようです～」

ギガンスティ王宮の一室、帝王の個人的な書斎という場所にいても、ランゼの緊張感のないしゃべり方に変わりはない。

「はは、よほど例の〈太陽〉は魅力的なようだな」

窓辺に立っていた男が、長いダークグレイの髪を揺らして振り向いた。

三十歳に届くか届かないほどだろう。背が高く、体格のいい美丈夫であり、髪と同じダークグレイの鋭い双眼に人目を惹く独特の華を備えている。

本来なら清潔なイメージを喚起させる白い衣装が、妙に妖しく見えるほどだ。それはそ

れで似合っているのだが、彼、ギガンスティ帝王リューナー・ギガンスティは常々公言していた。俺に白い衣装は似合わない、と。

「まあ顔は十人並みの、どこから見たってただの小娘なんですけどね～。どう考えても私のほうが、強くて賢くて麗しいと思いますわ～」

ころころと笑いながら、ランゼは艶っぽい視線を送ってくるが、分かりやすい媚態をリューナーは笑い飛ばす。

「確かにな！　お前は強く賢く麗しい、全く油断のならない女さ。まさかあの短期間で、マッド・キャンディをあんな怪物に変えてしまうとは」

皮肉に、ランゼは心外だ、という表情を作ってみせた。

「あら嫌ですわ、大好きな帝王陛下にそんなことを言われるなんて、私は悲しいです～」

「お前のような美女に好かれているのは大変ありがたい。しかしまだ、俺を認めてはくれないんだろう？」

幾度となく繰り返されてきた問いに、今回もランゼはにこやかに同じ言葉を返す。

「帝王陛下は、とってもいい男だし、強い〈星〉でいらっしゃるんですけど～。でも、私たちの王への拝謁は、まだ叶いませんわね～」

「ふん、まあいいさ」

あっさりした返答に、リューナーもあっさりと応じる。

「〈夜の底闇〉に眠る力を手にするのは、ギガンスティ帝国二百年にわたる悲願だ。そう簡単に諦める気はないし、なあ、ランゼ？」

「ええ～。今回の件をもとにして、今後はやはりこちらをメインに進めていくべきと～、私も思いました～」

おっとりと微笑むランゼの〈煌〉が高まり、詠唱とともに空中に凝る。レドレリカ王宮にいたルトエに対し、リューナーが無理やり行ったのと同じ通信用の幻術だ。

中空に浮かび上がったのは、暗闇にうずくまった赤毛の少女。

がりがりに痩せ細り、栄養不足で細くなった髪がざんばらに肩にかかっている。この調子では、伸びた前髪に隠れた素顔にも期待はできないだろう。

しかし彼女の価値は、容姿ではないことをランゼもリューナーも知っていた。少女本人がひそかに自負しているような、〈星〉としての力でもないことも知っていた。

彼女を想い、それゆえに歴史の闇に己を沈めた男に対してだけ、その存在は切り札として作用する。

「はーい、ランゼよ～、元気～？」

『……』

朗らかなランゼの声が聞こえたらしく、少女はびくりと痩せた肩を震わせた。だが膝を抱えたまま、彼女はじっと動かない。

「あらあら～、反応が悪いわね～。そんなだと、天才少年からシリウスの称号を取り返せないわよ～？」

ランゼが口にした単語に、少女の反応が一変する。

『シリウス……、シリウス！』

赤い髪をかきむしり、少女は獣のように叫んだ。

『いや!!　シリウスは私のもの!!　誰にも渡さない!!』

「うん、そうよね～。譲れない気持ちは分かるわ～。でも残念ながら、今は他の人のものなのよね～」

うんうんとうなずきながらも、ランゼは残酷な現実を突きつけた。少女が髪をかきむしる力が強くなる。

「でも大丈夫～。きっとまた、ディガンがあなたのために戦ってくれるから～」

『……ディガン……？』

頭皮に爪を立てかけていた少女は、懐かしい名前に動きを止めた。

「そう、ディガン～。庶民の出のくせに、強くて、賢くて、顔はかっこよくて、いつも一番で～。次のシリウスは間違いなしって言われてた、あのディガン～」

少女の心の傷痕に沿って、ランゼは優しく言葉の刃を動かした。

『ディガン……』

そばかすの散った頬を歪め、少女は空虚につぶやく。
『また、私のために、いなくなってくれる……？』
「ええ、きっとそうしてくれるんじゃないかしら～？　いなくなる前に、いろいろ奪って来てもらいたいものはあるけど～。シリウスの称号とか、『暗黒星』とか、……〈太陽〉とか」
一瞬だけ明瞭な発音をしたランゼは、芝居がかったしぐさで両手を広げた。くるん、とその場で一回転してみせる。
「〈太陽〉が使いこなせるシリウスって、素晴らしいわよ、きっと～。世界最強～。誰も勝てない～。みんなが認める、最高の一等星～」
長めのスカートに隠されていた足首を一瞬だけ覗かせる、といういつもの彼女のテクニックにリューナーは肩を竦めているが、幻影の少女は自分の関心事にしか反応しない。
『お父さんとお母さんも、もう怒らない……？』
「怒るどころか～、さすが私たちの子、期待通り、いいえ、期待以上だって、褒めてくれるわ～。ねえ、リューナー陛下～？」
「ああ、そうだ」
一歩部屋の中央に向かって歩んだリューナーは、胸に手を当て恭しく頭を下げてみせた。

敗戦国の王として生まれ育ち、「贖罪の王」として永遠の謝罪と反省を義務づけられた男である。頭など下げ慣れているはずなのに、何をしても尊大な印象が消えないのが不思議だ。

「頼んだぞ、ショナエル・アルケイシア。お前の力を貸してほしい。そうしてくれれば俺は、似合いもしない衣装をこれ以上着なくてもよくなる」

ダークグレイの瞳の奥、金の光を一瞬きらめかせた帝王の頼みが、聞こえているのだろうか。虚ろに開かれた赤毛の少女の眼は、虚空を見つめて涙を流している。

『ディガン、ディガン、ごめんね……』

本気の後悔をにじませた哀願がその唇から漏れた。

『だっていつも、ディガンが私の邪魔をするから……本当にごめんね……』

闇よりも昏い憎しみもまた、彼女の声にはあふれていた。

「さて、マッド・キャンディが〈太陽〉と結婚するのが早いか、俺がレドレリカの国王陛下をたらし込むのが早いか、ショナエルがディガンを打ち倒すのが早いか、見物だな」

顔を上げたリューナーは、不敵な表情で薄笑いを浮かべた。

終



あとがき

表紙は飴がいっぱいで可愛いですが、中身はキャンディと鞭と炎が飛び交う新刊だよ！
小野上明夜です。「イノセント・スター　真っ赤に笑う超新星」を手に取っていただきまして、ありがとうございました!!

「イノセント」も二巻に入り、学園成分とバトル成分が大幅増!!　ラブ成分も上昇……したよね……？　（弱気）という感じです。「転移の術」が失敗するとどれだけ怖いかは、「ウィ●ードリィ」プレイヤーならわかって下さると信じております。

新キャラも大量投入で、一気ににぎやかになりました。エリッセの友達二人とロージナウは、一巻当初から設定だけはあったものの、頁の関係で出せなかったので今回書けてとても嬉しかったです。

タタとリゼインはエリッセとは全然性格が違う女の子なので、三人の掛け合いは書いて

いて楽しいですね。ラブコメ的にはリゼインはいい突っ込みをしてくれるキャラなのですが、このタイプは本人の恋愛は遠そうな気がします。

ロージナウは、なんかだめな中年で個人的には愛おしいです（※少女小説の登場人物を紹介しています）。意外にディガンと仲が良さそう。だんだん腹黒さを見せてきたグラシカルは、そんな二人を生暖かい眼で見守っていればいいと思います。

味方（？）キャラも充実してきましたが、敵方も一気に増えました。サブタイトルにもなったジャノンは、なんというか、前向きに後ろ向きな人です。バトルマニアタイプは元々得意キャラなので、張り切って書きました。ちなみに私も飴は噛んで食べるほうです。相方のニコラは、相方と言えないレベルに冷めた眼でジャノンを見ていますが、割れ鍋に綴じ蓋というやつですね、きっと！　それなりにうまくやっている二人だと思います。

大ボス・リューナー陛下はベタな！　この上なくベタな王道悪役を!!　と思って書きました。残念なぐらい白い服が似合わない「贖罪の王」と今後どう戦っていくのか、楽しみにしていただければと思います。……しかしディガンも確実に白い服は似合わない。

「不幸の星」からは逃れられたものの、〈太陽〉と「暗黒星」からは逃れられないかわいそうなエリッセですが、状況に慣れてきたのかだんだん突っ込みのキレがよくなってきた気がします。ヒロインらしく、順調に〈変な〉〈星〉を引き寄せていく彼女の不幸を読者のみなさんは楽しんで下さいね!!

ディガンは尊大なのか細かいのかよく分からない男ですが、ひとりだけ戦争経験者なので、バトルシーンではやたらと頼りになりました。その分学園生活からは浮き気味ですが、エリッセとの関わり合いで少しずつ今の時代に馴染んでいってくれればと思います。

グラシカルはそんな二人を、一歩下がって監視、いや、見守ってくれていますが、彼自身の幸福についてはどう思っているのでしょうね?

ちなみに開き直ったハーシエルは、常に想い人との幸福に向けてアクセル全開です。テイリス先生にはがんばって下さいとしか言えないです。

それでは、ポップからシリアスまで幅広く描いて下さるさらちよみ様、二シリーズに付き合って下さっている担当・山内様ともども、また次巻でお会いしましょう。

二〇一二年三月　小野上明夜

■ご意見、ご感想をお寄せください。
《ファンレターの宛て先》
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ビーズログ文庫編集部
小野上明夜　先生・さらちよみ　先生
《アンケートはこちらから》
http://www.enterbrain.co.jp/bslog/bslogbunko/

B's-LOG BUNKO
ビーズログ文庫

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。
エンターブレインカスタマーサポート：0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

お-3-16

イノセント・スター
真っ赤に笑う超新星
小野上明夜

2012年4月26日 初刷発行

発行人　浜村弘一
編集人　森 好正
編集長　森 好正
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1
（代表）0570-060-555
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3
編集　ビーズログ文庫編集部
デザイン　小菅ひとみ（CoCo. Design）
印刷所　凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化）等並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

ISBN978-4-04-727998-8
©Meiya ONOGAMI 2012 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

世界最強(!?)夫婦のちょっとおかしな新婚生活!!

死神姫の再婚

小野上明夜（おのがみめいや）
イラスト／岸田メル（きしだ）

大好評発売中！

①死神姫の再婚
②―薔薇園の時計公爵―
③―腹ぺこ道化と玩具の兵隊―
④―私の可愛い王子様―
⑤―微笑みと赦しの聖者―
⑥―鏡の檻に棲む王―
⑦―孤高なる悪食大公―
⑧―飛べない翼の聖女―
⑨―恋するメイドと愛しの花嫁―
⑩―始まりの乙女と終わりの教師―
⑪―定められし運命の貴方―
⑫―誰にも言えない初恋の君―
⑬―目覚めし女王と夢のお姫様―
短編集 ―五つの絆の幕間劇―

9784047279988

ISBN978-4-04-727998-8
C0193 ¥580E

1920193005806

発行：エンターブレイン

定価：本体580円+税

B's-LOG BUNKO

イノセント・スター **真っ赤に笑う超新星**

『暗黒星』ディガンのおかげ(?)で禁呪を退けたエリッセ。これで平和な生活が送れると思っていたのに、「育ってから喰らう！」と豪語するディガンが教師となって、ずっと一緒の生活に！　むしろ状況悪化!?　と嘆くエリッセだったが、ある日<太陽>の力が暴走し、全世界に知れ渡ってしまった！　そんな彼女を狙い、やってきたのは超最凶の男『マッド・キャンディ』ことジャノン・グラスで――!?